
魔法少女リリカルなのは～銀色の魔道師～

N.N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜

【Nコード】

N6908L

【作者名】

N・N

【あらすじ】

ジュエルシードを集めていたなのところにある日転入生がやってくる。

そしてその子は魔道師だった！

無印編完結！

現在、A・S編

「転校生は魔法使いなの」（前書き）

リリカルなのは初投稿です。

戦闘描写がうまくできてるか自信がありません。
下手だったらすみません。

それでは「魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔導師」始まります。

「転校生は魔法使いなの」

わたしの名前は高町なのは聖祥小学校三年生。ついこの間まで平凡な小学三年生だったんですが今では魔法少女なんてのをやっています。

友達のユーノくんが探してる《ジュエルシード》探しを手伝ってま

全部で21個あるジュエルシードも今では5個集まっています。

説明はこれくらいにして学校に行く準備ができたから学校に行きます。

「お父さん、お母さん、いってきま〜す」

「はいいつてらしゃい」

なのは家を出るとバス停まで走っていった。

バスに乗り込んだのははすぐに友達のところに行った。

「おはよう。アリサちゃん、すずかちゃん。」

「「おはよう」

「ねえ知ってる？今日うちのクラスに転校生が来るらしいよ。」

「男の子だって。」

「へ〜そうなんだ。どんな子なんだろうっね」

とそんな会話をしながら学校に到着。

そのあともなんだかんだで教室に行つて少しすると先生が来て朝のあいさつが始まった。

「え」と皆さんももう知ってるかもしれないけど今日からこのクラスに新しい友達がきます。それじゃあどうぞ入ってきて」

教室中がざわざわするなかその子は入ってきた。

銀色の髪の写真が似合いそうな可愛い顔をした少年だった。

「田中シンです。よろしくお願いします。」

「じゃあ席は、高町さんの隣ね。」

「はい」

歩いてこちらに来るシンくんを見るなのは。

「よろしくね高町なのはさん」

「なのはでいいよ。シンくん。何かわからないことがあったら言うてね。」

笑顔で言ってきたシンに笑顔でかえすなのは。それから先生の話が始まった。

シンは驚いていた。目の前の少女なのはに。

彼女の魔力は自分と同じくらいの大きさだったからだ。

管理局の魔道師だった父から自分の魔力は推定AAAはあると言われていたからだ。

まあいつか。

とこんなこと考えていると先生の話が終わった。

「ねえどうしてこんな時期に転入してきたの？」

と聞いてきたのはなのはの友達のアリサだ。

「ああ、ちよつと家の都合でな。」

ここらへんで最近異変が起きていてそれがロストログイアらしいからそれを封印するために来たのだった。

「ふ〜ん」

とまあこんな感じで学校は終わった。

夜

「う〜ん。見つからないなロストログイア。今日はもうあきらめるか。」

『そうですねマスター。』

答えたのはシンのデバイスであるクロイツ。AI搭載のインテリジ

エントデバイスである。

「帰ろうかクロイツ。」

『オツケーマスター』

その日は何も起こらず過ぎていった。

翌朝。

「はあ、朝だ。今日は週末で学校がないからロストロギア探しがながくできるな。」

ベットの上で伸びをしながらシンは言った。

ベットから出て居間に行くと父がいた。田中健・元管理局魔道師。魔道師ランクS+。

今では管理局を引退。故郷の地球で暮らしている。

「父さん、おはよう。」

「ああシンか。昨日は見つからなかったみたいだな。ロストロギア関連のものはなにが起こるかわからないから早めに封印しろよ。」

「わかってるよ。父さん。今日も探しに行くから心配しないで。」

「あなた、シン朝食の準備ができたわよ。」

「母さん。」

田中エミリー。もと管理局技術者で出身世界はミッドチルダ。父さんが引退するとき一緒に引退した。長い銀髪が特徴的だ。

「今日もロストロギアを探すのね。がんばってきなさいよ。」

「うん。」

朝食を食べ終わった後、家を出た。

最初のうちはロストロギアの反応はないか町を歩き回ったがなにも感じないので昼食をどこかでとろうと思ってお店を探していたら、ふと、ロストロギアが発動したのを感じた。

「こっちか」

シンは反応がしたほうに走っていった。

なのは兄の恭也と一緒に月村家を訪れていた。

楽しくお茶会をしているとジュエルシードが近くにあることに気がついた。

フレット状態のユーノが機転をきかせお茶会から抜け出した。なのはそこでジュエルシードにより大きくなった猫にあった。

いままでは急に襲い掛かれたりしてたから少し呆然としていたなのは気をとりなおして封印しようとする。

そこに猫に向かって黄色の魔力弾が叩き込まれた。

「魔法の光そんな」

ユーノは一人つぶやいた。

「レイジングハートお願い。」

『スタンバイ、レディ。セットアップ』

ピンク色の光に包まれたなのははその中でバリアジャケットとデバイスを準備した。

白色のバリアジャケットを身にまとったなのはは攻撃にさらされている猫のところまで飛んで行き、その背中に乗るとプロテクションを張った。

しかし、猫の足元を攻撃され、猫が倒れたため、地面に降りて攻撃が飛んできた方へレイジングハートを構えた。

すると、攻撃してきたと思われる魔道師が目の前に現れた。金髪の自分と同じくらいの歳の女の子だった。

「同系の魔道師・・・ロストロギアの探索者か」

少女は言った。

これを聞いたユーノはあることを確信する。

「間違いない。僕と同じ世界の住人だ。そしてこの子ジュエルシードの正体を・・・」

少女はなのはを見たあとにレイジングハートを見た。

「バルディッシュと同系のインテリジェントデバイス。ロストロギア、ジュエルシード悪いけどいただいでいきます。」

『サイズフォームセットアップ』

斧の形をしたバルディッシュが変形し鎌の状態になる。

そしてなのはに向かってバルディッシュを振りかぶりながら少女は突っ込んできた。

なのはは飛行魔法で飛んでかわすと、今度は腰だめにバルディッシュを構えていた。

『アークセイバー』

そうバルディッシュが言うと少女はバルディッシュを振った。

すると鎌の刃となっていた魔力の塊が回転しながら飛んできた。それを

『プロテクション』

で防いだのはの上から少女はバルディッシュを振りかぶって攻撃してきた。それをレイジングハートで受け止めるのは。

「なんで、なんで急にこんな・・・」

「答えてもたぶん意味がない」

これらの言葉は交わしたあと二人は離れた。

『デバイスフォーム』

『シユールディングモード』

バルディツシユは最初の形にレイジングハートは先端が音叉状に変化した。そして二人ともがそれを相手に向かって構えた。

『デイベインバスター。スタンバイ』

『フォトンランサー。ゲットセット』

二人はともに撃つタイミングを見計らっていた

その瞬間猫の意識が戻り動いたことによつてなのは視線がそれた。そのとき金髪の少女は「ごめんね」とつぶやきながらフォトンランサーを放った。

黄色の魔力の塊がなのはに襲い掛かった。

寸前でレイジングハートがプロテクションを張ったがそれでもダメージは大きくなのはは気絶した。

「ここか。すでに結界が張られている。誰かがロストロギアを探しているのか？まあいい、いくぞ。クロイツ。」

『オツケーマスター。スタンバイレディ。セットアップ。』

銀色の光に包まれたシンは黒のバリアジャケットとノーマルモードのクロイツを手を取った。デバイスモードのクロイツはレイジングハートみたいな杖の状態である。

「よし行くぞ」

結界の中なので人目を気にすることなく飛行魔法を発動しロストロギアがあるほうへと飛んでいった。

そして現場に着いたシンが見た光景はなのはが魔法で吹き飛ばされ、ロストロギアは封印され、回収されたあとだった。

いそいでなのはのもとに駆けつけたシンはそばにいたフレットに事情を聞いた。

そして治療魔法をなのはに使いながらこれまでのことを聞いた。

「ふうんそんなことがあったんだ。でもユーノ、君がジュエルシードのことでそんなに深く考える必要もないよ。」

「ありがとう。でもやっぱりぼくの責任だよ」

「じゃあぼくもなのはと一緒に手伝うよ。これでも腕に自信はあるからね」

「ところでさっきから気になってただけだ。なんでシンくんはなのはのこと知ってるの？」

「ああ、なのはのクラスメートだからな」

「う、うん」

倒れていたなのはが起き上がる。

「あれ？どうしてシンくんがここにいるの？それにその格好。」

「うん。ぼくも君と同じ魔道師なんだ。」

「そうなんだ。ところでわたし、攻撃されたのにあまり体が痛くな

い。」

「それはシンくんが治療魔法を使ってくれたからだよ。」

「そうなんだ。ありがとう。」

「ところでさっきユーノと話してたんだけど、ぼくもジュエルシード集め手伝うよ。もともとぼくも探してたから。それにさっきみたいに襲われたら危ないからね。」

「ありがとう。」

とびっきりの笑顔で答えるのは。それに少し顔を赤らめたシン。

「なのは、そろそろお茶会に戻ったほうがいいんじゃないかな？」

ユーノが言う。

「そうだね。じゃあ戻るっか。ついでにシンくんも来る？」

「おいおい勝手に人の敷地内に入ってきたんだぞ。なんて言うんだ？」

あきれた顔で言うシン。

「大丈夫だよ。すずかちゃんなら。まかせてよ。」

ドンと胸をはるなのは。

「わかったよそれじゃあ行く。」

バリアジャケットとクロイツを待機状態である銀色の宝石に戻して、
なのはと一緒にお茶会をやっていたところまで歩いていった。なの
はが抜けて一時間はたっていたしシンと一緒にいたからいろいろと
質問攻めにあっただが、それもなんとかごまかして切り抜け4人でお
茶会を楽しんだ。

「転校生は魔法使いなの」(後書き)

どうでしたか？

がんばって更新していこうと思うので評価、感想よろしくお願いします。

次回「ここは湯のまち、海鳴温泉なの」

「ここは湯のまち、海鳴温泉なの」（前書き）

更新ペースこのくらいを維持していきたいです

それでは魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜始まります

「ここは湯のまち、海鳴温泉なの」

なのはと金髪の少女：フェイトとの戦いから数日。日本国内は現在連休中で、高町家とアリサ、すずか、すずかの姉忍とユーノ、そしてシンまでもが海鳴温泉に向かって車で行っていった。

なぜ、シンがいるのかというと数日前の戦いのあと、月村家から帰るときになのはと恭也と一緒に帰り、そのときには家に上がって行ってほしいといわれしかたなく上がり、そこでなのはの父高町士郎と母の桃子に気に入られて、それから数日、喫茶翠屋に行ったりして、高町家と仲良くなり、また、昨日なのはに行こうと誘われたのが原因である。

「あの・・・本当にぼくもついてきちゃってよかったんでしょうか？」
シンは運転席の志郎と助手席の桃子に聞いた。

「いいのよ。それになのはが来てほしいって言ったんでしょ？なら気にしなくていいのよ。」

「でも・・・」

「あ、そうそうシンくんごめんけど旅館の布団が足りないみたいなのだから今日はなのはと同じ布団で寝てね」

「はい？」

なんか聞いてはいけないことを聞いた気がする。

「だからなのはと一緒に寝てね」

桃子は笑顔で言う。

「ちょ、ちょっとお母さんなんでそういう話になってるの？」

アリス、すずかと話してたのはが会話に入ってきた。

「あら？いいじゃない？なのはだって嫌じゃないでしょ？」

「う、うん別に嫌じゃないけど・・・」

顔を真っ赤にしながらつぶやく。

「ほらほらなのはよかったじゃん。だってなのは・・・わくだめそれ言っちゃだめ」

何かを言おうとしたアリスの口をとっさにさえぎるなのは。
助けてもらったときから好きになっちゃったって言えるわけないじゃないと思うのはだった。

「じゃあなのは了承も得たことだしこれはもう決定ね」

うれしそうに桃子が言う。

「（なあユーノ助けてくれ。ぼくの意見がまったく通らない）」

「（フェレット状態のぼくに言われても何もできないよ。我慢しなよ）」

ハアとため息をつくシンであった。

海鳴温泉に到着した一行は当然のごとく最初に温泉に入ることにした。

「（ねえなのは。やっぱりぼくも土郎さんや恭也さん、シンと一緒に男湯のほうへ・・・）」

顔を壁のほうへ向けながら念話で訴えるユーノ。

「（だーめ一緒に入るの）」

「（おいシンくん助けてよ）」

「（嫌だね、さっき助けてくれなかったじゃん）」

少しふてくされた物言いのシン。

「（さっきは絶対にぼくが助けるのは無理だったじゃないか）」

「（知らないよ。とりあえずがんばるんだな）」

「それじゃ入ろうかユーノくん。」

約一名いや約一匹精神的にまいったものがいた。

温泉から上がったシン、なのは、ユーノは廊下歩いていた。

最初はアリサとすずかもいたが卓球をしに行ってしまった。

シンやなのはも誘われたがシンがやらないと言いなのははシンと話がしたかったため断った。

三人で念話も混ぜて話していると前のほうから声がかげられた。

「君達かね？うちの子アレしてくれちゃってる人は」

オレンジ色の髪をしたお姉さんだった。

「はい？なんのことですか？」

なのはが問う。

瞬時に何のことか悟ったシンは逆に聞いてみた。

「あんだこの前なのはを襲ったやつ仲間か？」

「へえあんたはこっちの子と違って賢そうだね」

感心したように言う。

「そりやあんたから魔力を感じるからね」

「まあとりあえず忠告しとくよ、子供は良い子にしてお家で遊んどきなさいね。あんまりおいたが過ぎるとガブリと噛み付くわよ。」

その言葉にカチンときたシン。

「ならここでためしてみるか？」

待機状態のクロイツを取り出すシン。

「だ、だめだよシンくん。こんなところで。やめて」

なのはの必死のお願いに折れたシンはクロイツをしまった。

「あら？やらないのかい？」

「ああ、また次の機会にな」

「それじゃあわたしはまた温泉にでも入ってこよう」と
そう言いながら彼女は去っていった。

オレンジ色の髪の人アルフはシン達と宣戦布告みたいな会話をしたあと温泉に浸かっていた。

「あゝもしもしフェイト？こちらアルフ。」

海鳴温泉の近くにある林の中にフェイトはいた。

「(うん?)」

「(ちょっと見てきたよ例の白い子。)」

「(そう、どうだった?)」

「(うんどうってことないよ。フェイトの敵じゃないね。例の白い子よりそのそばにいた子のほうが強そうだったよ)」

「(そばにいた子?)」

不思議そうに聞くフェイト。

「(男の子が一人いたよ)」

「(そう、こつちも少し進展。次のジュエルシードの位置がだいぶ特定できた。今夜には捕獲できると思うよ。)」

「(ナイスだよフェイト。さすが私のご主人様。)」

「(ありがとうアルフ。それじゃあ夜に落ち合おう。)」

「(はい)」

念話を終了したアルフは温泉でのひと時を楽しんだ。

オレンジ色の髪をした人が去っていくのを見たあと、シンとなのは、ユーノはこれからのことについて話していた。

「シンくん、ユーノくん、このままジュエルシード集めを続けてたらまたあの子とぶつかっちゃうのかな?」

少し悲しそうな顔をしてなのはが言う。

「たぶんな」

「そっか」

「（あのなのは？あれから考えたんだけどやっぱりこれからはぼくとシンで・・・」ストップ。そこから先言ったら怒るよ。ここからはぼく達でやる。なのは巻き込みたくないから。とか言おうとしたんでしょ？」

「（う、うん）」

「だめだよ、最初はユーノくんの手伝いで始めたジュエルシード集めだけど今は自分でやりたいと思ってやってることだから。」

「いいのか？なのは。またこの前みたいにあの子と戦わなくちゃいけないかもしれないんだぞ」

「だいじょうぶだよシンくん」

「そうか。じゃあ今度ぼくが魔法での戦闘を教えるよ。父さんに教えてもらったように。」

「ほんと？ありがとうシンくん。」

笑顔で言うのはをみて頬を赤らめるシン。

「（シンのお父さんは魔導師なの？）」

「ああ、元管理局の魔導師だ。」

「（そうなんだ）」

「さくそろそろ、みんなのところへ行こう。」

「そうだね」

「(うん)」

温泉で借りた部屋へと帰る三人。
部屋でアリサ、すずかと合流した三人は夜までさまざまなかことをして遊んだ。

夜

「さあ子供たちは寝る時間よ。」

桃子が言う。

「母さん、ひとつ反対があるんだが。」

「なに？恭也」

「なんでシンとなのはが同じ布団なんだ？」

少し怒りに震えながら恭也が言う。

「恭也は車が違ったから知らないわよね。これは決定事項よ」

笑顔で言う桃子。

「あきらめる恭也、なのはも嫌がってないし、というかうれしそうだしな」

見るとなのははうれしそうに顔をしてシンと布団にもぐって会話をしていた。

「な？あんなにうれしそうにしてるのに恭也はそれを取り上げるのか？」

士郎は説得する。

「そうそう。なんなら恭ちゃんも忍さんと一緒に寝たら？」

美由紀が話に割り込んできた。

「そういうわけにはいかないだろう」

「はいはい、話はおしまいにして寝ましょ」

桃子が強制的に終了させた。

みんなが寝始めて一時間、シンは一人起きていた。否、眠れなかったのだ。

隣になのはが眠っていてそれを意識しすぎているからだ。

そんなこんなでみんなが寝始めてから一時間も起きているのだ。

シンはなんでこんなことになったんだろうとしきりに考えていた。

すると突然、ジュエルシードが発動したような感じがしたので起き上がった。

なのはとユーノを起こそうとしたがすでに目を覚ましていた。
二人も感じたらしい。

「二人とも、ジュエルシードはすぐ近くだからいってみよう」

「うん」

そして三人はそっと部屋を抜け出した。

「ここは湯のまち、海鳴温泉なの」（後書き）

次話からデバイスの言葉が魔法などは英語で普通の会話は日本語に
します。

急に変更してすみません。

では次回「名前を教えてなの」

「名前を覚えてなの」（前書き）

温泉での楽しいひとときは終わり

そこで出会ったオレンジ色の髪の女性

時刻は夜

ジュエルシードの反応を感じわたしはちは動き出す

魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜始まります

「名前を覚えてなの」

アルフと合流したフェイトはじつとジュエルシードが発動するのを待っていた。

広域探査魔法でだいたいの位置はわかったが正確な場所がわからなかったからだ。

かなりの時間を待ったところでそれは始まった。

ジュエルシードの発動だ。

発動したジュエルシードからは青い光が天に向かって伸びていた。

「うっひゃゝすごいねこれは。これがロストロギアのパワーってやつ?」

「ずいぶん不安定で不完全な状態だけだね。」

「あなたのお母さんはなんであんなものをほしがってるのかね?」

「さあ。でも理由は関係ないよ。母さんがほしがってるだから手に入れないと。バルディッシュ起きて。」

『Get set.』

デバイスフォームのバルディッシュが現れた。

『Sealing Form. Set up.』

槍の形に変形したバルディッシュを手にもつフェイト。

「封印するよ。アルフサポートして」

「へいへい」

突如林の中から発せられた青白い光を見たのは、シン、ユーノはその光がジュエルシードが封印されたときの光だとわかったために急いでその場に向かった。もちろんすでにバリアジャケットは装着済みだ。

「ふたつめ」

封印したジュエルシードを手に取りながらつぶやくフェイト。

とそこに足音が聞こえてきた。

フェイト、アルフはそろってそちらをむく。

そこにはなのは、シン、ユーノがいた。

「あゝらあゝらあゝらあゝら」

「あっ!？」

「子供はいい子にっって言わなかったけか？」

「それをジュエルシードをどうする気だ!？・・・それは危険なものなんだぞ」

「さあねえ。答える理由が見当たらないよ。それにさうあだし親切に言ったよね。いい子でないとがぶつといくよって」

そう言った瞬間、アルフは体を獣の姿にした。

「やっぱりあいつは使い魔だったか」

それまで黙っていたシンが口を開く。

「使い魔？」

「そうさ、あたしはこの子に作ってもらった魔法生命体・・・製作者の魔力で生きる代わりに・・・命と力のすべてを賭けて護ってあげんだ。フェイト先に帰っててすぐに追いつくから」

「うん。無茶しないでね」

「オーケー」

そう言った瞬間アルフは飛び上がりなのはに向かってきた。

それをユーノが防御の魔法で防いだ。

「ちいっ」

「なのは。なのはあの子を頼む。ぼくとユーノでこの使い魔を何とかするから。」

「うん」

「ユーノ、強制転移魔法だ！」

「わかった。」

翠色の魔方陣が展開し、アルフ、ユーノ、シンを白い光が包み込んだ。

「結界に強制転移魔法いい使い魔を持っている。」

「ユーノくんは使い魔とかそんなんじゃないもんわたしの大切な友達」

「それで？どうするの？」

「話し合いで何とかできるってことない？」

「わたしはロストロギアのかげらジュエルシードを集めないといけない。そしてあなたたちも同じ目的ならわたしたちはジュエルシードをかけて戦う敵同士ってことになる。」

「だからそういうことを簡単に決め付けないために話し合いって必要なんだと思う。」

フェイトは何か思うところがあるのか一瞬目を閉じる。

「話し合うだけじゃ・・・言葉だけじゃきつと何も変わらない。伝わらない!」

フェイトはこうなのはに伝えたあとバルディッシュをなのはに向ける。

なのはは突然のことに目を見開く。

刹那、フェイトがなのはの後ろに回りこみバルディッシュを振る。

それをしゃがんでかわしたなのはは飛行魔法を発動し、空へあがる。

「でも・・・だからって・・・」

空に逃げたなのはを追うフェイト。

「賭けて、それぞれのジュエルシードをひとつずつ。」

『Photon Lancer・Aggret set』

なのはよりも高く飛んだフェイトは上からなのはにむかって攻撃を始めた。

強制転移で転移したアルフ、ユーノ、シンはなのはとフェイトが戦っている場所からそう遠くない、むしろ近い場所にいた。

「やってくれるじゃないかい？ 転移魔法なんて」

怒りが含んでいる口調で言うアルフ。

「お前の相手はぼくだ。ユーノは下がっててくれ。」

「わかったでもきをつけるんだよシン。」

心配そうな顔をするユーノ

「わかってるって」

笑顔でユーノに答えるシン。

「温泉であんたわたしとやるきだったよね。」

「ああ、そうだなくぞクロイツ。」

『All right・My master』

「ソードフォームだ」

『Sword Form』

クロイツが変形し、銀色の魔力刃をだした剣へと形を変える。

「いくぞ」

シンとアルフは剣とかぎ爪で切り結ぶ。

「ホーリーランス」

『Holy Lance』

シンの周囲に銀色の槍の形をした魔力弾が形成される。

「いけ」

『Fire』

銀色の槍がアルフに襲い掛かる。

「くっ」

最初の何発かは無傷でかわしたが残りの槍にかすってしまっ。

「あれをかわすのか、でも無傷ってわけでもないな。まあ一応非殺傷設定だから当たっても問題ないんだけどな。とりあえず捕まえとこうか。」

クロイツをデバイスフォームに戻してバインドをアルフにかける。銀色のバインドがアルフの体に巻きつく。

「どうして非殺傷設定でしかもわたしを殺さずに捕まえるんだい？」

アルフはかなり動揺していた。

「ああ、それはただなのは邪魔をしてほしくないだけであなたを殺す気はないからね」

「・・・」

「ところで使い魔を作れるような魔道師がなんでこんな世界に来ている？ ジュエルシードを集めて何をしようとしている？」

「うるさい。そんなの答える義理はない」

アルフはバインドをかけられながらもそっぽを向いた。
そしてそれのため息をつくシンであった。

フェイトとなのははいまだに戦いを続けていた。

『Thunder Smasher』.

『Divin Buster』.

フェイトの金色の砲撃となのはのピンク色の砲撃がぶつかり合った。

その威力はほとんど互角であった。

「レイジングハート、お願い。」

『All right.』

この言葉を放ったあとなのはの砲撃の威力が上がり互角の均衡が崩れた。

そしてそのままダイバインバスターはフェイトに向かって一直線に進んでいった。

それを林のほうから見ていたシン、ユーノ、アルフ。

「なのは、すごい」

かなり感心しているユーノ。

「けど甘いね」

『Scythe Slash.』

「」
「なのは!?!?!」

上を見上げるとフェイトが一直線に鎌を構えて迫ってきていた。

思わず目を瞑ってしまうのは・・・

しかし一向に攻撃はこない・・・

なぜならなのは首で止まっているからだ。

『Pull out.』

レイジングハートから一つのジュエルシードが放出される・・・

「レイジングハートな、なにを」

「多分主人想いのいい子なんだ・・・」

フェイトは出てきたジュエルシードを掴んだ。

「終わりか・・・」

そう呟いたシンはアルフにかけていたバインドを解除した。

「あなた…何を考えてるんだい？」

「言っただろ？なのはの戦いの邪魔をしてほしくないって・・・」

「帰ろう、アルフ」

「……………」

「ほら、ご主人様が呼んでるぞ」

獣型から人型へと姿を変え、フェイトの元へ向かうアルフ。

フェイトはアルフがこちらに来るのを見るとなのはに背を向けて去ろうとする…

「ま、待って」

「出来るなら…もうわたしたちの前に現れないで…次は止められないかもしれない…」

「あなたの…あなたの名前を教えて!!」

「フェイト・テストロッサ」

「わたしの名前は…」

なのはがフェイトに名前を告げる前にフェイトは林の奥へと消えていった。

「なのは、大丈夫？」

シンとユーノが駆け寄る。

「大丈夫…それより…ジュエルシード…取られ…ちゃったね」

「なのはが気にすることはないよ」

「さあもう旅館に戻ろう」

「そう…だね」

三人で旅館へと歩いて帰っていった。

「名前を覚えてなの」（後書き）

今回はオリジナルストーリーです

というか作者の都合でつくった作品です

それでは次回

「修行と悲しいお別れなの」

「修行と悲しいお別れなの」（前書き）

温泉から帰ってきて数日…

修行をするのは…

それに付き合うシン…

そんなシンに悲しみが突き刺さる…

今回はちょっと駄作のような気がします…

それでは魔法少女リリカルなのは～銀色の魔道師～が始まります

「修行と悲しいお別れなの」

早朝

「よし、なのは。今日からぼくがなのはに魔法について教える…まあとりあえずレイジングハートを杖にして。」

「わかった。レイジングハート！」

『All right . . .』

赤の宝石が変形して杖になる。

「とりあえず…なのはは使う魔法を増やさないと…今のところディバインバスターしかないだろ？」

「う、うん…でもわかんないよ」

本当に困った顔で悩んでいる。

「じじいじいのはどじだ？」

『Holy lance.』

銀色の槍の魔力弾が形成される。

「こんなふうには魔力弾を作って攻撃するのはどうだ？」

「うん、やってみる…レインジングハート！」

なのはの足元にピンク色の魔方陣が浮かび上がる。

『Divin Shooter.』

ピンク色の丸い魔力弾が形成された。

「そう、そんな感じ！一発で出来るなんてすごいよ」

「エへへ」

嬉しそうな顔をするのは。

「それじゃあ次はそれをぼくに当てる練習…あ、ユーノ一応あたりに結界張つといて…ちっちゃいのでいいから。」

「うん」

ユートの足元に魔方陣が浮かび上がり、結界が発動される。

「それじゃあ、始めようか…始め！」

数十分後

「ハアハアハアハア」

「はい、今日はここまで！そろそろ家に帰らないと学校に遅れちゃうよ」

「ハアハア…そう…だね」

「それより今日もフェイトのこと考えてたの？」

「だって…悲しそうなんだよ！冷たそうに見えて実は悲しそうに見えるんだよ…気になるよ…」

「ほどほどにしないと。あんまりになのはが最近上の空だからアリ

サとすずかが気にしてたぞ」

とこんな会話をしながらなのは家の前に到着。

「それじゃあなのはまた学校で」

「うん 学校で」

そこでなのはとユーノと別れてシンは家に向かって歩きだした

そこでとんでもない光景を見ることになるとは知らずに…

学校…朝のホームルーム。

「え」と田中くんは今日家の都合でお休みだそうです。」

「え？」

ちよつと大きな声を出したなのは。

「どうしました？高町さん」

先生が聞く

「なんでもないです」

…そんなこんなでホームルーム終了

「どうしたのよ。なのは。家の都合で休みなんて普通でしょ？なんでそんなに驚くのよ」

「そつだよ。なのはちゃん」

「アリサちゃん…すずかちゃん…でも今日の朝また学校でねって家の前で別れたんだよ。なのに学校に来ないんだよ？」

「うーんそれはちょっとおかしいわね…」

考え込むアリサ。

「ちょっと待って、なのは…朝ってどつゆつ」と…

「あ！」

「シンとの間でなにか進展があったんじゃないの？」

「アハハハ」

苦笑いをするなのは。

「教えなさいよ」

なのはの頬を引っ張るアリサ。

「アリサちゃん…そのくらいでやめてあげたらっ…」

なのはの頬は赤くなっていた。

「あ！なのは…ごめん」

「じゃははは、いいよアリサちゃん」

(シンくん…大丈夫だよな?)

なのははシンに何かあったのではないかと心配するのであった。

数時間前…

シンは一人家までの道程を歩いていた。

今日の学校のことを考えながら…

家に着くと、早速自分の部屋に行こうとした。

しかし、そこでようやく家の異変に気づいた。

この時間ならいつもは母さんが朝ごはんを作ってるのだが全くそれらしい音がしない…

不思議に思ったシンは最初に居間に行った。

「！！」

そこでは見た光景は父さんと母さんが倒れている光景だった…

「父さん、母さん！」

「シン…か…すまん…こんなに小さいお前を置いて逝ってしまっ
ことを許してくれ…」

「どづゆづことだよ…意味…わかんないよ」

「父さんたちが管理局員だったのは知ってるよな？」

「うん」

「今から5年前父さんと母さんはある人物を追っていた…そして見つけた…そいつのアジトを…そいつを捕まえることは出来たんだが思わぬ反撃を食らってな…原因不明の病だ…父さんと母さんはそれで余命後数年を宣告されたんだ…だから管理局を引退してこっちに来たんだ…お前と一緒にいるためにな…」

「だから…最近父さんと母さん元気なかったのか…」

涙を流しながら言う。

「さあ…これからの生活のことは気にするな…お前が仲良くなった子…なのはちゃん…だったか？その子の両親に頼んどいたから…」

「死なないでよ父さん！」

涙が止まらない…

「ごめんな…シン…これからも…元気に…生きて…くれよ…」

そう告げた後父さんの体から力が抜けてくのをシンは感じた…

「父さん〜!」

悲痛な叫び声が家の中に木霊した…

学校が終わったなのは家へと帰りながらシンに念話で話しかけていた…

しかし一向に返事が返ってくることはなかった…

なのでもしかしたら何か知ってるかもしれないユーノに念話で聞いてみることにした。

「ユーノくん…シンくんのこと何か知らない?」

「(なのは…帰ってきたら…わかるよ…)」

「(わかった…それじゃあすぐに帰るね)」

念話を終了し急いで家に帰ったなのは。

「ただいま」

「おかえり」

玄関で靴を脱いだのはそのまま居間に向かう…

そしてそこにいたのはお父さんとお母さんと家の都合で学校を休んでいた筈のシンだった…

「シンくん…どうして家にいるの？それとどうして学校休んだの？」

「ああ…それはな…ぼくの親が今朝…亡くなったんだ…病気でね…」

「そう…なの？」

「ああ」

「それでなのは…父さんと母さんは少し前にシンくんのことを頼まれていてな…これからは家に住んでもらうことになった…なのははどうだい？」

「わたしは別にいいよ」

「そうか…ならあとは恭也と美由希だな」

「あーシンくんはこの部屋を使うの？」

「そんななのはの部屋に決まってるじゃない」

桃子は笑顔で言う

「き、決まってるんだ…」

「あら？嫌だった？温泉に行った時はあんなに嬉しそうだったじゃない」

「うん、わたしはいいけど…シンくんはどつなのかなって思ってた…」

「あら、それなら大丈夫よ。もう了解を取ってるから」

「本当なの？シンくん…」

苦笑いを浮かべてるシンに聞く。

「アハハ一応ね…」

(シンくん…やっぱり辛そうな顔してる…当然だよ…両親が死んじゃったんだもんね…でもシンくんには早く元気出してほしい)

時は流れて夕食

「という訳で今日からシンは家の家族になることになった…恭也と美由希はどうだ?」

「わたしはいいよ」

「俺も賛成」

「それで部屋はどうするの?」

「もちろんなのはと一緒よ」

「母さん…なんでそうなるの?」

「いいから、いいから シンのお部屋が準備できるまでだよ」

「それなら…」

「お母さん…いつからシンくんをくんを付けずに呼ぶようになったの？」

「今が初めてよ。今日から家族なんだから他人行儀は止めないとね」

「それじゃあわたしはシンちゃんって呼ぶぼっ」

「美由希さん…」

シンがちよつと嫌そうな顔をして呟く。

「嫌だった？でも変えないよ。」

「もう…なんでもいいですよ…」

シンが諦めた顔で言う…

(この家族は強引すぎる…)

夕食終了後

なのはの部屋

「今日はいろいろと大変だったね」

なのはが同情する

「でも…お陰で少し元気になったよ…ありがとうな、なのは…」

笑顔で言う。

「!?!」

突然のシンの笑顔に顔が赤くなるなのは…

「ユーノも心配をかけたな…」

「ぼくは別に…」

「よし、明日も学校があるからもう寝よう」

「うん！」

それぞれの寢床へと向かう…

ユ一ノはカゴ…

シンは用意してもらった布団…

なのははベッド…

「シンくん…ちょっと待って！」

シンを呼び止める

「なに？」

「一緒に寝ない？」

「なっ！？」

おどろくシン…

「今日だけでもいいから…」

「わかった…旅館でも一緒に寝たしな…」

「ありがとう！」

シンとなのはは一緒にベッドに入る…

そして夜はふけていった…

「修行と悲しいお別れなの」（後書き）

今回は「わかり合えない気持ちなの」です

「わかり合えない気持ちなの」（前書き）

いつも考えてた

きれいな瞳をした彼女のことを

そんなのははかつての出来事を思い出す

魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜始まります

「わかり合えない気持ちなの」

シンが高町家の家族となった翌朝…

シンは死にかけていた…

「おい！シン…どうしてあんなことになってたんだ？」

怒りの形相で怒鳴る恭也。

「それは…えつと…」

「まあいいや…それよりまだ終わってないぞ…」

真剣で斬りかかってくる恭也…

それを剣で受け止める…

シンの頬を剣がかする…

そしてその頬からは血が流れていた…

「もう止めてよお兄ちゃん…わたしが頼んだんだから…」

なのはが必死に納得させる…

何故こんなことになっているのかというと時は数十分前…

「恭也…なのはとシンを起こしてきてくれないかしら？今日はなかなか起きてこれないらしいから…」

「わかった…」

二階へ上がりなのはの部屋の前まで行く恭也…

「お…いなのは…シン…朝だぞ」

「……………」

「はあ……入るぞ」

シンとなのはを起こすためになのはの部屋に入った恭也の目に入ったのは…

シンとなのはが同じベッドで寝ていてしかも手を繋いでいる…

これを見た瞬間恭也の頭に血が上りシンを叩き起こして道場に強制

的に連れていき今に至る…

「お兄ちゃん…ほんとにもうやめて…シンくんケガしちゃったし…このままじゃあ学校に遅刻しちゃっよ…」

「そうだな…今日はこの位にしとこうか…だがシン…次はないと思えよ…」

「……」

恭也が道場から出ていく…

それを見たなのははシンのところへと駆け寄る…

「大丈夫？」

「ああ、それにしてもなのはのお兄さんは剣術が強いな…まさかやられるとは思わなかったよ…」

少しへこむシン…

「うん…でも早くキズの手当てして急いで学校行こつ…じゃないと遅刻するよ」

「そうだな……」

二人は急いで準備をし学校へと向かった…

学校で……

なのははずっと考えていた自分と同じくらいの歳の深く綺麗な瞳をした少女のことを……

「いい加減にしなさいよ！」

なのはの机を思いつき叩くアリサ…

ドンという音が教室中に響き渡る…

「……」

「この間から何話しても上の空でボーッとして……」

「ごめんね…アリサちゃん…」

「ごめんじゃない！！そんなにわたしたちと話すのが退屈なら一人でポーとしてなさい！行くよ…すずか」

アリサは教室から出ていく…

「あ、アリサちゃん…なのはちゃん…」

「いいよ、いまのはなのはが悪かったし…」

「そんなことないと思うけど…とりあえずアリサちゃんは言い過ぎだよ…少し話してくるね…」

すずかは走ってアリサを追った…

「…………怒らせちゃったな…………ごめんね、アリサちゃん…………」

学校の廊下近くの階段

すずかはアリサに追い付く

「アリサちゃん…アリサちゃん…！」

階段を駆け降りる

「アリサちゃん!」

「なによ?」

「なんで怒ってるのか…なんとなくわかるけど…ダメだよ。あんまり怒っちゃ…」

「だって、ムカツクわ!!悩んでるの見え見えじゃない!!…迷ってるの困ってるの見え見えじゃない!!…なのに…なにに何度聞いてもあたしたちには何も教えてくれない。悩んでも迷ってもないって嘘じゃん!!」

「どんなに仲良しの友達でも、言えないことはあるよ…なのはちゃんが秘密にしたいことだったら…わたしたちは待っててあげるしか出来ないんじゃないかな?」

「だからそれがムカツクの!!少しは役に立ってあげたいのよ!!……どんなことだっていいんだから…なんにも出来ないかもしれないけど、少なくとも一緒に悩んであげられるじゃない!!」

「やっぱりアリサちゃんもなのはちゃんのこと好きなんだね?」

「そんなの当たり前じゃないの!!」

「フフッ」

屋上へ行く途中でシンと出会う…

「あれ?アリサにすずか…何かあったのか?」

「シンくん…実は…というのがあったの…」

「そうか…」

(なのはの奴…またフェイトのこと考えてたんだな…)

「それにしてもアリサとすずかはなのはととても仲が良いんだね…」

「そうよ…あの子がいたからあたしはひとりじゃなくなったの…」

「わたしも…なのはちゃんがいたからわたしたちは友達になれたの…」

「…」

「そうなんだ…その話…聞いてもいい？」

「いいよ…」

「なら今日一緒に帰るわよ！」

「わかった…」

時間は過ぎ…

放課後…

「それじゃあ…なのはちゃん…」

「うん…アリサちゃんとすずかちゃんは稽古だよね…」

「うん…あと…シンくんも…」

「うん…それじゃあねアリサちゃん、すずかちゃん、シンくん…」

アリサがひとりで先に歩いていく

「アリサちゃん…」

「大丈夫だよなのはちゃん…」

「ありがとう…すずかちゃん」

…学校の帰り道

いつもはみんなで帰っていた道を一人で帰る…

(ひとりで帰るのって久しぶりだな…)

脳裏にはアリサ、すずか、シンと帰っていた情景が浮かび上がる…

(寄り道して帰ろう…みんなにいまの顔見られたくないから…)

車の中で…

後部座席の右にアリサ…左にすずか…そして真ん中にシンが座っていた…

「そろそろ話を聞いてもいいかな?」

「うん…初めて会った頃はさ…今よりずっと気が弱くて…思ったことを全然いえなくて…誰になに言われても反応できなくて…」

「あたしは我ながら最低な子だったっけね…自信家でわがままで強がりで…だからクラスメートをからかって馬鹿にした…」

「わたしも弱かったから…ちゃんと見えなかった…それはすごく大

切なものだから返してっ…」

「止めなよって言われても聞かなかった…他人の言うことを素直に聞いたら何かに負けちゃう気がしてたから…」

その頃なのは公園のベンチにひとり座っていた…

数年前…

バシン！

皮膚をたたく音がする…

叩いたのがなのはで叩かれたのがアリサ…

アリサは叩かれた頬を手で押さえる…

「ねえ…あのときなのはちゃん…なんて言ったんだっけ？」

「痛い？でもね…大事なものを取られちゃった人の心はもっともつと痛いんだよ…」

(すごいな…)

「そうだったね…」

一方なのはも同じことを思い出していた…

「アリサちゃんとはその後…大喧嘩したんだっけ…でそれを止めてくれたのが…」

「事の発端のひどくおとなしい子…」

「あ、あのときはだって…必死だったんだよ…」

「それから少しずつ話をするようになっていったんだっけね…」

「そう…三人でね…」

「そうか…そんなことがあったのか…」

「で？そんな昔話をきっかけにすずかはあたしになにをさせたいわけ？ただシンに話すだけが目的じゃないでしょ？」

「わかってるくせに…」

それまで車の窓から外を見ていたアリサがすずかのほうを一回向く…そして正面を向く…

「あたしたちに心配させたくないってことぐらいわかってるわよ…たぶん…あたしたちじゃあの子の助けにならないことも…待っていてあげるしかできないなら…」

またアリサはすずかのほうを向く…

「じゃああたしはずっと怒りながら待ってる…気持ちを分け合えない寂しさと親友の力になれない自分に！！」

「意地っ張り……」

「たしかにな……」

「ふんだ！…シンまで言うの？」

「いや…別に……」

「じゃあ今度はシンくんのお話を聞こうかな…今日元気がなかった理由を……」

「気づいてたのか……」

「うん だって友達だよ…わかるよ……」

「そうか…できるだけ表に出さないようにしてたんだけどな……」

シンは一回下を向き話し始めた

「昨日な…ぼくの両親が死んだんだ……」

「え!?!?」

「だからいろいろと考えてたんだ…父さんと母さんのことを……」

「そう…なんだ……」

「それで今日なのはと一緒に来たわけね……」

「ああ…なのはの家に住まわしてもらってる……」

「元気だしてね」

「ありがとう…さて…そろそろ降りさせてもらってもいいかな？」

「あ、そうね…そろそろ帰らないといけないだろうしね」

車から降りるシン…

「じゃあ…また明日」

「ええ！！また明日」

「明日ね…」

シンは車に向かって手を振りふたりも手を振り返した…

そして車は走り去っていった…

高町家のなのはの部屋…

なのはは椅子に座ってユーノとしゃべっていた…

「そうか…喧嘩しちゃったんだ…」

「違うよ…わたしがボオ〜としてたからアリサちゃんに怒られたっ
てだけ…」

「親友…なんだよね？」

「うん、入学してすぐの頃からずっとね…」

ユーノは下を向いて落ち込む…

「はい」

机の上に置いてあったたい焼きの半分をユーノに渡す…

「これ…ユーノくんの分ね…」

「あー！」

「ハム！今日は塾もないし…晩御飯の時までゆっくりジュエルシ
ード探しできるよ。一緒にがんばろう！ー！」

「うん」

「シンくんもそろそろ帰ってくると思うからシンくんも一緒にね…」

「そっいえばシンはどうして一緒にじゃなかったの？」

「ちょっとね…アリサちゃんやすすずかちゃんとな…」

「ただいま〜」

「おかえりなさい」

「ほら帰ってきた…」

シンが階段を上ってくる音がする

「これで3人で一緒にジュエルシード探しができるね…」

4時35分とあるビルの中…

「ん〜」

アルフはうれしそうにそしておいしそうにドッグフードを食べていた。

「こっちの世界の食事も…ん〜なかなか…悪くないね…」
食べ終わったので立ち上がる

「さ〜てうちのお姫様はっつと」

フェイトのいる部屋まで行くこととする。

「おおっと忘れ物」

そう言っただけで残っていたドッグフードの袋を手でつかむ…

アルフがフェイトのところへ向かったときフェイトはベッドで横になっただけ…

「あゝまた食べてない！ダメだよ…食べなきゃ」

ベッド近くの机にはほとんど手のつけられてない食事があった…

「少しだけど…食べたよ。大丈夫」

起き上がるときに痛々しいフェイトの背中を見てアルフは少し目つきを変えた

「そろそろ行くのか？次のジュエルシードも大まかな位置特定は済んでるし…あんまり母さんを待たせたくないし」

「そりゃまあ…フェイトはあたしのご主人様で…あたしはフェイトの使い魔だから…行くっつて言われりゃ行くけどさ…」

「あつ…それ食べ終わってからでいいから…」

横に置いたドッグフードの事を言われる

「あつ…！！そ…そうじゃない！あたしはフェイトが心配なの！！
広域探索の魔法はかなりの体力を使うのに…フェイトってばロクに
食べないし休まないし…その傷だって…軽くはないんだよ」

それを聞いてフェイトは笑顔になる

「平気だよ…私…強いから」

「うっ……」

フェイトはマントを出し、それを羽織る

「フェイト……」

「さあ…行こう！母さんが待ってるんだ…」

翠屋の厨房では恭也と忍が皿洗いをしながら最近のなのについて話していた…

「ねえ？恭也…なのはちゃんのことなんだけどさ…」

「ん？」

「最近、何か悩みでもあるのかな？…私が見ても思うし…さすが結構気にしてるの…」

「そうだな…最近夕方や夜の外出も多くなっただし…温泉から帰ってから朝早くシンとどこかに行ってるしな」

「お節介かもしれないけど、ちょっとお話聞いてあげてもいいかな？」

「それはありがたいことだが…多分、何も話さないと思うな」

「私じゃ…ダメかな？」

落ち込む忍…

「ああ違う…忍には話さないってわけじゃなくてたぶん誰にも話さない…あれは昔から自分ひとりの悩み事や迷いがあるときにはいつもそうだったから…」

「そうなんだ」

「まっあんまり心配はいらないさ。きっと自分で答えにたどり着くから…」

「そっか…」

時刻は現在19時5分…

「う〜んタイムアウトかも…そろそろ帰らないと…」

ジュエルシードを探し始めてから数時間がたったが見つからずそろそろ家に戻らなければいけない時間になった…

「大丈夫だよぼくが残ってもう少し探していくから…シンと一緒に帰ってて」

「ユーノ…一人で大丈夫か？」

「平気…だから晩御飯ちゃんと取っというてよ！」

「うん！」

ユーノはなのはの肩から降りた。そしてなのはとシンは家へユーノはジュエルシード探しへと向かった…

ビルの屋上に二つの影が舞い降りた…

「だいたいこのあたりだと思っただけ…大まかな位置しかわかってないんだ…」

「ハア…たしかにこれだけごみごみしてると探すのに一苦労だね」

「ちょっと乱暴だけど周辺に魔力粒を打ち込んで強制発動させるよ

…」

バルディッシュを構えながらフェイトが言う…

「あゝ待つてそれあたしがやる！」

「大丈夫？結構疲れるよ…」

「このあたしをいつたい誰の使い魔だと？」

「フフ それじゃあお願い！」

「そんじゃあ!!！」

アルフの足元にオレンジ色の魔方陣が浮かび上り天に向かってオレンジ色の魔力の塊が一直線に伸びた…

「!!!!！」

ユーノ、なのは、シンは突然感じた大きな魔力に反応する

アルフが放った魔力の影響で月を雲が隠し…

海の上の雲は雷雲に…

町の雲は動きが早く雷が鳴り響く…

「こんな街中で強制発動？広域結界…間に合え!!！」

ユーノは翠色の魔方陣を展開し結界を張った。

「なのは…行こう！」

「うん」

「レイジングハートお願い…」

「クロイツ出番だ…」

二人はバリアジャケットとデバイスを準備する…

その時、アルフが打ち込んだ魔力粒に反応してジュエルシードが発動していた…

「見つけた…」

「けど、あっちも近くにいるみたいだね…」

フェイトが下を見ると町が結界に覆われていていた…

「早く片付けよう…バルディッシュュ！」

『Sealing Form・Setup』

バルディッシュュが変形する…

そしてフェイトはそれをジュエルシードへと向けていた…

その頃、なのはとシンは発動したジュエルシードを眺めていた…

「なのは、あの子たちより先にジュエルシードを封印しよう」

「うん、わかった！」

なのははレイジングハートを構えた…

フェイトの封印の魔法となのはの封印の魔法が放たれる…

「リリカルマジカル…」

「ジュエルシードシリアル19!!」

「封…」

「印…!!」

同時に放たれた魔法はジュエルシードに当たった…

しかしジュエルシードを宙に浮かせるだけだった…

『Device mode』

レイジングハートを杖に戻したのははジュエルシードへと歩いて近づく…

脳裏には昔アリサと喧嘩した記憶…

(アリサちゃんやすずかちゃんとも初めて会ったときは友達じゃなかった…話しをできなかったから…わかり合えなかったから…アリサちゃんを怒らせちゃったのもわたしが本当の気持ちを…思っていることを言えなかったから…)

ジュエルシードを眺めながら思うのは…

(あの子…フェイトちゃんともこのまま話ができずにわかり合えないままなのかな?…ううんそんなことない…絶対に…)

「わかり合えない気持ちなの」(後書き)

次回「小規模次元震なの」

「小規模次元震なの」（前書き）

ひとり悩むなのはみてアリサはあることを決意した

シンは知る

なのはたちが友達なるためにたどった過程を

そんな中新たなジュエルシードが発動される

魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜始まります

「小規模次元震なの」

ジュエルシードを眺めているのはに近づいたシンとユーノ…

「やった！！なのは早く確保を…」

「そうはさせるかい！！」

上からアルフが獣の姿で飛び掛ってきた…

「！！！！！！」

『Sword Form』

魔力刃でアルフを受け止めたシンはそのまま横へ飛ばす…

「大丈夫か？なのは」

「うん…」

そうなのはに聞きながらシンが地面に降り立った

そしてなのはが上を見るとフェイトが空を飛んでこちらを見ていた…

(目的がある者同士だから…ぶつかり合うのは仕方ないのかもしれない…だけど…知りたいんだ！)

「こないだは自己紹介できなかったけど…わたしなのは！高町なのは！！私立聖祥大付属小学校三年生！」

『Scythe Form』

「！！！」

なのはあわててレイジングハートを構える

(どうしてそんなに寂しい目をしてるのか…)

そんなことをなのはが考えているとフェイトがバルディッシュを構えて攻撃してきた…

『Flier Fin』

なのはは飛行魔法を発動させる。

そのときジュエルシード一回鼓動した…

すずかはケータイをいじっていた。

「なのはにメール？」

「うん…お稽古終了って…」

アリサもなのはにメールを打とうかと思いいケータイを取り出すが思
い直してケータイをかばんにしまう…

「さっ帰るよ！」

アリサはすずかを置いて歩いていく…

「あ！ちよつと待って！」

メールの続きを打つすずか

「……お悩み早く解決するといいいね…がんばって！いつだって応援
しています…すずか…っ」と

メールを送信する

その頃のなのははフェイトと戦っていた…

砲撃魔法を撃ち合っていたが刹那…機動力のあるフェイトがなのは
の後ろに回りこむ…

『Flash Move』

あつという間に後ろを取られたなのはもレイジングハートが高速移
動の魔法を発動させ今度はなのはがフェイトの後ろに回る…

『Divine Shooter』

なのは杖先に魔力を凝縮させそれを放つ…

それを察知したフェイトは振り向いく…

『Defencer』

バルディッシュを前に向けて防御魔法を発動させる…

なのはの攻撃を軽く飛ばされながらも防ぎきったフェイトはバルディッシュをなのはに向ける…

なのはもまたフェイトにレイジングハートを向ける…

そのときまたジュエルシールドが鼓動した…

アルフの相手をしていたシンはほとんど戦闘に集中できてなかった…

(なんだろう…この感じ…すごい胸騒ぎがする…なにかとてもまずいことが起きるようないこと…)

「フェイトちゃん!!」

「!?!」

突然自分の名前を呼ばれてびっくりするフェイト…

「話し合うだけじゃ…言葉だけじゃ…何も変わらないって言うていたけど…だけど…話さないと…言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ!!」

「・・・」

「ぶつかり合ったり…競い合ったりするのは…それは仕方ないことなのかもしれないけど…ただどなにもわからないままぶつかり合うのはわたし…嫌なの!!」

その間も考え事をしながらアルフと戦うシン…

「わたしがジュエルシードを集めるのはそれがユーノくん探し物だから…ジュエルシードを見つけたのがユーノくんですユーノくんがそれを元どりに集めなさいといけないから…わたしはそのお手伝いで…」

「・・・」

「だけどお手伝いをするようになったのは偶然だったけど今は自分の意思でジュエルシードを集めてる!!自分が暮らしてる町や自分

の周りの人に危険が降りかかるのは嫌だから!!」

「.....」

「これが…わたしの理由!!」

フェイトは一瞬目を閉じる…

「わたしは…」

「フェイト!! 答えなくていい!!」

「「!!!!」」

「優しくしてくれる人たちのところでぬくぬく甘ったれて暮らしてる
ようなガキンチョになんかなにも教えなくていい!! あたしたちの
最優先事項はジュエルシードの捕獲だよ!!」

それを聞いたフェイトは話そうとしていたことをのどの奥にしまっ
…そしてバルディッシュを構えた

「!!!!」

「「なのは」」

ユーノとシンが同時に叫ぶ

「大丈夫!」

なのはに攻撃をするのかと思いきや身を翻して眼下のジュエルシー

ドへとフェイトは向かった…

「！……！」

あわててフェイトを追うのは…

そのときまたもやジュエルシールドが鼓動する

（まずい…本当に嫌な予感がしてきた…）

「二人ともそれに近づくな……！」

「「え？」」

シンが叫んだときは時すでに遅し…

なのはとフェイトのデバイスがジュエルシールドに挟まったときだった…

「あつ………」

「え………？」

その瞬間レイジングハートとバルディッシュにヒビが入った…とても大きな…

「くっ…防御魔法間に合え……！」

シンは大急ぎでなのはとフェイトに防御魔法を張る…

その瞬間

魔力が渦巻きだし

なのはたちを吹き飛ばそうとする…

「なのは！！くそっ…これが父さんの言ってたやつか…」

光が大きくなり輝きが増しあたり一面を巻き込んだ…

「…！？」

すずかは空を見上げる

「すずか…どうしたの？」

車に乗り込もうとしていたアリサが声をかける…

「うっん…なんでも…」

すずかはケータイを開いてメールをチェックするしかしメールは一件も届いてなかった…

「もうおなか減ったよ…早く帰ろう！！」

アリサが急かす

「うん」

アリサとすずかは車に乗り込む…

そしてボタンというドアを閉める音が響いた…

「小規模次元震なの」（後書き）

次回「四人目の魔法使いなの」

「四人目の魔法使いなの」（前書き）

ジュエルシードを封印した二人は戦いだす

必死にフェイトへと呼びかけるなのは

二人がジュエルシードに同時に迫った時

ジュエルシードの放つ膨大な魔力に包まれた

魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜始まります

「四人目の魔法使いなの」

4月26日

PM8:27

海鳴市 市街地 結界内部

大きな光が凝縮し…

ジュエルシードからでた魔力の塊が渦巻き爆発した…

それによってジュエルシードの近くにいたなのはとフェイトはもちろんのことふたりに防御魔法をかけたシンも吹き飛ばされた…

シンの防御魔法と自身の防御魔法のおかげでなのはとフェイトは完全な無傷で怪我ひとつしてなかったがシンは少しひどかった…

ふたりを守るために魔法を使ったため自身を守る魔法の出力が落ちたのが原因だ…

その際クロイツにもかなりのヒビが入りおもいつきり吹き飛ばされたためビルに激突してしまった…

「うぐっ…」

「シンくん大丈夫？」

なのはが急いで駆け寄る…

「大丈夫だよ…」

少し体が傷ついているがバリアジャケットを着ていたためダメージ

はあまりない

その頃フェイトはヒビだらけのバルディッシュを見ていた…

「大丈夫？戻ってバルディッシュ…」

『Yes, sir.』

バルディッシュを待機状態に戻す

そしてフェイトは前にあるジュエルシードを見据えジュエルシードの元へと向かう…

「フェイト!!」

「!?!?!」

ジュエルシードの元へと着いたフェイトはそれを両手で押さえる…

するとジュエルシードは光り始める…

「フェイト!!だめだ危ない!!」

「まさか…デバイスも使わずに封印するつもりか？危険すぎるぞ!」

アルフとシンが叫ぶ

フェイトは地面に座りこみ魔法陣を展開させる…

「止まれ……止まれ止まれ!!」

さらに光が増しフェイトの手から血が飛び散る…

「止まれ…止まれ…」

光がフェイトを包んだかと思うとジュエルシードの鼓動がおさまり光も消えた…

「ハアハア…」

ジュエルシードを押さえ込むのにかなりの魔力を使ったフェイトはふらふらになりながらも立ち上がる…

「フェイト!!」

アルフが人型になりながらフェイトに駆け寄り立ち上がったがすぐに倒れそうになったフェイトを抱きかかえる…

そしてアルフは物凄く威圧的な眼でシンとなのはそしてユーノを睨んだ

「!!!!!!」

なのはたちを一瞥したあとアルフはビルの屋上から屋上を飛び回り姿を消した…

同日 PM 9:15

海鳴市 市街地 高町家

なのはの部屋

なのはの部屋の机の上にはレイジングハートのコアである赤い宝石とクロイツのコアである銀色の宝石が置かれていた…

かなりの亀裂が入った状態で…

（レイジングハートもクロイツもかなりの大出力に耐えうるデバイスなのに…それを一撃で…ここまで破損させるなんて…あの子なのはの魔力の衝突？いやそれじゃあ説明がつかない…あれはやっぱりジュエルシードの…）

コンコン

扉をたたく音がしたあとなのはとシンが部屋に入ってくる。

なのはは寝巻きシンはさっきまで桃子に傷の手当してもらっていたためまだ私服である…

シンとなのはがうちに帰ってきたときはなぜそんなに傷だらけなのか聞かれたが適当に公園でこけたと言いつつした。

「ユーノくん…レイジングハートとクロイツは大丈夫？」

「うん…かなり破損は大きいけど大丈夫！！いま自動修復機能をフル稼働させてるから明日には回復すると思う…」

「ありがとなクロイツも見ててくれて…」

「なのはは大丈夫？シンはちょっとひどそうだけど…」

「大丈夫…シンくんの魔法とレイジングハートが守ってくれたから…でもシンくんがわたしに魔法をかけてたからシンくんは自分を守ることができなくて怪我しちゃった…ごめんねシンくん…」

「気にするなよなのは…」

（なのはは絶対守るって土郎さんと約束したからな…）

「レイジングハートもごめんね…」

なのはは部屋の窓から空を見上げた…

同日

同時刻

遠見市 住宅街

ビルの部屋の中

アルフがフェイトの手の怪我の手当てをしていた…

そして最後の仕上げに包帯で手を巻く…

「ッ…！」

傷に響いたのかフェイトが少し痛がる…

「ごめんよフェイト！ちょっと我慢して…」

「平気だよ…ありがとう…アルフ…明日は母さんに報告に戻らないといけないから早く治さないとね…傷だらけで帰ったらきつと心配させちゃうから…」

「心配…するか？…あの人…」

「母さんは少し不器用なだけだよ…わたしにはちゃんとわかってる…」

「報告だけならあたしが行って来ればいいんだけど…」

「母さん…アルフの言うことあんまり聞いてくれないもんね…」

フェイトはアルフの頭をなでる…

「アルフはこんなに優しくていい子なのに…」

「まあ…明日は大丈夫さ！…こんな短期間でロストログア…ジュエルシードを四つもゲットしたんだし褒められこそすれ叱られるようなことはまずないもんね？」

「うん…そつだね」

4月27日

AM 6:15

高町家

「ハア……ハア……ん〜」

美由紀はランニングを終えて道場へと向かう
道場の扉を開けるとそこにはなのはがいた…

「あれ？なのは！！」

「あ！お姉ちゃん！！！」

「どうしたの？すっごい早起きさんだ」

「にゃはは、ちょっと目が覚めちゃって…」

「そっなんだ」

「あれ？お兄ちゃんは？」

「うん…今朝は父さんと一緒に少し遠くまで走りに行ってる」

美由紀は壁にかかっていた二本の木刀をつかむ…

「シンくんは一緒だった？」

「シンちゃん？見てないよ…」

「そつか…それで…えっと…お姉ちゃんの練習…お邪魔じゃなかったら見ててもいい？」

「あはは…あんまり面白いものじゃないと思うけど？」

くるっと木刀をまわし持ち変える

「いいよ別に！」

「うん、ありがとう！！」

素振りを始めた美由紀…

道場内に木刀が空を斬る音が響く…

なのははそれを正座で見っていた…

「（なのは？）」

突然なのはの頭に念話が聞こえた

「（ユーノくん？）」

「（どうしたの？こんな朝早く…）」

「（うん…ちょっと目が覚めちゃったから…それでねユーノくん…わたし考えたんだけど…）」

「（うん？）」

「わたしやっぱりあの子のこと…フェイトちゃんのこと気がなるの…」

「（気になる？）」

「（すごく強くて…冷たい感じもするの…だけど…きれいで優しい目をして…なのに…なんだかすごく悲しそうなの…）」

「（…………）」

「（きつと理由があると思うんだ…ジュエルシードを集めてる理由…だから…そのために…）」

「あー！」

同日 AM 8：17

遠見市 住宅街 マンション屋上

「お土産はこれでよっつと…」

「甘いお菓子か…こんなものあの人が喜ぶのかね？」

フェイトの手からお菓子の入った箱を取り上げる

「わかんないけど…こつこつというのは気持ちだから…」

「ふっん」

「次元転移…次元座標876C 4419 3312 D699
3583 A1460 779 F3125」

足元に金色の魔法陣が展開する

「開け、誘いの扉…時の庭園テスタロッタの主の下へ!!」

魔力がフェイトとアルフを包み込み次元転移した…

「「!!!」」

フェイトたちが発生させた魔力に反応したなのはとシンしかしそのままふたりは学校へと向かっていった…

同日 同時刻

次元空間内

時空管理局

次元空間航行艦船

【アースラ】

「みんなどう？今回の旅は順調？」

「はい、現在第3船速にて航行中です。目標次元には今からおよそ160ベクサ後に到着する予定です。」

「前回の小規模次元震以来特に目立った動きはないようですが…二組の捜索者が再度衝突する可能性は非常に高いですね。」

「そう…」

紅茶を入れる音がする…

「失礼します！リンディ艦長。」

少女はリンディの机の上に先ほど入れた紅茶を置く

「ありがとね、エイミー」

時空管理局提督

【アースラ】艦長

リンディ・ハラオウン

リンディは紅茶を飲む

「そうね、小規模とはいえ次元震の発生はちょっと厄介なものね…危なくなったら急いで現場に向かってもらわないと…ね、クロノ？」

時空管理局

執務官

クロノ・ハラオウン

「大丈夫…わかってますよ艦長は…そのためにいるんですから」

クロノと呼ばれた少年はカードを手に持ち言った

高次空間内

【時の庭園】

バシン

「うぐっ…」

バシン

「うっ…」

バシン

「うわっ…!」

鞭でたたく音と悲鳴が響き渡る

「たったの4つ…これはあまりにもひどいわ…」

「はい…ごめんなさい…母さん…」

「いい？フェイト。あなたはわたしの娘…大魔道師プレシア・テスタロッサの一人娘…」

プレシアはフェイトに近づくとそしてフェイトのあごをつかみ上げと持ち上げる

「不可能なことなどあつてはならない…どんなことでも…そう、どんなことでも成し遂げなくてはならないの」

「…はい」

「こんなに待たせておいてあがつてきた成果がこれだけじゃあ…母さんは笑顔であなたを迎えるわけにはいかないの…わかるわねフェイト」

「はい…わかります」

「だからよ…だから覚えてほしいの。もう二度と母さんを失望させないように」

プレシアは手に持った杖を鞭に変え再びフェイトをたたき始めた

鞭でたたかれる音とフェイトの悲鳴が響き渡る

「なんだって…いつたいなんなんだよ…あんまりじゃないか!!あの女…」

アルフはフェイト悲鳴を聞くに堪えられなくなり扉へともたれる

(あの女の…フェイトの母親の異常さとか…フェイトに対するひどい仕打ちは今に始まったことじゃないけど…今回はあんまりだ…いつたいなんなんだ…ロストロギアは…ジュエルシードはそんなに大切なものなのか?)

プレシアは鞭で打つ手を止める

「ロスとロギアは母さんの夢をかなえるためにどうしても必要なの」

「はい…母さん…」

「特にあれは…ジュエルシードの純度は他のものよりはるかに優れてる…あなたは優しい子だから躊躇ったりしてしまうこともあるかもしれないけど…邪魔するものがあるなら潰しなさいどんなことをしても！！あなたにはその力があるのだから」

鞭を元の杖の形に戻すとフェイトを吊るしていた魔力でできた縄が消えた

そしてフェイトはそのまま倒れた

「行ってきてくれるわね？わたしの娘、可愛いフェイト…」

「はい…行ってきます…母さん…」

「しばらく眠るわ…次は必ず母さんを喜ばせて頂戴」

「はい…」

プレシアはフェイトに背を向けると奥の部屋へと去っていった

フェイトは立ち上がると横を見た…

そこにはお土産としてもって帰ってきた甘いお菓子が箱のまま机の上に置かれていた…

それに落ち込むフェイト…

フェイトは傷だらけの体で部屋から出る

倒れそうになったところをアルフに支えてもらった…

「フェイト…ごめんよ…大丈夫？」

「…なんでアルフが謝るの？平気だよ…全然…」

「だってさ…まさかこんなことになるなんて…」

アルフは傷だらけのフェイトを見る

「ちゃんと言われたものを手に入れてきたのにあんなひどいことをされるとは思わなかったし…知ってたら絶対に止めたのに…！」

「ひどいことじゃないよ…母さんはわたしのためにを思ってたって…」

「思ってるもんか！！そんなこと！！あんなのただの八つ当たりだ…！」

「違うよ…だって…親子だもん…ジュエルシールドはきつと母さんにとってすごく大事なものなんだ…ずっと不幸で悲しんでた母さんだから…わたし何とかして喜ばせてあげたいの…」

「だって…でもさあ…」

アルフに支えられていたフェイトが自分の足で立つ

そしてアルフの頬に触れながら言う

「アルフお願い。大丈夫だよきつと…ジュエルシードを手に入れて帰ってきたらきつと母さんも笑ってくれる…昔みたいに優しい母さんに戻ってくれてアルフにもきつと優しくしてくれるよ…だから行こう！今度はきつと失敗しないように…」

フェイトはマントを羽織り決意を新たに…アルフはそんなフェイトを心配そうな目をして見ていた

4月27日 PM 1:32

私立聖祥大付属小学校

3年一組

なのははずかと話しながらアリサのほうを向く

それに気づいたアリサは一回なのはのほうを向いた後そっぽを向いた…

私立聖祥大付属小学校屋上

シンは一人柵にもたれながら昨夜のことを考えていた…

（昨日みたいなことは絶対に起こさないようにしなくちゃいけない…デバイスたちに負担がかかるしなによりなのはに危険が及ぶ…なのははぼくが絶対に守るから…）

4月27日 PM 4:10

海鳴市 市街地

ビルの屋上にフェイトとアルフがいた

「バルディッシュ…どう？」

『Recovery complete』

「そう、がんばったね。えらいよ」

「感じるね…あたしにもわかる」

「うん…もうすぐ発動する子が近くにいる！」

4月27日 PM 5:05

海鳴市 住宅街

バスからなのはとシンが降りる

そこにユーノがレイジングハートの赤い宝石とクロイツの銀色の宝石を持って現れた

「レイジングハート…直ったんだね。よかった…」

『Condition green』

「また…一緒にがんばってくれろ？」

『All right, my master.』

「ありがとう…」

「クロイツもいけるな?」

『Yes my master.』

4月27日 PM6:24

海鳴市 海鳴臨海公園

林の中にあつたジュエルシードが発動し一本の木を取り込み木を巨大化させる…

そこにユーノが走ってくる

「封じ結界 展開!」

翠色の魔方陣が展開され辺りを結界が包み込む

木のお化けと化したジュエルシードに向けてすでにバリアジャケットとデバイスを装備したなのはとシンがそれぞれデバイスをジュエルシードに向ける…

とそこに金色の魔力弾が飛来してジュエルシードに襲い掛かる…

しかしそれはジュエルシードの手前で障壁のようなものに当たり弾かれた

「ヴオオオオ」

「うおい！…生意気にバリアまで張るのかい！」

「うん、今までのより強いね…それにあの子たちもいる！」

「…！！！」

なのはとシンは同時に振り向く

「ヴオオオオ」

ジュエルシードは根っこを地面から出し襲い掛かってきた

「ユーノくん逃げて！…！」

ユーノは草むらの中へと逃げる

『Flier Finn』

ユーノが逃げたのを確認した後なのはとシンは共に飛行魔法で空へと上がり根っこをかわす

「飛んでレイジングハート！…もっと高く！…！」

『All right』

なのははさらに高く上った

「やれやれ、今回はほくも参加したほうがいいかな？危なそうだし…」

シンが呟く…

「クロイツホーリーランスだ」

『Holy Lance』

銀色の槍がジュエルシールドの張ったバリアに突き刺さる

「アークセーバー。いくよバルディッシュュ!!!」

『Arc Saber』

バルディッシュュに魔力刃が形成される

なのははレイジングハートをジュエルシールドに向けた

『Shooting mode』

「いくよレイジングハート!!!」

フェイトは魔力刃をブーメランみたいに飛ばし根っこを切断させながらジュエルシールドのバリアに当て本体にダメージを与える

「撃ち抜いて!!!」

なのはの杖先に魔力が集中される

「デイベイン…」

『Buster.』

なのはの収束砲が放たれジュエルシードを上から押さえつけた

「さあクロイツ久しぶりにアレいこうか？」

『All right.』

シンはクロイツをジュエルシードに向けて杖先に魔力を集中させる

『Ice Buster.』

冷気をまとった砲撃が放たれバリアに当たったと同時にバリアが凍り始める…

シンが持つ一つ目の稀少能力である魔力変換資質【氷】である

「ヴオオオオ」

ジュエルシードが呻く

フェイトは手で印をきる

そしてその手を前に出し自分の足元と手のところに魔方陣を展開させる…

「貫け轟雷!!」

『Thunder Smasher』

バルディッシュの先を前に展開させた魔方陣に向ける…

すると金色の収束砲がジュエルシードに向かって放たれた

「ヴオオオオ」

三つの収束砲を受けたジュエルシードは耐えられなくなり白く光る…

そこには木のお化けは消えジュエルシードの本体が中に浮かんでいた…

『Sealing mode・Set up』

『Sealing Form・Set up』

レイジングハートとバルディッシュどちらもジュエルシードを封印する体勢に入る

「ジュエルシードリアルセー!」

「封印!」

ジュエルシードが白い光で包まれる…

「ちいっ」

アルフがあまりの光に顔を背ける

光がおさまったあとフェイトは空へ上がる

「ジュエルシードには衝撃を与えてはいけないみたいだ…」

「うん…昨夜みたいなことになったらわたしのレイジングハートもフェイトちゃんのバルディッシュもかわいそうだもんね」

「だけど…譲れないから…」

『Device Form』

フェイトはバルディッシュを構える

「わたしは…フェイトちゃんと話がしたいだけなんだけど…」

『Device mode』

「わたしが勝ったら…ただの甘ったれた子じゃないってわかってもらえたら…お話聞いてくれる？それとシンくんは手をださないでね」

「わかってるよ」

シンは下へと降りていき地面へと降り立つ

フェイトとなのははお互いを見やりデバイスを構えて肉迫しデバイスを振りかぶった…

とそこに水色の魔方陣が現れそこから黒髪の少年が現れた…

その少年はレイジングハートを素手バルディッシュを自分のデバイスで受け止めた…

「ストップだ!!」

「!!!!」

「ここでの戦闘は危険すぎる!! 時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ! 詳しい事情を聞かせてもらおうか!」

「四人目の魔法使いなの」(後書き)

次回「それは大いなる危機なの」

「それは大いなる危機なの」（前書き）

発動したジュエルシードを協力して封印したなのはとフェイト、シン…

譲れないものがあるから戦うというフェイト

なのはとフェイトがぶつかりあったとき新たな魔法使いが現れた

魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜始まります

「それは大いなる危機なの」

【アースラ】

「現地ですすでに二者による戦闘が開始されている模様です」

モニターに戦闘の様子が映る

「中心となっているロストロギアのクラスはA+。動作不安定です
が無差別攻撃の特性を見せています」

「次元干渉型の禁忌物品：回収急がないといけないわね」

リンディは立ち上がる

「クロノ・ハラウン執務官出られる？」

「転移座標の特定はできてます。命令があればいつでも！」

「それじゃあクロノ：現地での戦闘行動の停止とロストロギアの回
収：両名からの事情聴取を！」

「了解です！艦長」

クロノが転移ポートに行くとしんディがなぜか白いハンカチを振っ
ていた：

「気をつけてね」

「は、はい…行ってきます」

クロノは足元に水色の魔方陣を展開させ転移した

それを見送ったあとリンディはモニターへと向き直った

フェイトとなのははそれぞれデバイスを構えて肉迫する…

デバイスを振り上げて振り下ろした瞬間黒髪の少年が突如現れた

「ストップだ!!」

少年はレイジングハートを素手バルディッシュを自分のデバイスで受け止めた…

「ここでの戦闘行動は危険すぎる!」

「!?!?!」

「時空管理局執務官クロノ・ハラオウンだ!詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「時空管理局?」

ユーノが呟いた

「まずは二人とも武器を引くんだ!」

そう言ったあとなのは、フェイト、クロノは地面に降り立つ

「このまま戦闘行為を続けるなら…」

とそこへ突如魔力弾が飛来クロノに襲い掛かる

それを障壁で弾いたクロノは魔力弾が飛んできた方角をみる

そこにはアルフがいた

「フェイト撤退するよ! 離れて!」

フェイトが離れたのを確認したアルフは第二弾を発射…

クロノとなのはがいるところが爆煙で包まれる

「なのは!」

シンが心配して叫ぶと同時になのはとクロノが後ろに下がって回避したのをみてホッと胸をなでおろす

魔力弾を回避したのははフェイトがジュエルシールドに迫ってるの
をみた

「あ!」

しかしそこに水色の魔力弾が飛来…フェイトに直撃した

「フェイト!!!」

「フェイトちゃん!!!」

落ちていくフェイトを背中で受け止めたアルフ

そこには冷たい目をしたクロノがいた

クロノはさらに杖先に魔力を集中させる

「ダメ!!!」

そこになのはが割り込む

「やめて!撃たないで!!!」

「なのは…」

シンが心配そうに呟く

「逃げるよフェイト!!!しっかりつかまって」

アルフはフェイトを背中に抱えて夕焼けの空へと消えていった…

それを見送るなのはとシン

クロノも撃つのをやめ地面へ降り立った

その出来事をモニターで見ていたアースラの面々

「戦闘行動は停止。搜索者の一方は逃走」

「追跡は？」

「多重転移で逃走してます。追いきれませぬ」

「そう…」

そのころモニターではジュエルシールドをクロノが確保したところが映っていた

「戦闘行動は迅速に停止。ロストログア確保も終了…よしとしまし
よう。事情もいろいろ聞けそうだしね」

リンディは横にあった通信のボタンを押す

「クロノお疲れ様」

突如魔方陣と一緒に現れた女性の映像に驚くなのはとシン…

だがシンはその女性をどこかで見たことがあるような気がしていた…

「すみません…片方逃がしてしまいました」

「うっん…まあ大丈夫よ」

「でね、ちょっとお話が聞きたいからそっちの子たちをアースラへ

案内してくれるかしら？」

なのはとシン、ユーノを手で示す

「了解です。すぐに戻ります」

突然のことに驚いているなのは

それからクロノに連れられて三人はアースラへと転移した…

「シンくん…ユーノくん…こっつていつたい」

「時空管理局の次元航行船の中だね。えっと…簡単に言うといくつもある次元世界を自由に航行する船」

ユーノが説明する

「あんま簡単じゃないかも…」

なのはが困った顔で言う

「なのはやぼくが暮らしている世界のほかにもいくつかの世界があってその狭間を渡るのがこの船。そしてそれぞれの世界干渉しあうような出来事を管理してるのが時空管理局だよ」

今度はシンが説明する

「ちなみにいまのはぼくが父さんから聞いた話だよ。ぼくは小さい頃に次元航行船に乗ったことがあるらしいんだけどあんまり覚えてないんだ…」

なのはに説明してるうちに艦内の通路に入った

「ああ、いつまでもその格好というのは窮屈だろう…バリアジャケットとデバイスは解除していいよ…」

クロノが後ろを振り返って言った

「そっか…そうですね。」

「そうだな」

なのはとシンはバリアジャケットを解除しレイジングハートとクロイツをそれぞれ待機状態にもどした

「きみも元の姿にもどってもいいんじゃないか？」

ユーノを見ながらクロノが言った

「そういえばそうですね…ずっとこの姿でいたから忘れてました…」

もちろんなのはとシンは？状態だ…

ユーノの体が光に包まれるとそこにはシンやなのはと同じくらいの歳の黄色っぽい髪をした少年が現れた…

「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりになるのかな？シンは初めてだね」

なのはとシンの顔は文字では表せないような顔をして驚いていた…

「ふええええええ!!!?」

「えええええええ!!!?」

なのはとシンの叫び声がアースラ内を木霊した…

「なのは?シン?」

「ユーノくんって…ユーノくんってその…なに?…えくだって…その…」

「驚いたずつとフェレットだったから魔法が使えるただのフェレットだと思ってた…まさか人間だったなんて…しかも同い年ぐらいの…」

「君たちの間で見解の相違でも?」

なのはやシンの驚きようを見て聞いてくるクロノ…

「えっと…なのは?ぼくたちが最初に出会ったときってぼくはこの姿じゃあ…」

「違う違う!最初からフェレットだったよ!」

首をブンブン横に振って否定する

「ん〜」

頭に手を当てて考え込むユーノ…

「あ〜！そうだそうだごめんごめん！この姿見せてなかった…」

「だよね〜そうだよね〜びっくりした〜」

「あ〜ちよつといいか？」

クロノが話に割り込む

「きみたちの事情はよく知らないが…艦長を待たせているのでできれば早めに話を聞きたいのだが…」

「あ…はい」

「わかりました」

「すみません」

三者三様の返事をするのは、シン、ユーノ

「では…こちらへ」

クロノは歩き出しなのはたちはそれについて行った…

部屋に着くとさっそく中へと入っていく

「艦長！来てもらいました！」

そこは見事なまでの和風の風景だった

その風景の中に畳で正座している女性がいた…リンディ・ハラオウ
ンだ

「お疲れ様！まあ三人ともどうぞどうぞ楽しんで」

あまりの光景にシンとなのははほうけていた

「どうぞ」

「は、はい」

そして三人は畳に座り話し始めた…

「なるほど…そうですね。あのロストロギア…ジュエルシードを発
掘したのはあなただったんですね」

「うん…それでぼくが回収しよう…」

「立派だわ」

「だけど同時に無謀でもある…！」

「あの…ロストロギアってなんなんですか？」

「えっと…異質世界の遺産って言うてもわからないわよね…次元空
間の中にはいくつもの世界があるの…それぞれに生まれて育ってい
く世界…」

「その中に稀に進化しすぎる世界があるんだ…技術や科学その進化
しすぎた力で自分たちの世界を滅ぼしてしまっただけの世界」

の遺産：それらの総称がロストロギアってわけだよ…」

シンが説明する

「使用法によつては世界どころか次元空間さえ滅ぼすことになる危険な技術…」

クロノが腕を組みながら補足する

「しかるべき手続きをもつてしかるべき場所に保管されてされてないといけない品物：あなたたちが探しているロストロギア：ジュエルシードは次元干渉型のエネルギー結晶体：いくつか集めて特定の方法で起動させれば空間内に次元震を引き起こし：最悪の場合次元断層まで引き起こす危険物」

「きみとあの黒衣の魔道師がぶつかったときに起こった爆発：あれが次元震だよ」

なのははあのとときのことを思い出す

「たった一つのジュエルシードの全威力の何万分の一の発動でもあれだけの影響があるんだ：複数個集まって動かしたときの影響は計りしれない…」

「聞いたことがあります…旧暦の462年次元断層が起こったときのこと…」

ユーノが思い出したように言った

「ああ、あれはひどいものだった…」

「それ…ぼくも聞いたことがあります！たしか隣接する平行世界がいくつかも消えた歴史に残る大事件だって…」

「ええ、そうよ…あんなこと繰り返しちゃいけないわ」

リンディはこう言ったあとお茶に砂糖をひとかけら落とし飲んだ…

それを見たなのはとシンは顔を歪ませる…

「それよりシンくんはロストロギアについて詳しいのね」

「ええ、父さんに聞きました」

「お父さん？もしかして局員だったの？」

「はい、オーバースランクの魔道師でした…でも…もう…」

「オーバースランク…」

クロノが驚いたように呟く…

「第97管理外世界【地球】にいてもうすでにやめた魔道師…もしかして田中健かな？」

リンディが聞く

「父さんを知ってるんですか？」

「ええ、となるとあなたにも会ったことがあるわね。名前を聞いて

もしかしたらと思ったけど…まああなたはまだ小さかったから覚えてないでしょうけど…」

「やっぱり会ったことあるんですね。どこかで見たことがあると思いました」

「それで健…あなたのお父さんはどうしてるの？」

「え…と父さんは…」

シンは言いずらいので下をむく…

「シンくんのお父さんとお母さんはついこの前亡くなったんです」

いままで黙っていたのはがシンに助け舟をだす

「そう…それはかわいそうに…」

「でも…いまはなのはの家族によくしてもらっていつまでも両親の死を気にしてちゃいけないんだと感じています」

「そうなの…なら心配はいらないわね…」

とここでまたリンディは砂糖入りの茶をまた飲んだ…

「それでは…これよりロストログア…ジュエルシードの回収については時空管理局が全権を持ちます」

「きみたちは今回のことは忘れてそれぞれの世界に戻って元どろりに暮らすんだ。」

「でも…そんな…」

「次元干渉に関わる事件だ！民間人が介入してもらうレベルの話じゃない！！」

「でも…！！」

「まあ急に言われても気持ちの整理がつかないでしょう。今夜一晩ゆっくり考えて三人で話し合ってそれから改めてお話をしましょ」

「送っていこう…元の場所でもいいね」

クロノが立ち上がる

「はい…」

（シンくんは大きくなったわね…両親が亡くなったのは残念なことだけどそれでも前をむいて進んでいるのを見て安心したわ）

リンディは一人シンのことを思って安心していた

元の場所…海鳴臨海公園へと戻ってきた三人は家への帰路にっこうとしていた…

「帰ろっか…シンくん…ユーノくん…」

「うん」

「うん、でもちょっと待ってなのは。ユーノに聞きたいことがある！」

「あっ！そうだねわたしも…ユーノくん…同じ年くらいだよね？」

「たぶん…もしかして怒ってる？そんなつもりじゃなかったんだけど…なんか…秘密にしたみたいになっちゃって…」

「うん、びっくりはしたけどそれだけだよ」

笑顔でそんなことはないと言定するのは

「シンは？」

「ぼくも驚いたただけだけど…ただ…どうして今までの戦闘とかフェレットのままだったの？人のほうが戦いやすいだろうに…」

「それは…どうしてだろうね？ずっと動物だったから動物に慣れてしまったからかな？」

アハハと苦笑いをするユーノ

「とりあえず…」

ユーノがフェレットの姿に変わる

「普段はこっちの姿でいるほうが便利そうだから」

「うん、そうだね」

「そうだな」

シンの肩に乗ったユーノ

「それじゃあ帰ろうか」

「うん」

なのはとシンは共に家へと向かって歩き出した…

アースラ内部

モニターにはなのはとフェイト…そしてシンの戦闘が映し出されていた

「すごいや！どっちもAAAクラスの魔道師だよ？それにあの男の子はSクラスだよ！」

部屋の中にエイミィの声が響き渡る

「ああ…」

クロノが相槌をうつ

「こっちの白い服の子はクロノくんの好みっばいかわいい子だし」

「エイミィ…そんなことはどうでもいいんだよ…」

クロノが呆れた顔で言う

「魔力の平均値を見てもこの子で127万！…黒い服の子で143万！…男の子の方は165万！！…最大発揮時はさらにその三倍以上…クロノくんより魔力だけなら上回っちゃうね」

エイミィが楽しそうに言う

「魔法は魔力値の大きさだけじゃない！！的確に使用できる判断力だろ？」

「それはもちろん！信頼してるよ、アースラの切り札だもんクロノくんは！」

「・・・」

少しエイミィを睨むクロノ

と後ろの扉が開きリンディが入ってくる

「あ！艦長！！」

リンディは部屋へ入るとモニターを見る

「ああ、三人のデータね？」

「はい…」

「たしかにすごい子たちね…?」

「これだけの魔力がロストロギアに注ぎ込まれれば次元震が起こるのも頷ける…」

「あの子たち…なのはさんやシンくん、ユーノくんがジュエルシードを集めてる理由はわかったけど…こっちの黒い服の子は何でなのかしらね?」

「ずいぶんと必死な様子だった…なにかよほど強い目的があるのか…」

クロノは考え込み始めた

「目的…ね?まだ、小さな子よねえ?…普通に育っていればまだ母親に甘えていたいたい年頃でしょうに…」

とあるビルのなか

「ッ!」

フェイトは先ほど受けた攻撃の痛みで倒れていた

「だめだよ!時空管理局まで出てきたんじゃないもつどうにもならないよ!逃げようよ…二人でどこかにさあ…」

「それは…だめだよ…」

「だって!雑魚クラスならともかくあいつ一流の魔道師だ!本気で

捜査されたらここだっていつまでバレずにいられるか…あの鬼婆！
…あなたの母さんだって訳わかんないこと言うし！フェイトにひどいことばっかするし！！」

「母さんのこと悪く言わないで…」

「言うよ！だってあたしフェイトのことが心配だ…フェイトが悲し
んでるとあたしの胸もちぎれそうで痛いんだ！フェイトが泣いてる
とあたしも目と鼻のおくがツーンとしてどうしようもなくなるんだ
！フェイトが泣くのも悲しむのもあたし嫌なんだよ！！」

「・・・わたしとアルフは少しだけど精神リンクしてるからね…ご
めんね…アルフが痛いならわたしもう悲しまないし泣かないよ」

フェイトは横にしていた体を起こしソファアに座る

「あたしはフェイトに笑って幸せになってほしただけなんだよ！！
なんで…なんでわかってくれないんだよ？」

アルフは涙を流しながらふさぎ込む

「ありがとう、アルフ…でもねわたし…母さんの願いをかなえてあ
げたいの…母さんのためだけじゃない。きっと自分のために」

フェイトはアルフの頭を撫でる

「だからあともう少しだから。わたしと一緒にがんばってくれる？」

「約束して…あの人の言うなりじゃなくて…フェイトはフェイトの
ためだけにがんばるって…そしたらあたしは必ずフェイトを護るか

ら！」

アルフは懇願するように言う

「うん」

フェイトはそれに静かに頷いた…

ユーノが机の上に置いてあるレイジングハートに近づきアースラへと通信をとる

「だからぼくとなのは、シンもそちらに協力させていたただきたいと…」

「協力ね…」

モニターでユーノを見ていたクロノが呟く

「ぼくはともかくなのはやシンの魔力はそちらにとっても有効な戦力だと思います。ジュエルシードの回収…あの子たちとの戦闘…どちらにしてもそちらとしては便利に使えるはずですよ！」

「うん。なかなか考えてますね…それならまあいいでしょう！」

リンディが頷く

「か、母さん…いや艦長…！」

クロノが驚いた声をだす

「手伝ってもらいましょ。こちらとしても切り札は温存したいもの…ね、クロノ執務官？」

「はい…」

ふと視線を感じてエイミイのほうを見るクロノ…

エイミイがこちらをじっと見つめていた。

それを見たクロノは腕を組んでそっぽを向いた

「条件は二つよ…三人とも身柄を一時時空管理局の預かりとする」と…それから指示を必ず守ること。よくって？」

「わかりました」

そのころなのは下で桃子と一緒に皿洗いをシンはリビングにいた
そんななのはたちにアースラとの通信を終えたユーノが念話を送る…

「（なのは、シン、決まったよ）」

「（うん、ありがとう。ユーノくん）」

「（ああ、わかったよ）」

「さて、桃子、なのは…お父さんたちはちょっと裏山に出かけてく

るからな」

士郎が冷蔵庫から飲み物を取り出しながら言う

「うん、今夜も練習？」

桃子が聞く

「ああ」

「気をつけてね！」

「ああ！さあって行くか？」

「おう」

「久しぶりだからな〜びしびしいくぞ！」

そんな会話をしながら士郎と恭也は玄関へと向かう…

それを見送ったなのははさつきまで止めていた皿洗いの手を動かす

「あ〜！まってまって！わたしも見学！」

美由紀が走って二人を追いかける

「ぼくも行きます！」

シンも二人を追いかける

「来るなら早くしろ！」

恭也が呼ぶ

「（なのは…桃子さんへの話…ごめんけど頼んだよ…）」

「（うん…任せて！）」

去り際にシンはなのはに念話をいれる

「さて…皿洗いはこれでおしまい…っ」と

桃子は皿を棚に戻したあと言う

「うん」

なのはの足元にユーノが来る

「さて…それじゃあ大事なお話ってなあに？」

「うん」

・・・

なのはは話し始めた…

お母さんに話したのはユーノくんと出会ってから今日までのこと…シンくんと仲良くなったきっかけについてもすこし…魔法のことやユーノくんの正体は言えないけど…言える限りのこと…それからそのためにすこしだけ家を空けないといけないこと…

「もしかしたら…あぶないことかもしれないけど…大切な友達と一緒に始めたこと…最後までやり通したいの」

「うん」

桃子は静かに頷く

「心配…かけちゃうかもしれないんだけど…」

「それはもういつだって心配よ…お母さんはお母さんだからなのはこのことがすごく心配…」

なのは下を向く

「だけどね、なのはがどっちにするか迷ってるなら危ないことはダメよって言うと思うけども…もう決めちゃってるんでしょ？友達と決めたこと最後までやり通すって…なのはが会ったその女の子ともう一度話をしてみたいって…それにシンも一緒に行くんでしょ？」

「うん」

「なら…いつてらっしゃい…後悔しないように」

桃子はなのはの頭に手を乗せる

「お父さんとお兄ちゃんはお母さんがちゃんと説得しといたげる！」

「うん…ありがとうお母さん…」

なのはは部屋へ戻るとまずシンへと念話を飛ばす

「（シンくん…OKもらったよ！）」

「（わかった…それじゃあ今すぐそっちに戻るから！）」

なのはが準備をしているとシンが帰ってきた…

そしてシンは最近できた自分の部屋行きすでに準備してあった荷物を手に取る…そしてなのはの部屋へと行く

「行こうか！なのは！！！」

「うん！！！」

月明かりの下…

家を出た二人は走りだした

（あと戻りはもうできない…自分で決めた道。自分が本当にやりたいこと…）

（いままでよりもさらに危険になる可能性がある…絶対に護らないと…）

【時の庭園】

四つのジュエルシードが輝いている

それを見るプレシア

「早く…早くなさい、フエイト…約束の地が…アルハザードが待っているの…私の…私たちの救いの地が…！」

「それは大いなる危機なの」(後書き)

次回「決戦は海の上での」

「決戦は海の上でなの」（前書き）

ジュエルシードについて教えてもらうのはたち

そんな中フェイトとアルフは静かにこれからのことを決意する

なのはとシンとユーノもまた時空管理局の人たちと一緒にジュエルシードを探することを決意する…

魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜始まります

「決戦は海の上でなの」

【アースラ】 会議室

「とうわけで…本日零時をもって本艦全クルーの任務はロストロギア…ジュエルシードの搜索と回収に変更されます。また本件においては特例として問題のロストロギアの発見者であり結界魔道師でもあるこちら…」

「はい、ユーノ・スクライアです」

ユーノが立ち上がる

「それから彼の協力者である現地の魔道師さんたち…」

「高町なのはです!」

「田中シンです!」

なのはとシンが同時に立ち上がる

「以上三名が臨時局員の扱いで事態にあたってくれます」

「「よろしくお願いします」」

三人は声をそろえて言う

そんななかなのははクロノにとびつきりの笑顔を向ける

それに対しクロノは顔を真っ赤にして顔を背ける…

それを見たシンとユーノはそろってクロノを睨みつける…

ユーノはこいつなにやってるんだみたいな目だが、シンにいたっては殺気に近い目だ

会議室から出たアースラのメンバーとなのはたちはブリッジに来ていた

「じゃあここからはジュエルシードの位置特定はこちらですわ。場所がわかったら現地に向かってもらいます」

「はい」

なのは、シン、ユーノが返事をする

「艦長…お茶です」

エイミィがお盆をもって現れた

「ありがとう」

リンディは砂糖をスプーンでたくさん入れた後ミルクをお茶に入れてそれをおいしそうに飲む

それをなのはとシンはうわあみたいな顔で見る

「そつえば、なのはさんとシンくんは学校のほうは大丈夫なの？」

「はい」

「家族と友達には説明してありますので…」

私立聖祥大付属小学校

「そういうわけで高町さんと田中くんはご家庭の事情で何日か学校をお休みするそうです。でも病気や怪我や不幸なことがあってお休みするわけではないということですから心配しなくても大丈夫ですよ」

アリサとすずかがなのはとシンの空席の席を見つめる

「高町さんと田中くんがお休みの間ノートとプリントは…」

「はい！あたしが」

アリサが手を上げる

それをうれしそうな目で見るすずか

「アリサさん、それじゃあよろしくね…でも二人分はちょっと多いだろうから誰かに手伝ってもらってね？」

「それならわたしがやります」

すずかが手を上げる

「そう、なら月村さんもよろしくね」

「はい」

「それじゃあホールルームを始めましょう」

「起立！礼！」

当番が号令をかける

そんななかずかにはなのはとシンを心配してた

（なのはちゃんとシンくん…元気でいるかな？）

「着席！」

ガラガラと席に座る音がした

その頃のなのはたち…

結界内部

「ユーノ！今だ捕まえるぞ！！」

自らを囿にしながらバインドをかけるシン

ユーノのチェインバインドとシンのバインドに捕まり身動きがとれなくなる大きい鳥

「捕まえた！なのは！！」

「うん！」

いままで待機していたのが動きだす

『Sealing mode・Set up.』

大きな鳥の姿のジュエルシードに向かって封印の攻撃魔法が飛ぶ

『Stand by・Ready.』

「リリカルマジカル！ジュエルシードシリアル8！封印！」

『Sealing.』

封印されたジュエルシードが落ちてくる…それをなのははレイジン
グハートで回収した

『Received Number 8.』

アースラブリッジ

「状況終了です。ジュエルシードナンバー8無事確保。お疲れ様なのはちゃん、ユーノくん、シンくん」

「はい」

「ゲートをつくるね。そこで待ってて」

「ん〜 三人ともなかなか優秀だわ…このままうちにほしいくらいかも」

リンディが感心する

エイミイとクロノはその頃フェイトについて調べていた

「この黒い服の子…フェイトって言っただけ？」

「フェイト・テストロッサ…かつての大魔道師と同じファミリーネームだ」

「ふえ？そっなの？」

「だいぶ前の話だよ…ミッドチルダの中央都市で魔法実験の最中に次元干渉事故を起こして追放されてしまった大魔道師…」

「その人の関係者？」

「さあね…本名とも限らない」

画面にはNOT FOUNDの文字が現れる

「ああ…やっぱりダメが見つからない。フェイトちゃんってばよっぽど高性能なジャマー結界を使ってるみたい」

「使い魔の犬…たぶんこいつがサポートしてるんだ」

「おかげでもう二個もこっちが発見したジュエルシードを奪われちゃってる…」

「しっかり探して捕捉してくれ！頼りにしてるんだから！！」

「はいはい……」

アースラの通路

「フェイトちゃん現れないね……」

「うん……」

「こつちとは別にジュエルシードを集めてるみたいだな」

「そうだね……」

その頃のフェイトはジュエルシードを探していた

「フェイト、ダメだ……空振りみたいだ」

「そう……」

「やっぱ……むこうに見つからないように隠れて探すのはなかなか難しいよ……」

「うん……でももう少しがんばろう」

フェイトは腕に巻いていた包帯をはずし包帯を空へと放った……

そして……わたしたちがアースラに移ってから十日目……

アースラのなのはの部屋

（わたしたちが手に入れたジュエルシードは8、9、12の計三つ…そしてフェイトちゃんたちが手に入れたのが…シリアル2と5の二つだから…）

「あと六個か？」

ユーノが呟く

アースラブリッジ

「残り六つ…見当たらないわね…」

リンデイが考え込む

「搜索範囲を地上以外まで広げてみます。海が近いのでもしかするとその中かも…例の黒い服の子とあわせてエイミィが搜索してくれます」

クロノが報告する

「そう」

アースラ食堂

なのはとシン、ユーノがお菓子を食べていた

「今日も空振りだったね？」

「うん…」

「もしかしたら結構長くかかるかもしれないな…」

「なのは…シン…ごめんね」

「????」

なのはとシンは意味がわからないという顔をする

「寂しくない？」

「ぼくは別にだいじょうぶだよ！なのはは？」

「わたしもちつとも寂しくないよ…シンくんやユーノくんと一緒にだし、一人ぼっちでも結構平気…ちっちゃいころはよく一人だったから…うち…わたしがまだちっちゃい頃にね…お父さんが仕事で大怪我をしちゃってしばらくベットから動けなかったことがあるの…喫茶店も始めたばかりで今ほど人気なかったから…お母さんとお兄ちゃんはいつもずっと忙しくて…お姉ちゃんはずっとお父さんの看病で…だからわたしわりと最近まで家で一人でいることが多かったの…だから結構慣れたの」

「そっか…」

「なのは…そんなことがあったんだ…」

「そういえばわたしユーノくんの家族のこととかあんまり知らないね」

「そうだな…ぼくも知りたいな」

「ああ…ぼくはもともと一人だったんだ…両親はいなかったんだけど部族のみんなに育ててもらったから。だからスクライアー族のみんながぼくの家族」

「そっか…」

なのはたちはまたお菓子を食べ始めた
ブーン、ブーン

警報が鳴る

「エマーゼンシー、捜査空域の海上にて大型の魔力反応を感知。
放送が流れる

「な、なんてことしてるの？あの子たち！」

エイミイが叫ぶ

現場の海上…

フェイトが大きな魔方陣を展開して目を閉じ呪文を唱えていた

「アルカス、クルタス、エイギアス、煌めきたる円陣よ、いま導きの元、降りきたれ…バルエル、ザルエル、ブラウゼル…」

魔方陣から雷が海に向かって落ち始めた

(ジュエルシードはたぶん海の中。だから海に電気の魔力粒を叩き込んで強制発動させて位置を特定する…そのプランは間違っていないけど…でもフェイト！)

アルフが心配する

そんななかフェイトの詠唱はさらに進む

「撃つは雷、響くは轟雷…アルカス、クルタス、エイギアス…」

フェイトの頭上に黄色い目玉のようなものがいくつか現れ雷を纏う

「はああ…！」

バルディッシュを海へと向けて電気の魔力粒を叩き込んだ

海が荒れ、叩き込まれた魔力粒によって海の中にあつた六個のジュエルシードが同時に強制発動された

「ハア…ハア…ハア…見つけた残り六つ！」

大量の魔力を消費したために疲労の色が見えるフェイト

(こんだけの魔力を打ち込んで…さらにすべてを封印して…こんなフェイトの魔力でも絶対に限界超えた！)

「アルフ！空間結界とサポートをお願い」

「ああ！まかせといて！」

(だから誰が来ようが、何が起きようがあたしが絶対護ってやる！)

雷鳴が鳴り響く中アルフは固く決意する

発動したジュエルシールドは竜巻のように渦巻く

「いくよバルディッシュ！がんばろう！」

フェイトがバルディッシュを構えてジュエルシールドへと突っ込んだ

その頃なのはとシンはアースラの通路をブリッジへと全力で走っていた

アースラのブリッジ

「なんともあきれた無茶をする子だわ！」

「無謀ですね…間違いなく自滅します。あれは個人が出せる魔力の限界を超えている」

そのときブリッジの扉が開きなのはとシンが入ってくる

「フェイトちゃん!!」

「状況はどうなってるんですか？」

モニターにフェイトが戦ってる姿が映っていた

「あのわたし急いで現場に!!」

「ぼくもいきます!」

「その必要はないよ!ほづつておけばあの子は自滅する」

「!」

「それは自滅するのをここで見ておけということか?」

シンはクロノに聞く

「そういうことだ!仮に自滅しなかったとしても力を使い果たしたところで叩けばいい!」

「でも!」

なのはは納得ができず意義を唱える

「今のうちに捕獲の準備を」

クロノが局員に指示を出す

「了解!」

フェイトは豪雨の中ジュエルシードを封印するために戦っていた

「うわああ!」

「フェイト!」

吹き飛ばされたフェイトを助けようとしたアルフもジュエルシード

の魔力に捕まった

吹き飛んだフェイトはなんとか体勢を整える…しかし先ほど大量の魔力を使ったため魔力刃を形成できないほど魔力が底をつきてしまった

それをアースラのブリッジからモニターで見つめるのはたち

「わたしたちは常に最善の選択をしないとイケないわ。残酷に見えるかもしれないけどこれが現実」

「でも…」

「(行って!)」

(!!!)

なのはの頭に念話が流れ込む

「(なのは行って!シンを連れて…ぼくがゲートを開くから行ってあの子を!!!)」

なのはが振り向くとユーノが立っていた

「(でもユーノくん…わたしがあの子と…フェイトちゃんと話したいのはユーノくんとは…)」

「(関係ないかもしれない…だけどぼくはなのはが困ってるなら力になりたい…きっとシンも…いやシンの方がそう思ってると思うよ)」

「

なのはがシンのほつを見る…するとシンはユーノとの念話の内容がわかっていくかのごとくこちらを向いてただ頷いた

ユーノは後ろにある転送装置を起動させた

それに気づいたクロノが非難の声を上げる

「きみは…!!」

その間になのはとシンは転送装置へとたどり着く

「…!!」

それに驚くリンディとクロノ

「ごめんなさい。高町なのは、田中シン、指示を無視して勝手な行動とります!!」

ユーノはそれを聞いた後指で印をきる

「あの子の結界内へ転送!!」

なのはとシンはフェイトたちがいる上空へと転送された

上空からゆっくり落下していくなのはとシン

「さあ行くのかなのは。話しがしたいんだろ？」

「うん…でもシンくんはよかったの？」

「いいよ気にしなくて。それじゃあクロイツセットアップ!」

銀色の光に包まれるシン

「わたしたちも行こうかレイジンググハート! 風は空に星は天に輝く
光はこの腕に不屈の心はこの胸に! レイジンググハートセットアッ
プ!」

『Stand by・Ready』

ピンク色の光に包まれた

魔力の反応を感じたフェイトは空を見上げる…するとそこには空か
ら降りてくるのはとシンの姿があった

「フェイトの邪魔をするな!」

ジュエルシードの魔力の塊に捕まっていたアルフはそれを引きちぎ
りなのはとシンのところへ行こうとする

しかしそれはいつの間に転移したのかユーノの魔法によって止めら
れた

「違う! ぼくたちはきみたちと戦いにきたんじゃない!」

「ユーノくん!」

「ユーノ!」

「馬鹿な！なにやってんだきみたちは！！」

クロノは通信で三人に怒鳴る

「ごめんなさい…命令無視はあとでちゃんと謝ります…けどほっとけないの！…あの子きつとひとりぼっちなの…ひとりっきりが寂しいのはわたし少しだけどわかるから！」

「さてまずはジュエルシードを止めないとな」

シンが言う

「うん、早く止めないとまずいことになる…」

ユーノがそれに同意する

「だから…」

ユーノは魔方陣を展開する

「今は封印のサポートを！！」

ユーノの魔方陣からストラグルバインドが飛び出しひとつの竜巻状態のジュエルシードを捕まえた

それをじっと見るアルフ

その頃なのははフェイトのところに向かっていった

「フェイトちゃん！」

フェイトのところへつくのは

「手伝って。ジュエルシードを止めよう！」

レイジングハートのコアから魔力が溢れ出しバルディッシュのコアへと流れ込む

『Power charge.』

いままで消えていたバルディッシュの魔力刃が再生する

『Supplying complete.』

「二人できっちり半分こ！」

フェイトは不思議そうな顔をしていたがなのはただ力強く頷くだけだった

ユーノはいくつかのジュエルシードを抑えていたがジュエルシードの力が強くバインドが破られそうになっていた時

隣からオレンジ色のチェーンバインドが飛び出しジュエルシードに巻きついた

すべてのジュエルシードに捕縛をかけたユーノとアルフ

「ユーノくとアルフさんが止めてくれてる！だからいまのうち！みんなでせーので一気に封印！！」

フェイトのほうを向いて言うのは

『Shooting mode』

なのはそのあとシンのいる上空へと上がっていく

(ひとりぼっちで寂しいときに一番してほしかったことは…「大丈夫?」ってきいてもらうことで
優しくしてもらうことでもなくて)

シンのところにつくと早速魔方陣を展開するなのは

「フェイトに魔力を分けるんだったらぼくに言ってくればよかったのに…ぼくのほうが魔力量大きいんだから!」

シンは先ほどのなのはの行動について言う

「それじゃあ意味ないの!フェイトちゃんと分け合わないと…」

「そっか…」

「シンくん…せーので同時に攻撃だからね!」

「ああ、わかってるよ」

シンも魔方陣を展開させた

フェイトはいまだなのはの行動に呆然としていた

『Sealing form・Set up.』

「バルディッシュ…」

あの子の言うとおりにしろと言わんばかりにバルディッシュは封印の体勢に入る

フェイトはなのはのほうを見る…するとなのははフェイトにむかってウインクをしていた

「ディバインバスターフルパワーいけるね？」

なのははレイジングハートを上に上げ聞いていた

『All right, my master.』

レイジングハートの返事のことなのはの足元に展開していた魔方陣がさらに大きくなった

「こつちもフルパワーだ！クロイツ！！」

『All right.』

シンの足元の魔方陣もなのはと変わらないほどの大きさになる

フェイトも自らの足元に巨大な魔方陣を展開する

それを見たのが合図の言葉を放つ

「せいの…！」

「サンダー……」

ジュエルシールドに向けて魔力でできた雷が落ちる

「デイバイン……」

レイジングハートの杖先に魔力が集中する

「アイス……」

クロイツの杖先にも冷気を帯びた魔力が集中する

「レイジ……!」

フェイトはバルディッシュを魔方阵につき立てたするとジュエルシールドを襲っていた雷の威力が上がった

「バスター……!」

なのはとシンの声が重なり同時に砲撃を放つ

砲撃が直撃した後あたりは爆発と爆煙、そして光に包まれた

その頃アースラのブリッジ

「ジュエルシールド六個すべての封印を確認しました」

エイミィが報告する

「な、なんてでたらめな…」

「でもすごいわ…」

クロノとリンディが驚いていた

海上…なのはとシン、フェイトの前に封印された六個のジュエルシードが現れた

（おんなじ気持ちに分け合えること…寂しい気持ちも悲しい気持ちを半分こにできること…）

お互いに動かずジュエルシードを見つめる二人

そんなのはを見守るシン

（ああ、そうだ…やっとわかった。わたしこの子と分け合いたいんだ）

なのはは胸に手を置いて言う

「友達に…なりたいんだ」

「!?!?!」

フェイトは驚きで目を見開く

アルフもまたなのはの言葉を聞き驚いていた

その頃アースラでは警報が鳴り響いていた

「次元干渉？別次元から本艦及び戦闘空域にむけて魔力攻撃来ます
！…！…あ、あと六秒！」

「！…！」

紫色の雷がアースラを襲った

なのはやフェイトがいるところも雷が襲っていた

雷が海上に落ち水しぶきが上がる

「母さん？」

フェイトが呟く

その瞬間フェイトの体を雷が襲った

「うう…うあぁあ…」

「フェイトちゃん…！」

なのはが心配する

そんななのはのところにも雷が襲つ…

「なのは…！」

シンはとっさになのはをかばい雷にあたる

アルフは獣型から人型に変わるとフェイトのところにいき雷の攻撃から開放されたフェイトを海上ギリギリで抱きかかえる

それから一直線にジュエルシードに向かっていき手を伸ばすが突如現れたクロノに阻止される

「邪魔…するなあ…！」

クロノを押しのとげるとジュエルシードのほうへ向き直る

六個あつたはずのジュエルシードが三つに減っていた

「三つしかない！」

アルフは海上すれすれまで吹き飛ばしたクロノのほうをみるするとクロノの手には三つのジュエルシードがあつたそしてクロノはそれらをデバイスの中に回収した

それを見たアルフは怒りに身をまかせ思いつきり魔力を海に叩きつけた

水しぶきがなのは、シン、クロノを襲う

そのころにはアースラへの魔力攻撃はやもうとしていた

「逃走するわ！捕捉を…！」

「ダメです！雷撃で機能停止！」

「…！！！」

「大丈夫か？なのは」

「シンくん…さっきのはいい…」

「機能回復まであと25秒！追いきれません！」

「……………」

リンディはあげていた腰を下ろし席へと座る

「機能回復まで対魔力防御…次弾に備えて…」

「はい！」

「それから…なのはさんとシンくん、ユーノくん、クロノを回収します」

海上ではなのは、シン、ユーノ、クロノが無言で立っていた…

「決戦は海の上でなの」（後書き）

え〜とやっところまで来ましたね

ほとんどアニメそのままなのに結構時間かかりますね

え〜といつもは次回の題名だけなんですけど今回は報告があっ
てこんなこと書いてます

え〜と現在この小説：魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜の
第三部目を執筆中です…

第二部のA・Sをとばしての第三部です

ちなみに今第3話を書いています

もしかしたら第一部や第二部が終わらないうちに投稿するかもしれ
ません…

それにしてもオリジナルストーリーって難しいですね…

特に名前とか名前とか名前とか…

そうそう第三部の題名は魔法少女リリカルなのは〜銀色と金色の英雄〜です

なんかありがちですね…

はい、すみません…こんなショボい題名しか思いつかない作者で…

ちなみにこの題名からわかるようにシンの他に新しくキャラが出てきます…

予告するとその子はシンの友達です

この小説を読んで頂いてる方でもし早めに第三部が読みたい人がいれば教えて下さい！

読者の声によってはかなり早めに投稿するかもしれません

あ！そういえば前回の投稿でお気に入り登録件数が10件に到達しました

登録してくれた方ありがとうございます

こんなシヨボい作品ばかり書くダメな作者ですががんばって書いていこうと思います…それでは！

次回「それぞれの胸の誓いなの」

「それぞれの胸の誓いの」（前書き）

管理局への協力を決め順調にジュエルシードを回収していくのは
たち

あとジュエルシード六つとなったとき突如巨大な魔力反応が

それはフェイトがジュエルシードを発動するために放った魔力であ
った

苦戦するフェイトのもとになのはとシンが駆けつけ共にジュエルシ
ードを封印した

だがそんな時魔力による雷が襲いフェイトを直撃

アルフは三つのジュエルシードとフェイトを連れどこかへと消え去
った

魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜始まります

「それぞれの胸の誓いの」

「四人とも…戻ってきて」

リンディがクロノへと通信する

「了解…」

「で、なのはさんとシンちゃんとユーノくんにはわたし直々のお叱りタイムです」

腕を組みながらリンディはそうクロノに告げた

アースラ会議室

なのはとシンとユーノはひどくかしまった様子でリンディのお叱りを受けていた

「指示や命令を守るのは個人のみならず集団を護るためのルールです。勝手な判断や行動があなたたちだけでなく…周囲の人たちも危険に巻き込んだかもしれないということ…それはわかりますね？」

「…はい…」

ひどく弱弱しい声で返事をする三人

「本来なら厳罰に処すところですが…結果としていくつか得ることであります。よって今回のことについては不問といたします」

なのは、シン、ユーノは顔を見合わせる

「ただし！二度目はありませんよ。いいですね？」

「はい……」

「すみませんでした」

「さて…問題はこれからね？クロノ、事件の大元について何か心当たりが？」

リンディがクロノに聞く

「はい、エイミィモニターに」

「はいはい〜」

会議室のモニターに情報が映る

「あら！？」

それを見たリンディが驚く

「そう…ぼくらと同じミッドチルダ出身の魔道師プレシア・テストロツサ。専門は次元航行エネルギーの開発…偉大な魔道師でありながら違法研究と事故によって放逐された人物です。登録データとさつきの攻撃の魔力波動も一致しています。そしてあの少女フェイトはおそらく…」

「フェイトちゃんあの時母さんって…」

「そういえば言ってたな」

「親子…ね…」

「その…驚いてたっていうよりなんだか怖がってるみたいでした…」
なのはがうつむきながら言う

「エイミー！プレシア女史についてももう少し詳しいデータ出せる？
放逐後の足取り…家族関係…その他なんでも！！」

「はいはい。すぐ探します！」

（この人がフェイトちゃんのお母さん…）

モニターを見ながらなのはは考え込んだ

【時の庭園】

バシッ！

バシッ！

バシッ！

鞭で何かをしばく音が響く…

「…」

「ハア…ハア…ハア…」

フェイトが手を吊るされプレシアに鞭で叩かれていた

「あれだけの好機を前にしてただボーっとしてるなんて！」

「ごめん…なさい…」

「

フェイトの服はすでにぼろぼろになっていた

「ひどいわフェイト…あなたは母さんを悲しませたいの？」

鞭を振り上げるプレシア…

それを見てフェイトは目を瞑る…脳裏にはさきほどなのはに言われた言葉…

「友達になりたいんだ…」

…プレシアの容赦のない鞭でのしばきにフェイトの悲鳴が響き渡った

アースラ会議室

「プレシア・テストロッサ…ミッドの歴史で26年前は中央技術局の第三局長でしたが…当時彼女個人が開発していた次元航行エネルギー

ギー駆動炉【ヒュードラ】使用の際、違法な材料を持って実験を行い失敗…結果的に中規模次元震を起こしたことが元で中央を追われ地方へと追いやられました。ずいぶんもめたみたいです。失敗は結果に過ぎず実験材料にも違法性はなかったと…辺境に移動後も数年間は技術開発に携わっていました。しばらくのうちに行方不明になってそれっきりですね…」

エイミイが一気に説明する

「家族と行方不明になる前の行動は？」

リンディイが聞く

「そのへんのデータはきれいさっぱり抹消されちゃってます。今本局に問い合わせ調べてもらってますので…」

「時間はどれくらい？」

「一両日中には…」

「ん〜。プレシア女史もフェイトちゃんもあれだけの魔力を放出した直後ではそうそう動きはとれないでしょう。その間にアースラのシールド強化もしないといけないし…」

リンディイが椅子から立ち上がる

「あなたたちは一休みしておいたほうがいいわね」

「え？でも…」

「いいんですか？」

「ええ。特になのはさんとシンくんはあまり長く学校を休みっぱなしでも良くないでしょう。一時帰宅を許可します！ご家族と学校に少し顔見せといたほうがいいわ」

リンディは歩いて会議室を出て行く

「はい……」

なのはとシンが返事をした

【時の庭園】

「フェイト！フェイト！」

倒れているフェイトにアルフが駆け寄る

「フェイト…フェイト…」

アルフはフェイトを抱きしめるとフェイトをこんな目にあわせた元凶……プレシア・テストロツサがいるであろう部屋を睨みつける

「…たった九つ…これでも次元震は起こせるけどアルハザードには届かない…ゴホッ」

プレシアの口から血が吐き出され石像に血が飛び散る

「もうあまり時間がないわ…わたしにもアリシアにも…」

ドコンー!!

壁が砕け散る音がした

プレシアが音のしたほうを見るとアルフが立っていた

「ふん」

アルフはゆっくりとプレシアに近づいていく…

ある程度近づくとアルフは勢いよくプレシアへと踊りかかった

…が突如発生した障壁によって阻まれ近づくことができなかった

「うわああ!!!!」

アルフは再度プレシアへと攻撃する

そしてようやく障壁を破壊しプレシアへと近づくとその胸ぐら掴んだ

「あなたは母親である子は娘だろう!! あんなにがんばってる子に… あんなに一生懸命な子に… なんてあんなひどいことができるんだよ?」

アルフは必死に訴えるがプレシアの表情を見て顔色を変える

プレシアの顔には表情はなくどこかさめている表情だった

プレシアは手を前に出すとアルフの腹に向かって魔力弾を打ち込んだ

腹を撃ち抜かれたアルフはそのまま吹っ飛び壁に激突する

「あの子は使い魔の作り方が下手ね…余分な感情が多すぎるわ」

「フェイトは…あなたの娘はあなたに笑って欲しくてやさしいあなたに戻って欲しくてあなたに…!!…うう」

痛みに顔をしかめる

「ふん」

いつの間にか目の前にいたプレシアの手に杖が現れる

「邪魔よ…消えなさい!!」

杖先に魔力が集中されそれが放たれた…辺りは爆煙に包まれる

放たれる直前にアルフは地面に向けて魔法陣を展開し次元空間へと逃げ出した

「どこでもいい…転移しなきゃ…ごめんフェイト…少しだけ待って」

オレンジ色の光に包まれアルフは転移した

フェイトは眠っていた

「フェイト!起きなさいフェイト」

「はい…母さん」

フェイトは目を開けた

そこにはプレシアがジュエルシードを持ち立っていた

「あなたが手に入れてきたジュエルシード九つ…これじゃ足りないの…最低でもあと五つ、できればそれ以上…急いで手に入れてきて…母さんのために」

「はい…」

フェイトは体を起き上がらせる

するとアルフのマントがかけられてるのに気づく

「アルフ？」

「ああ、あの子は逃げ出したわ。怖いからもういやだつて。必要ならもつといい使い魔を用意するわ。忘れないで…あなたの本当の味方は母さんだけ。いいわね？フェイト」

「はい…母さん」

その頃高町家では…

「と、そんな感じの十日間だったんですよ!」

「あら〜そうだったんですか？」

リンディが桃子と話をしていた

「（リンディさん…見事な誤魔化しというか…真っ赤な嘘というか…）」

「（すごい…よくこんなにポンポン誤魔化しかたが浮かんでくるもんだ…）」

シンとなのはが念話で話していた

「（本当のことは言えないんですからご家族にご心配をおかけしないお気遣いと言ってください）」

リンディが念話に割り込んできた…その間もリンディと桃子の談笑は続いていた

「でも〜なのはさんとシンくんはとても優秀なお子さんですし〜もうほんとうちの子にも見習わせたいくらいで〜」

それを聞いたときシンはリンディの子…クロノを思い浮かべ苦笑していた

「あらあら…またまたそんな!」

「うちのクロノはどうも愛想がありませんで!」

「なのは…今日明日くらいは家にいられるんでしょ?」

美由紀がなのはに聞く

「アリサちゃんもすずかちゃんも心配してたぞ！もう連絡したか？」

「うん。さっきメールを出しといた」

車の中

「送信つと」

アリサは上機嫌で携帯を閉じる

「アリサお嬢様何か良いお知らせでも？」

「別に普通のメールよ」

アリサは横を向いて車の窓から外を見る…すると気になるものに映った

「鮫島！ちよつと止めて！！」

アリサは車が止まるとさつき見たものへ向かって走っていった

そこには大きなオレンジ色の犬…アルフが血を流して倒れていた

「やっぱり大型犬…」

鮫島が走ってアリサのところへくる

「怪我をしていますな…かなりひどいようです」

「でも…まだ生きてる…鮫島！」

「心得ております。」

鮫島がアルフに近づいていく

(フェイト…)

アルフはフェイトのことを考えながら意識を失った

次にアルフが目覚めたときアルフはアリサ家にいた

「あ！目覚めた」

アルフは声のしたほうへ顔をむける。そこには金髪の少女がいた

(あれ？このちびっ子どっかで…)

「あんた頑丈にできてるのね？あんなに怪我してたのに命に別状はないってさ。怪我が治るまでは家で面倒見てあげるからさ」

アリサはドックフードをアルフの前に置く

「だから安心していいよ」

アルフの頭をアリサは撫でた

(あ！あの子の友達なんだ…)

アルフの脳裏に前温泉で出会ったことがよみがえる

「ほら、やわらかいドックフードなんだけど…食べられる?」

アルフは先ほど出されたドックフードに近づいていき食べ始める

それをうれしそうな顔で見るアリサ

「フフ そんなに食欲があるなら心配ないね。食べたらゆっくり寝て休んで、早く良くなりなね?」

翌朝

学校の屋上で

「なのはちゃん!シンくん!よかった元気で!」

「ありがとう!すすかちゃん」

「ありがとう。すすかもアリサも元気そうよかった」

なのはとシンが心配してくれたお礼を言う

「アリサちゃんもごめんね心配かけて…」

「まあ…よかったわ元気で」

隣にいたアリサはそっぽをむきながら言った

それを見たなのは、さすが、シンはクスクス笑った。素直じゃないな〜と思いつながら…

「そっか…また行かないといけないんだ…」

「うん…」

教室にもどった四人はこれからのことを話していた

「大変だね…」

「そうでもないよ。大丈夫だから気にするなよ？」

「放課後は一緒に遊べる？」

「大丈夫」

「じゃあ…家に来る？新しいゲームもあるし」

「ほんと？」

「そういえばね、タベ怪我してる犬を拾ったの」

「犬？」

「うん、すごい大型で毛並みがオレンジ色で…おでこにね赤い宝石がついてるの」

「…!!…!!…」

「（シンくん…もしかして…）」

「ああ、アルフかもしれないね）」

「（でもどうしたんだろう…）」

「（わからないよ、でももしアルフなら会って話を聞いてみたらいいよ）」

「（そうだね…）」

放課後

アリサ家

「（やっぱりアルフか…）」

「（あんたたちが…）」

「（その怪我…どうしたんですか？それにフェイトちゃんは？）」

アルフはそれを聞くと落ち込み檻の奥へと行ってしまった

「あららら…元気なくなっちゃった…どうした？大丈夫？」

アリサが心配する

「傷が痛むのかも…」

四人は立ち上がる

「そつとしといてあげようか？」

「うん」

するとすずかの腕からユーノが飛び出しアルフへと近づいていった

「ユーノ！こら危ないぞ！」

「大丈夫だよユーノくんは」

「（なのは、シン、彼女からはぼくが話を聞いておくから二人はアリサちゃんたちと）」

「（うん）」

「（ああ）」

「それじゃあお茶にしない？おいしいお茶菓子があるの」

「うん」

「楽しみ」

なのはとシン、アリサとすずかは家のほうへとむかって行った

ユーノはなのはたちが自分たちの声が届かない場所まで行ったのを感じると口を開く

「いったいどうしたの？きみたちの間でいったいなにが？」

「あながここにいるってことは管理局の連中も見てるんだろっね？」

「うん」

「時空管理局クロノ・ハラオウンだ。どうも事情が正直に話してくれれば悪いようにはしない。きみのこともきみの主…フェイト・テスタロッサのこと…」

アースラのモニターでユーノとアルフのやりとりを見ていたクロノが口をだす

「話すよ…全部…だけど約束して…フェイトを助けるって。あの子はなにも悪くないんだよ…」

「約束する。エイミィ、記録を」

「してるよ」

「フェイトの母親…プレシア・テスタロッサがすべての始まりなんだ…」

アルフは話し始めた…

「（なのは、シン、聞いたかい？）」

「（ああ）」

「（うん。全部聞いた…）」

「（きみたちの話と現場の状況、そして彼女の使い魔アルフの証言と現状を見るに…話に嘘や矛盾はないみたいだ…）」

「（どうなるのかな？）」

「（プレシア・テストロッサを捕縛する！アースラを攻撃した事実だけでも逮捕の理由にはおつりがくるからね…だからぼくたちは艦長の命がほしい！プレシアの逮捕に任務を変更することになる。きみたちはどうする？高町なのは、田中シン。）」

なのはとシンは顔を見合わせる

「（そんなの決まってる…そうだろう？なのは）」

「（わたしは…フェイトちゃんを助きたい！アルフさんの想いとそれからわたしの意志…フェイトちゃんの悲しい顔はわたしもなんだか悲しいの…だから助きたいの…悲しいことから）」

アルフは目に涙を浮かべながら聞いていた

「（それに友達になりたいって伝えた…その返事を聞いてないしね！）」

「（わかった。こちらとしてもきみたちの魔力を使わせてもらえるのはありがたい！フェイト・テストロッサについてはなのはに任せろ。それでいいか？）」

クロノがアルフに聞く

「（うん、なのは…だったね。頼めた義理じゃないけど…だけど…お願い…フェイトを助けて…あの子…いまほんとに一人ぼっちなんだよ。」

「（うん。大丈夫まかせて）」

「（大丈夫。なのはにまかせておきなよ）」

なのはとシンはアリサとすずかの待つ部屋へと入っていった

「遅いよ、なのは、シン!!」

「ほら？新しいダンジョンに入るの待ってたんだよ」

「にははは。ごめんごめん!!」

「悪かった…」

「うわ〜かつこいいねこれ〜」

なのはが画面のダンジョンをみて感嘆する

そんななかクロノからの通信が届く

「（予定通りアースラへの帰還は明日の朝。それまでの間にきみたちがフェイトに遭遇した場合は）」

「（うん、大丈夫）」

「（心配しなくても大丈夫さ）」

・・・ゲームも終わり四人はお茶をしていた

「なかなか面白かったわ」

「やっぱりなのはちゃんがいたほうが楽しいよ」

「ねえ？すずか…それってぼくはいてもいなくても変わらないってこと？」

シンが落ち込む

「ち、違うよ。そんなことないよ！ただ…やっぱり昔みたいにみんなで遊びたいなと思って…」

すずかがあわてて言う

「そっか…」

少し気分をよくしたシン

「ありがとう…すずかちゃん…たぶんもうすぐ全部終わるから。もしたらもう大丈夫だから」

「なのは…なんかすこし吹っ切れた？」

「え？えっと…どうだろう？」

「心配してた…てかあたしが怒ってたのはさなのはが隠し事をして
ることも考え事してることもなくて…なのはが不安そうだった
り迷ったりしていること、それでときどきそのままあたしたちのと
ころへ帰ってこないんじゃないかなって思っっちゃうような目をする
こと…」

「・・・」

なのははアリサのほうをじっと見つめずかはジュースのストロー
をくわえながらアリサとなのはを交互に見、シンは二人の様子をじ
っと見守っていた

「行かないよ…どこにも…友達だもん！どこにも行かないよ！」

「そっか？」

「うん」

アリサとすずかがうれしそうに答える

(うん、どこにも行かない。わたしはちゃんとここに帰ってくる…
シンくんと一緒に…)

なのはとシンはアリサとすずかに手をふりアリサの家をあとにする

(ただ少しだけ…いつもと違う時を過ごすこと…それはこれから先
…自分らしくまっすぐいるため…後悔しないようにするための小さ
な旅…)

道場で一本の木刀を正座で眺めているのは

ガラガラガラ

道場の扉が開く音がした

「いい顔になったな」

道場に士郎が入ってきた

「あー！」

「迷いは消えたのか？」

「お父さん……」

「なのはが迷ってたこと知ってたの？」

なのはは立ち上がる

「そりゃそうだ。お父さんはお父さんだからな」

やさしくなのはに言う

「明日はまた朝早くから出かけるんだろ？」

「うん……」心配をお掛けします……」

「まあ……なのはは強い子だからな、それにシンもついてるから父さ

んはそれほど心配してないよ。がんばってこいしっかりな！」

士郎はなのはの頭を撫でながら言う

「うん！」

なのはは笑顔で返事をした

そして道場から出てくる士郎となのはを桃子は温かい目で見守っていた

海鳴市 住宅街

高町家 AM 5:27

なのはとシン、ユーノが家から出てきた

「行くうー！なのは

「うん！」

なのはとシンは走り出す

「なのは！シン！」

ユーノが二人を呼ぶ

なのはとシンはどうしたのかと横を見ると隣でアルフが塀の上を走っていた

アルフは塀から飛び降りるとなのはたちと一緒に走り始めた

海鳴臨海公園 AM5:55

「ここならいいね？出てきて…フェイトちゃん！」

シンとユーノとアルフは辺りを探す

「いた！」

シンが声をあげる

なのはがそれを聞いて後ろを振り返る

『Scythe form.』

そこにはすでに戦闘体勢のフェイトがバルディッシュを構えていた

「フェイト…もうやめよ。あんな女の言うこともう聞いちゃだめだよ！フェイト…このまんまじゃ不幸になるばかりじゃないか…だからフェイト！」

アルフは懇願する…しかしフェイトは首を横にふる

「だけど…それでもわたしはあの人の娘だから…」

なのははそれを聞くと覚悟を決めたようにバリアジャケットとレイジングハートを準備する

「ただ捨てればいいってわけじゃないよね…逃げればいいってわけじゃもつとない…きっかけはきつとジュエルシード…だから賭けよう！お互いが持つてる全部のジュエルシードを！！」

『 P u t o u t 』

なのはの周囲にジュエルシードが現れる

『 P u t o u t 』

フェイトの周囲にもジュエルシードが現れる

「それからだよ…ぜんぶ…それから」

なのははレイジングハートをフェイトにむける

「わたしたちのすべてはまだ始まってもない…だから、本当の自分を始めるために…始めよう…最初で最後の本気の勝負！！」

「それぞれの胸の誓いの」(後書き)

次回「思い出は時の彼方なの」

「思い出は時の彼方なの」（前書き）

久しぶりの学校そしてアリサとすずかとの再会

そんなのはたちの前に傷だらけのアルフが現れた

アルフから全ての話を聞くなのはたち

翌朝

なのはたちは再びフェイトと対峙する

魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜始まります

「思い出は時の彼方なの」

(母さん…わたしの母さん…いつもやさしかった…わたしの母さん…わたしの名前をやさしく呼んでくれた母さん)

「ねえ！とてもきれいなアリシア？」

プレシアは花飾りを手に持ち言う

(アリシア？違うよ母さん…わたしはフェイトだよ…)

「さあいらっしゃいアリシア」

プレシアは頭に花飾りをのせる

「ほらかわいいわ、アリシア…」

(まあ…いいのかな…)

フェイトは閉じていた目を開ける

目の前にはレイジングハートを構えたなのは

(わたしはやさしい母さんが大好きだから…)

フェイトは飛び上がる

「シンくん！絶対に手を出しちゃダメだよ…！」

「わかってる…行って来いなのは！」

「うん！」

アースラ

「戦闘開始みたいだね…」

「ああ」

「しかしちょっとめずらしいよね…クロノくんがこっぴつギャンブルを許可するなんて」

「まあ、なのはが勝つにこしたことはないけど…あの二人の勝負自体はどちらに転んでもあまり関係ないからね」

「なのはちゃんが戦闘で時間を稼いでくれているうちにあの子の帰還先追跡の準備をしておくってね」

「頼りにしてるんだからね。逃がさないですよ？」

「おう！まかせとけ！」

「でも…あのことなのはちゃんたちに伝えなくていいの？プレシア・テストロッサの家族と…あの事故のこと」

「勝ってくれるにこしたことはないんだ。いまなのはを迷わせたくない」

海鳴臨海公園

なのはとフェイトの戦闘は続いていた

『Photon Lancer』

フェイトの周囲に金色の電気を帯びた魔力弾が現れる

「!?!」

なのははそれを確認するとレイジングハートを上へとむける

『Divine Shooter』

なのはの周囲にピンク色の魔力弾が現れる

一瞬お互いを見合っ…

先に動いたのはフェイトだった

「ファイヤ!」

「シユート!」

お互いの魔力弾がそれぞれ相手を襲っ…

なのははフェイトに向かって飛びながら一つ一つ回避していく

フェイトはさらに上空へと上がるが魔力弾が追いかけてくるので障

壁を張って防いだ

防いだときに発生した煙の中からはの方を見るとすでに次弾を準備していた

「シュート！」

四つの魔力弾がフェイトの方へ飛んでくる

『Scythe Form.』

フェイトは鎌で飛んでくる魔力弾の三つを破壊し一つは回避…そのままの勢いでなのはへと突っ込んでいった

「!!!!」

『Round Shield.』

なのはあわてて障壁を張る

フェイトの刃はなのは張った障壁によって防がれる

フェイトの攻撃を防ぐ中なのは目を閉じ先ほどフェイトにかわされた魔力弾を呼び戻す

フェイトは後ろから近づく魔力弾に気づくと振り向き障壁を張る

しかしその間にフェイトはなのはを見失ってしまった

キョロキョロ辺りを見渡すフェイト

『Flash Move』

なのはは上空からフェイトに向かって突撃していった

「せえええー!!」

フェイトは上を向くとなのはがレイジングハート振り上げてもうすぐそこまできているところだった

フェイトはとつさにバルディッシュでレイジングハートを受け止める

魔力と魔力の衝突で辺りは光に包まれお互いに姿が見えなくなった

『Scythe Slash』

が…フェイトはなのはに向かって斬りかかる

それを間一髪で回避したなのは…だが胸のリボンが一部斬られてしまっ

なのははとつさに上空へと逃げようとするがそこには先のことを予測しているようにフェイトの魔力弾があった

『Fire』

魔力弾が飛んでくる…

なのははそれを障壁で弾いて海へと落とした

「ハア…ハア…ハア…」

「ハア…ハア…ハア…」

なのはとフェイトの二人は共に息切れをしていた

（初めて会ったときはただ魔力が強いただけの素人だったのに…もう違う…早くて…強い！迷ってたら…やられる！）

フェイトは足元に巨大な魔方陣を展開する

「！…！！」

なのはは驚き少しフェイトから離れる

なのはの周囲には金色の魔方陣が出現しては消え出現しては消えていた

『Phalanx Shift.』

フェイトの周囲に多数の魔力弾が形成されていた

「あ…！！」

なのははそれを確認した後レイジングハートをフェイトの方へむける…がさっきまで現れては消え現れては消えていた魔法陣からバインドが発生しなのはの腕を捕らえる

「ライトニングバインド！」

「まずい！フェイトは本気だ！」

様子を見ていたアルフが危険を感じて言う

「なのは！いまサポートを！」

ユーノがサポートをしようとする

「ダメだ！！」

なのはがダメと叫ぼうとした寸前にそれを止めたのはシンだった

「なのはに言われたらどう？これはなのはとフェイトの一騎打ちの戦いなんだ…ぼくたちが手を出していいものじゃない！そうだろう？
なのは」

「うん」

「でも…フェイトのそれはほんとにまずいんだよ！」

「大丈夫！なのはを信じろ！」

なのははシンの言葉を聞きとてもうれしそうな顔をした

（シンくん…ありがとう）

キッとフェイトの方を見るなのは

フェイトはその頃目を閉じ呪文を唱えていた

「アルカス、クルタス、エイギアス…疾風なりし天人、いま導きのもと撃ちかかれ、バルエル、ザルエル、ブラウゼル…」

呪文が終わりフェイトは目を開ける

「フォトンランサー…ファランクスシフト！」

片手を空に向けてあげる

「撃ち碎け！ファイア！！」

手を下ろすとフェイトの周囲に展開していた魔力弾が一斉飛びなのはへと向かっていった

容赦なくフォトンランサーをなのはにぶつけるフェイト…

「くっ…」

あの子に悪いことしたなと思いこの容赦ない攻撃の結果が怖く顔を背ける

「なのは！！！」

「フェイト！！！」

ユーノとアルフが共に叫ぶ

（大丈夫だよな？なのは）

シンは心の中でなのはの無事を祈っていた

「ハア…ハア…ハア…」

さすがにあれほどの魔力の放出で疲れが見えるフェイト

手を上げそこに残っている魔力弾を合体させ大きな魔力弾をつくる

爆煙がはれるとそこには障壁を張り無傷とまでさすがにいかないが
元気なのはが立っていた

「痛く撃ち終わるとバインドつても解けちゃうんだね」

（無事だったか…）

無事な姿を見て安心するシン

「今度はこっちの…」

レイジングハートをフェイトにむける

『Divine…』

杖先に魔力が集中する

「番だよ！」

『Buster!』

レイジングハートから巨大な魔力が飛び出す

「うわああ」

フェイトは先ほどつくった魔力弾をなのはにむかって投げる
しかしそれはあっさりとディバインバスターに当たって消滅した
それに驚いたフェイトは障壁を展開し砲撃を受け止めた

（直撃！でも…耐え切る！あの子だって耐えたんだから！）

すさまじい威力のディバインバスターに押されるフェイト

「くっ…」

必死に耐えるがグローブが破れ、マントの裾も破れた

「ううう…」

ようやくおさまった攻撃にフェイトは障壁を消し一息ついた

「ハア…ハア…ハア…」

先ほどの攻撃と防御でフェイトの体は限界に近かった

「フェイト…」

アルフが心配する

（いまのを耐え切ったか…でも…）

シンは次を準備しているなのを見る

「ハア…ハア…ハア…」

そこに更にフェイトの目にピンク色の魔力光が映った

光のほうを見てみるとなのはがレイジングハートのコアに魔力を集めていた

「受けてみてディバインバスターのバリエーション…」

なのはの前に巨大な魔方陣が展開される

『Starlight Breaker』

周囲から魔方陣にむけて魔力が集まる

それを見たフェイトは動こうとする…

「!!!!!!」

が四肢をバインドで捕まれ動けない

「バインド!!!」

「これがわたしの全力全開!!!」

レイジングハートを振り下ろす

「スターライト…ブレイカー!!!」

魔法陣から今だかつてないほどの魔力の収束砲が飛び出しフェイトへと直撃した

海にも当たり水しぶきが舞う

「なっなんっーバカ魔力！」

「うわぁフェイトちゃん生きてるかな？」

モニターで戦闘の様子を見ていたクロノとエイミィが驚き、フェイトの心配をする

「ハア…ハア…ハア…」

撃ち終わったのはは大量の魔力の消費に疲れを見せる

「あ！」

フェイトの方を見ると気を失って海へと落ちていっていった

「フェイトちゃん！」

なのはは急いで海の中へと潜りフェイトを抱えて海上へと上がった
きた

「ん…」

フェイトが目を開ける

「あ！気がついた？フェイトちゃん？ごめんね…大丈夫？」

「うん…」

「わたしの勝ち…だよね？」

「そう…みたいだね…」

『Put out.』

バルディッシュからジュエルシードが放出される

「飛べる？」

なのはが聞くとフェイトは自分で飛んだ

「よし！なのははジュエルシードを確保してそれから彼女を…」

クロノが言う

「いや…きた！！」

空に突如雷雲が現れる

「まずい！！なのは！！フェイト！！クロイツ…セットアップ！！」

シンがバリアジャケットとデバイスを装備し全速力でなのはとフェイトの元へと飛ぶ

「間に合え…」

『Protection』

なのはとフェイトにシールドが張られる

しかしあっけなくシールドは破れ雷がフェイトを直撃する

「フェイトちゃん!!」

「うわああ!!」

フェイトは苦しそうな声を出す

また雷の攻撃を受けてバルディッシュにヒビが入り待機状態へと戻ってしまふ

そして放出していたフェイトのジュエルシールド九つがプレシアのいる【時の庭園】へと次元転送された

「ビンゴ！尻尾掴んだ！」

ジュエルシールドの転移によって次元座標を特定するエイミー

「よし！不用意な物質転送は命取りだ座標……」

「もう割り出して送ってるよ！」

「武装局員転送ポートから出動！任務はプレシア・テストロッサの身柄確保です!!」

リンデイが指示を出す

「は！！」

武装局員は時の庭園へと転移した

「ゴホ…ゴホ…やっぱり…次元魔法はもう体がもたないわ…それ
いまのでこの場所もつかまれた。フェイト…あの子じゃダメだわ。
そろそろ潮時かもね」

プレシアは手で口を押さえながら言う

「第二小队転送完了！」

「第一小队侵入開始」

アースラのブリッジに様々な報告が飛び交う

そんな中なのはたちがフェイトを連れて戻ってきていた

「お疲れ様！それからフェイトさん？初めまして」

リンデイがフェイトに挨拶する

しかしフェイトはうつむき待機状態のバルディッシュを握り締める
だけだった

「（母親が逮捕されるシーンを見せるのは忍びないわ…なのはさん、
シンくん、彼女をどこか別の部屋へ）」

「（あ、はい）」

「（わかりました）」

「フェイトちゃん、よかつたらわたしの部屋……」

なのははフェイトを誘うがフェイトはうつむいていた顔をあげモニターを見つめるだけだった

「総員玉座の間に侵入！目標を発見！」

武装局員のリーダーらしき人が報告する

「プレシア・テストロツサ！時空管理法違反及び管理局艦船への攻撃容疑であなたを逮捕します」

「武装を解除してこちらへ」

局員たちが玉座に座っているプレシアの周りを取り囲む

そんな中局員たちが玉座の間にあつた扉を見つけ扉を開く

「こ、これは……！」

そこには一つの生体ポットがありその中には……

「え！？」

「な！？」

フェイトと同じ顔の少女がいた

「うわぁ…!!」

プレシアがポットに近づいていた局員を吹き飛ばす

「わたしのアリシアに近寄らないで!!」

局員たちは杖先をプレシアに向ける

「撃て!!」

杖先から小さな砲撃がとび出す

がしかしプレシアに当たる前に障壁のようなもので防がれた

「うるさいわ…」

プレシアは片手をあげるとそこに魔力を集中させ始めた

「危ない!防いで!!」

危険を感じ取ったリンディはとっさに叫ぶ

しかしプレシアの雷が炸裂し武装局員たちはみな気を失った

「フフフフ」

「いけない!局員たちの送還を!!」

リンデイがエイミィに指示を出す

「りよ、了解です！」

局員たちの送還が始まる中フェイトはさきほどプレシアが呼んだ名前を呟いていた

「アリ…シア…？」

「座標固定0120 503！」

「座標固定！転送オペレーションスタンバイ！」

プレシアはポットへと近寄ると呟くように言う

「もうダメね時間がないわ…たった九個のロストログアではアルハザードにたどり着けるかわからないけど…でも…もういいわ終わりにする。この子を亡くしてからの暗鬱な時間も…この子の身代わりの人形を娘扱いするのも」

「！…！！」

なのはとシンが同時にフェイトのほうを見る

「聞いていて？あなたのことよフェイト。せつかくアリシアの記憶をあげたのにそっくりなのは見た目だけ役立たずでちっとも使えない…わたしのお人形」

「最初の事故のときにね…プレシアは実の娘、アリシア・テストロツサを亡くしているの…彼女が最後に行っていた研究は使い魔とは

異なる…使い魔を超える…人造生命の生成…そして死者蘇生の秘術…“フェイト”って名前は当時彼女の研究につけられた開発コードなの」

エイミーが説明する

「よく調べたわね。そうよその通り。だけどダメね…ちっともうまくいかなかった。作り物の命は所詮作り物…失ったものかわりにはならないわ」

プレシアはモニター越しのフェイトに言う

「アリシアはもっとやさしく笑ってくれたわ？アリシアはときどきわがままも言ったけどわたしの言うことをとてもよく聞いてくれた」

「やめて…」

なのはが悲しそうに言う

「アリシアはいつでもわたしにやさしかった…フェイト、やっぱりあなたはアリシアの偽者よ！せっかくあげたアリシアの記憶もあなたじゃダメだった」

「やめて…やめてよ！」

なのはが頼む

シンはプレシアの言葉に頭は怒りに震えていた

（作り物の命は所詮作り物？失ったものかわりにはならない？ふ

ざけるなよ！それはあんたがそんな目でしかフェイトを見てないからじゃないか！」

「アリシアを蘇らせるまでの間にわたしが慰みに使ったただのお人形…だからあなたはもう要らないわ。どこへなりと消えなさい！！」

「お願い！もうやめて！！」

「フハハハ、ハハハ」

フェイトの脳裏にはいままでの記憶が鮮明に流れる

たぶんアリシアの記憶であろうものからプレシアに鞭で叩かれている記憶まで

「いいことを教えてあげるわフェイト、あなたを作り出してからずっとねわたしはあなたが…大嫌いだったのよ！！」

「！！！！」

フェイトはあまりのショックにバルディッシュを落としビビの入っていた部分が割れた

そしてフェイトはそのまま気を失い倒れこむ

それをなのは、シン、ユーノが支える

「フェイトちゃん！」

「フェイト…」

「局員の回収終了しました」

「うん」

「た、大変、大変！ちよつと見てください！屋敷内に魔力反応…多数！！」

「なんだ？何が起こっている？」

時の庭園の通路などいたるところから機械兵器と思しきものが多数現れる

そして時の庭園は静かに振動を始めた

「庭園敷地内に魔力反応！いずれもAクラス！」

「総数60…80…まだ増えています！！」

「プレシア・テストロツサ！いったい何をするつもり？」

プレシアは生体ポットを固定していた木の根みたいなのを外すとポットを浮かばせ運び始める

「わたしたちの旅を邪魔されたくないのよ。わたしたちは旅立つの…」

プレシアの周囲にジュエルシードが現れる

「忘れられた都…アルハザードへ！」

「まさかー!!」

クロノはプレシアのやろうとしていることに気づき声をあげる

「この力で旅立って…取り戻すのよ…すべてをー!!」

ジュエルシールドが広がり光に包まれ発動した

「次元震です…中規模以上ー!!」

「振動防御！ディストーションシールドをー!!」

「ジュエルシールド九個発動！次元震さらに強くなります！」

「転送可能な距離を維持したまま影響の薄い空域に移動を！」

「りよ、了解です」

「このままだと次元断層がー!!」

アラームが鳴り響く中なのはは気絶したフェイトのことを思いそつと抱きしめた

「アル…ハザード…」

「バカなことを！」

クロノは扉へと駆け出す

「クロノくん？」

エイミィが呼び止める

「ぼくが止めてくる！ゲート開いて！」

クロノはそれだけエイミィに告げると転送ポートへと走り始めた

（忘れられた都：アルハザード：もはや失われた禁断の秘術が眠る土地…そこでなにをしようっていうんだ？自分がなくした過去を取り戻せるんでも思ってるのか？）

クロノの手にカードが現れる

そしてそれを杖へと変化させ手に握る

「どんな魔法を使ったって過去を取り戻すことなんか…できるもんか！！」

それはクロノの魂の叫びのようにも聞こえた。まるで自身のことを言っているような…

「アーハハハ、ハハハハ」

プレシアの笑い声が響き渡る

リンディとシンはそんなプレシアをにらみつけ

なのはは気絶したフェイトを一度見、そして覚悟したようにプレシアへと向き直った

「わたしとアリシアは…アルハザードですべての過去を取り戻す！
アーハハハハ！」

「思い出は時の彼方なの」（後書き）

やっとここまでできました

あと二話で無印が終了してA5に入ります

あ！でも番外編みたいなのを入れるつもりだからまだ少しだけ時間がかかるかな？

それでは

次回「宿命が閉じるときなの」

「宿命が閉じるときなの」（前書き）

なのはとフェイト

互いの想いをぶつけ合う二人

そしてプレシアの目的

フェイトの謎が明らかに

クロノは一人プレシアの野望を止めるため走り出す

魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜始まります

「宿命が閉じるときなの」

アースラブブリッジ

「次元震発生！震度徐々に増加しています！！」

「この速度で震度が増加していくと次元断層の発生予測値まであと三十分足らずです！！」

アースラのブリッジでは絶望的な報告がされていた

「あの庭園の駆動炉もジュエルシードと同系のロストロギアです！それを暴走覚悟で発動させて足りない出力を補っているんです！」

「はじめから…片道の予定なのね…」

その頃なのはたちは気絶したフェイトを部屋へと連れて行くために通路を全力で走っていた

そこで転送ポートに向かおうとしていたクロノと出会う

「クロノくん！どこへ？」

「行く…のか？」

なのはとシンが聞く

「ああ、現地へ向かう！元凶を叩かないと…」

「わたしも行く!」

「ぼくも!」

「もちろんぼくも行くよ」

なのは、ユーノ、シンが共に行くことを伝える

クロノは数秒考え込むと口を開く

「わかった」

「アルフはフェイトについててあげて」

「う、うん…」

「行こう!」

「うん」

「ああ」

クロノ、なのは、シン、ユーノは走り始めた

「クロノ、なのはさん、シンくん、ユーノくん、わたしも現地に出ます。あなたたちはプレシア・テストロッサの逮捕を!」

リンディが命を下す

「了解!」

アルフは気絶したフェイトを医務室に運ぶとフェイトの顔を心配そうに眺めてた

転移したなのは、シン、クロノ、ユーノの前には多数の機械兵器が道をふさいでいた

「いっぱいいるね…」

「まだ入り口だ。中にはもっというよ」

「クロノくん。この子たちって…」

「近くの相手を攻撃するただの機械だよ」

「そっか…なら安心だ」

なのははレイジングハートを構える

「そうだな…人が相手じゃないんなら全力が出せる」

シンはクロイツを構えソードフォームに変形させる

・・・がクロノはそんな二人を制止させる

「この程度の相手に無駄弾は必要ないよ」

「え?」

「はあ!!」

クロノは杖を振り上げる

『Stinger Sniper』.

クロノの魔法が襲い掛かってくる機械兵器を次々と破壊する

「速い!!」

「スナイプショット!!」

魔法を巧みに操り残りの機械兵器も破壊していく

「クロノ…すごいな…」

シンの口から思わず感嘆の声がもれる

「はああ!!」

クロノは一つ残った少し大型な機械兵器に接近し杖を突き刺す

『Break Impulse』.

魔力による閃光が光り機械は爆発する

「ボオーとしてないで行くよ!!」

「うん」「うん」「うん」

「ああ」

クロノ活躍で道が開き四人は扉からさらに奥へと進んでいく
欠け落ちた地面の間に黒い何かが渦巻いている

「その穴…黒い空間のあるところは気をつけて!!」

「へ?」

「虚数空間…あらゆる魔法が一切発動しなくなる空間なんだ」

「聞いたことがある…飛行魔法も使えなくなるから落ちると二度と
上がってこれないって…」

「き、気をつける…」

更に奥の扉にたどり着くとその扉をクロノが蹴破り中に入る

が、そこには先ほどとは比べ物にならないほどの数の機械兵器がいた

「ここから二手に別れる…きみたちは最上階にある駆動炉の封印を
」!

「クロノくんは?」

「プレシアの元へ行く。それがぼくの仕事だからね」

「ならばくが道を開くよ。クロノは少し力を温存しといたほうがいい
」!

クロイツを構えてシンは言う

「いや…そういうわけには…」

「なら、一緒にやろう！二人でやったほうが数も減って楽になるだろ？」

「まあ…それなら…」

クロノはしぶしぶ了解する

「それじゃあ…いくよ！！」

なのはは二人のやりとりを聞きながらユーノを掴む

シンとクロノは共に杖先を機械兵器にむける

『Ice Buster』

『Blaze Cannon』

シンの杖先からは冷気を帯びた収束砲が…

クロノの杖先からは魔力を球体にして撃ちだす砲撃が…

それぞれとびだした

いくつもの機械兵器を破壊していく砲撃

それを見計らってなのはユーノと奥の階段のほうへと飛んでいく
また、砲撃を撃ち終わったシンもそれに続く

「クロノくん！気をつけてね！」

なのはは一人残るクロノを心配する

クロノはそんなのはに振り向いて大丈夫という顔をした

そしてなのはとユーノ、シンは階段の奥へと消えていった

【アースラ】

「わたしも出ます！庭園内でディストーションシールドを展開して
次元震の進行を抑えます」

リンディはブリッジを出て行った

医務室ではアルフがモニターでなのはたちの様子を見ていた

そして気絶しているフェイトのほうへとむきなおる

「あの子たちが心配だから…あたしもちょっと手伝ってくるね？」

アルフはフェイトの頬に手を添える

「すぐ帰ってくるよ。それで全部終わったらゆっくりでいいからあ
たしの大好きなほんとのフェイトに戻ってね？これからは…フェイ

トの時間は全部…フェイトが自由に使っていていいんだから…」

アルフは医務室を出ようと歩き出す

数歩いったところで一度振り返ってフェイトを見、それからまた歩き始めた…

アルフが医務室を出たと同時にフェイトに意識がもどった

フェイトは横を向きモニターを眺める

(母さんは最後までわたしに微笑んではくれなかった…わたしが生きていたいと思ったのは…母さんに認めて欲しかったからだ…どんなに足りないと言われても…どんなにひどいことをされても…だ…だ…笑って欲しかった…あんなにはっきりと捨てられた今でもわたし…まだ母さんにすがり付いてる…)

モニターにはアルフがなのはたちと合流したところが映っていた

(アルフ…ずっとそばにいてくれたアルフ…言うことを聞かないわたしにきつとずいぶん悲しんで…何度もぶつかつた真つ白な服の女の子…初めてわたしと対等にまっすぐ向き合ってくれたあの子…何度も出会って戦って…何度もわたしの名前を呼んでくれた…何度も…何度も…)

モニターにシンの姿が映る

(そして白い服の子と一緒に何度が助けしてくれたあの黒い服の子…)

ジュエルシールドが暴走したときはシールドを張って護ってくれた…)

フェイトの目から自然と涙があふれる

フェイトはあわてて起き上がる

(生きていたと思ったのは母さんに認めてもらいたいからだっただけ…それ以外に生きる意味なんてないと思ってた。それができなきゃ生きていけないんだと思ってた。)

フェイトはかつてなのはが言った言葉を思い出す

そしてベットから降り床に立つ

(捨てればいいってわけじゃない…逃げればいいってわけじゃもつとない)

庭園内

「はあああ
」

なのはが魔方阵を展開して力をためアルフが機械兵器を獣形態の口で食い千切っていた

アースラ医務室

フェイトはひび割れた待機状態のバルディッシュを見る

(わたしの…わたしたちのすべてはまだ始まってもない…)

バルディッシュを発動させ杖にする

そのあまりにもひどいバルディッシュの状況といまの自分の心境からまた涙がでる

「そうなのかなバルディッシュ？わたし、まだ始まってもいなかったのかな？」

『Get Set.』

「!!!!」

フェイトはバルディッシュを抱きしめる

「そうだよね…バルディッシュもずっとわたしのそばにいてくれたんだもんね」

涙が一滴流れ落ちる

「おまえもこのまま終わるのなんて嫌だよね？」

『Yes, sir.』

バルディッシュのコアが光る

「うまくできるかわからないけど一緒にがんばろうっ？」

フェイトは自分の魔力をバルディッシュに注ぎ込みヒビを治す

『Recovery.』

「わたしたちのすべてはまだ始まってもない…」

フェイトはマントを取り出し羽織りバリアジャケットを着る

「だから…ほんとの自分を始めるために！」

足元に魔方陣を展開させる

「いままでの自分を終わらせよう！」

フェイトは光に包まれた

庭園内

上から飛んでくる機械をなのはが撃ち抜きアルフが食い干切るそしてシンが叩き斬っていた

「くっそ！！数が多い！」

アルフが言う

なのはは飛びながらダイバインシューターを発動し機械を破壊する

「だけならいいんだけど…」のー！

「だが…まだこの程度なら…」

そう言ってシンはホーリーランスを展開し機械を撃ち貫く

ユーノは何体かの機械をバインドで捕まえていた

「なんとかしないと！」

しかしバインドへの注意を逸らした隙に大きな機械にバインドを引き千切られる

そしてその機械はそのまま背中を向けているなのはに向かって斧を振り下ろし始める

「なのは！！」

ユーノが危険をなのはに知らせる

その声を聞いたなのはは振り向きシンはなのはのほうを向く

「！……！」

そのときはもうすでに斧は振り下ろされていた

「なのは！……！」

「くそ……間に合わない……なのは！……！」

なのはの瞳には斧が自分に振り下ろされるのが映りなのはは目を閉じる

『Thunder Rage.』

突如上から金色の雷が機械にむかって落ちた

「「！！！」」

なのはたちは上を見上げる

そこには杖を構えたフェイトがいた

『Get Set.』

「サンダー……」

杖先に魔方阵が展開される

「レイジ！！！」

魔方阵から先ほどよりも大きい雷が機械にむかって落ち機械は爆発する

「フェイト？」

アルフが呟く

フェイトはそのままなのはの近くに降りてきた

シンはなのはが無事だったのを見て安心してフェイトに感謝する。そしてなのは、フェイトのところに行った

なのはそんなフェイトをうれしそうに見つめフェイトはいままで
のこともありなのはを遠慮がちに見つめる

その刹那…

壁が破壊され背中に大きな砲を持った機械兵器が現れた

そして背中の砲をなのはたちにむける

「大型だ…バリアが強い…」

「うん、それにあの背中の…」

機械兵器の背中の砲にエネルギーが集まり始める

そのときシンがなのはたちのところに到着した

「だけど…みんなでなら…」

フェイトから一緒に攻撃しようと言われ驚くなのはだったがそれは
一瞬でおさまりうれしそうに頷いた

「うん！うん！うん！」

「そうだな…みんなで撃つか」

到着したばかりのシンが言う

「いくよ！バルディッシュ！」

『Get Set.』

バルディッシュはデバイスフォームに変形する

「こつちもだよ！レイジングハート！！」

レイジングハートが変形しシューティングモードに変わる

『Stand by・Ready』

「ぼくたちもいこうか…クロイツ？」

『Yes・My master.』

クロイツが変形しデバイスフォームになる

三人が攻撃体勢に入ったところには機械兵器のエネルギーはとんでもないほどの大きさになっていた

「サンダー…」

フェイトは手に作り出した小さな魔方陣を目の前に投げる

そしてその魔方陣が大きくなるとそこにバルディッシュをむける

「バスター！！」

フェイトの砲撃が放たれた

しかしその砲撃は機械兵器のバリアによって止められる

「デイバイン…」

「アイス…」

なのはとシンは共に杖先を機械兵器にむける

「バスター!!!」

二つの砲撃が放たれフェイトの砲撃が止められているバリアに着弾する

「せいの!!!」

なのは、フェイト、シンの声が重なりそれに呼応するかのごとく三つの砲撃も重なり威力が倍増した

そしてその砲撃はバリアを貫き更には時の庭園をも貫き大爆発を起す

時の庭園が振動しその振動はプレシアがいるところにまで届いた

「来たのね…でももう間に合わないわ…ねえ？アリシア？アリシア…」

「フェイトちゃん!」

「フェイト…」

「フェイト！フェイト！」

アルフが人型になって涙を流しながらフェイトに駆け寄り抱きつく
「アルフ…心配かけてごめんね。ちゃんと自分で終わらせて…それから始めるよ…本当のわたしを」

庭園の奥深くで…

「あともう少し…」

駆動炉へと続く道…そこにはたくさんの機械兵器がいた

そこに扉を破ってなのは、シン、フェイト、アルフが現れる

「あそこのエレベーターから駆動炉にむかえる！」

「うん、ありがとう！フェイトちゃんはお母さんのところだ？」

「うん！」

なのははレイジングハートをシンに手渡し持っていてもらう

「わたし…その…うまく言えないけど…」

フェイトの手を両手で包み込むように握る

「がんばって！」

フェイトは空いていたもう片方の手をなのは手に重ねる

「ありがとう」

ダッダッダッ

通路を駆ける音がする

「今、クロノが一人で向かってる！急がないと間に合わないかも！」

通路を駆けていた正体はユーノであった

「フェイト！」

「うん！」

「気をつけるよー！」

シンが心配する

「うん、ありがとう」

アースラ

「エイミィ！」

クロノが状況を聞く

「なのはちゃんとシンちゃんとユーノくん、駆動炉へ突入…フェイトちゃんとアルフは最下層へ…大丈夫…いけるよきつと」

「ああ」

その頃次元震の影響が地球にも届いておりかなり大きく揺れていた
すずかは窓から外を眺め、アリサは犬たちを抱えて心配そうに座っていた

シン

エレベーターが駆動炉へたどり着いた

エレベーターから降りたなのは、シン、ユーノの眼前には多数の機械兵器が…

そこでなのはがレイジングハートを構え前に出ようとする

それをユーノとシンが止める

「防御はぼくがやる！なのはは封印に集中して！」

「あの機械兵器の相手はぼくに任せて！」

「うん。いつも通りだよな？シンくんが前でユーノくんが後ろ…二人がいつも護ってくれるから…」

なのはは駆け出す

『Sealing Mode.』

レイジングハートが変形する

「だから戦えるんだよ！わたしの前と背中がいつも温かいから！」

「そっか…」

シンは呟き、ユーノは笑う

なのはは魔方阵を展開し魔力弾を作り出す

「いくよー！」

「うん！つといきたい所だけどなのは、ちょっと待って！今から敵の数を減らすから…」

シンの足元に魔方阵が展開される

「燃え盛れ！！フレイム…ボルテックス！！」

突如発生した炎の渦が機械兵器たちに襲い掛かり渦の中に飲み込む…

「すごい…シンくん」

「火の魔力変換…氷と合わせてシンは二つ持ってるんだ…すごいな…」

なのははとユーノは驚き感心する

「さあこれで半分は減ったよ！じゃあ今度こそ行こう！！」

「うん」

なのはが先ほど作り出した魔力弾にまた魔力をこめる

「デイベインシューターフルパワー！」

なのははレイジングハートを振り魔力弾を飛ばす

時の庭園最下層

プレシアは自分の近くに何かがいることに気がつき辺りを見渡し始める

「プレシア・テストアロッサ！終わりですよ！次元震はわたしが抑えています。」

リンディの背中に妖精を思わせる白い四枚の羽があり、足元には水色の魔方陣が展開されていた

「駆動炉もじき封印：あなたの元には執務官が向かっています…忘れられし都：アルハザード：そしてそこに眠る秘術は存在するどころかも曖昧なただの伝説です！」

「違うわ…アルハザードへの道は次元の狭間にある…時間と空間が砕かれたときその狭間に滑落していく輝き…道は確かにそこにある！」

「ずいぶんと分の悪い賭けだわ！」

駆動炉ではなのはたちが肩で息をしながらも機械兵器を全部倒し駆動炉へと歩き始めていた…

「あなたはそこに行つて一体何をするの？失つた時間と…犯した過ちを取り戻す？」

フェイトとアルフがプレシアのいるところ…最下層に向かつて走る

「そう…わたしは取り戻す…わたしとアリシアの…過去と未来を！
！取り戻すの…こんなはずじゃなかった…世界のすべてを！！」

最下層の壁が水色の魔力砲撃により撃ち抜かれ爆発を起こす

「！！！！」

プレシアが爆発が起きたほうを見る

そこには頭から血を流した少年…クロノがいた

「世界は…いつだってこんなはずじゃないことばかりだよ！ずっと昔から…いつだって…誰だって…そうなんだ！！」

「！！！！」

プレシアが上を向くとフェイトとアルフが上から降りてきていた

「こんなはずじゃない現実から逃げるか…？…それとも立ち向かう

かは個人の自由だ！だけど…自分の勝手な悲しみに…無関係な人間まで巻き込んでいい権利はどこに誰にもありはしない！！」

「ゴホ、ゴホ、ゴホ」

プレシアが血を吐く

「母さん！」

そんなプレシアにフェイトは駆け寄ろうとする…

「なにをしにきたの？」

プレシアからの言葉にフェイトは歩みを止める

「消えなさい…もうあなたに用はないわ」

「……あなたに言いたいことがあって来ました…わたしは…」

ここでフェイトは一度目を閉じる

「わたしは…アリシア・テストロツサじゃありません。あなたが作ったただの人形なのかもしれません…」

駆動炉ではなのはたちが封印処理を終えてロストロギアである駆動炉を手に入れていた

「だけど…わたしは…フェイト・テストロツサは…あなたに生み出してもらい…育ててもらったあなたの娘です！」

「フフフフ！アハハハ！アーハハハ！だから何？いまさらあなたを娘と思えと言うの？」

「あなたがそれを望むならば…それを望むならわたしは…世界中のだからもどんな出来事からもあなたを護る！わたしがあなたの娘だからじゃない！あなたが…わたしの母さんだから！」

フェイトはプレシアに向けて一歩踏み出し片手を差し出す

「フツ…くだらないわ…」

「え？」

フェイトは拒まれた悲しみで目が潤む

プレシアは杖を地面に叩きつけると巨大な魔方陣を展開する

そしてその魔方陣から青白い光が発生した

「まずい！」

クロノが危険を感じて叫ぶ

「あ！」

リンディの足元に亀裂が走り集中が途切れ魔方陣が消えた

「艦長！ダメです！庭園が崩れます！戻ってください！この規模の崩壊なら次元断層も起こりませんから！！クロノくんたちも脱出し

て！崩壊までもう時間がないの…」

エイミーからの通信が入る

「了解！」

クロノはフェイトの方を見る

「フェイト・テストロツサ！…フェイト！」

「わたしは向かう…アルハザードへ！そしてすべてを取り戻す！過去も…未来も…たった一つの幸福も！」

プレシアの足元にも亀裂が走りプレシアと生体ポットのアリシアが次元空間へと落ちていく…

「母さん！」

「フェイト！」

プレシアのもとへ行くこうとするフェイトをアルフが押さえつける

「一緒に行きましょう…アリシア今度はもう…離れないように…」

プレシアとアリシアは次元の狭間に消えていった…

それをじっと見つめるフェイト…

そしてフェイトの頭上の岩が崩れ落ちる

「お願いみんな！脱出急いで！！」

エイミィの悲痛な叫びが響いた

そしてさらに時の庭園が崩れだしました、大爆発も起きた…

「宿命が閉じるときなの」（後書き）

遅くなってすみません

かなり前から書き上がったんですが最終話を書いてから投稿しようと思って遅くなりました

でもいまだ最終話書き上げてません

多分今日か明日には書き上げます

最終話は多分番外編と一緒に投稿するので時間かかると思います

それと今日最終話を執筆中に気づいたんですがほんとは【魔法陣】なのに【魔方陣】になっていたのに気づきましたなので最終話の途中から正しくなっていると思います

という訳で次回！最終話「なまえをよんで」

「なまえをよんで」（前書き）

時の庭園へと乗り込んだのはたち

途中機械兵器と戦いながらも

なのはとシンとユーノは駆動炉へ

クロノはプレシアの元へ

途中から合流したフェイトもまたプレシアの元へ

そしてみんなで協力しどうにか次元断層の発生を食い止めた

魔法少女リリカルなのは〜銀色の魔道師〜始まります

「なまえをよんで」

「お願いみんな！脱出急いで！！」

エイミーが叫ぶ

時の庭園の最深部ではフェイトとアルフの上に岩が落ちてきていた

「フェイト！」

落ちてきた岩のせいでフェイトとアルフは離れフェイトは次元の狭間に落ちそうになる

「うう…」

「フェイト！フェイト！」

アルフがフェイトのところへ駆け寄ろうとしたときピンク色の砲撃が壁を突き破りそこからなのはとシンが飛び出してきた

「フェイトちゃん！」

「フェイト！」

「飛んで！こっちに！！」

なのはが手を差し出す

フェイトは一回プレシアの落ちていった次元の狭間を見、決意する

かのごとく目を閉じなのはの手を取る

とその瞬間時の庭園がさらに崩壊し爆発に包まれた

地球では次元震の影響や時の庭園の崩壊などにより大地震が起きていた

高町家

「んっ…くう…」

地震で揺れる中道場では美由紀が恭也にしがみついていた

「地震…止まったみたいだな…」

「え？ほんとだ」

気がつくといつの間にか止まっていた

アースラ

ブリッジ

「庭園崩壊終了。すべて虚数空間に吸収されました」

「次元震停止します。断層発生はありません」

「了解」

「第3船速で離脱。巡航航路に戻ります」

医務室では怪我をしたなのはとクロノが手当てを受けていた

クロノにはエイミーがなのはにはユーノがついていた

そしてシンは二人の治療と先ほど戦いで疲れ休んでいた…ユーノを少しうらやましそうに眺めながら…

「あれ？フェイトちゃんは？」

「アルフと一緒に護送室にいる。彼女はこの事件の重要参考人だからね…申し訳ないがしばらく隔離になる」

「そんな！…あたたた…」

なのはは足の痛みを顔をしかめる

「なのは！じつとして」

「今回の事件は一步間違えれば次元断層さえ引き起こしかねなかった重大な事件なんだ！时空管理局としては関係者の処遇には慎重にならざるをえない…それはわかるね？」

クロノが話してる間エイミーはクロノの頭に巻いていた包帯でリボンをつくり一人満足していた

「うん…」

「エイミー、やり直し」

エイミイの悪戯にあまり怒りもせずクロノはただやり直しを求めた

「ちえ」

シンはこのときなのはの心情を思い念話をとばす

「（なのは…心配するなよ…大丈夫だから…なのはが悲しそうにしてるとぼくも悲しいから…）」

「（シンくん…ごめんね…大丈夫だよな？）」

「（ああ、大丈夫さ…きつと！）」

フェイトとアルフは手錠をつけられ護送室で静かに座っていた

そして…いろんなことが終わりました…

わたしとユーノくんが出会ってそれからシンくんと出会ってから今日まで終わってみればなんだかあつという間の日々

次元震がおさまるまでの間…わたしたちは数日アースラの中で過ごして…

それから…

「今回の事件解決について大きな功績のあった者についてここに略式ではありますがその功績を称え表彰します。」

「うう」

なのはが緊張した面持ちで立っている

「（なのは、そんなに緊張するなって）」

隣にいるシンが念話で励ます

「（だ、だって〜）」

「高町なのはさん、田中シンくん、ユーノ・スクライヤくん、ありがとう」

なのはが代表として賞状を受け取る

会議室が拍手に包まれる

通路を歩いていく途中なのはが突然立ち止まる

それに気づいたクロノが振り返りシンとユーノは驚いていた

「クロノくん…フェイトちゃんはこれからどうなるの?」

「事情があったとはいえ彼女が次元干渉犯罪の一端を担っていたのはまぎれもない事実だ。重罪だからね…数百年の幽閉が普通なんだが…」

「そんな!?!」

なのはが思わず声を上げる

「なんだが！」

クロノが話は最後まで聞けと言わんばかりの口調で言う

「状況が特殊だし彼女が自らの意思で次元犯罪に加担していなかったこともはつきりしている。あとは偉い人たちにその事実をどう理解させるかなんだけど…その辺にはちよつと自信がある。心配しなくていいよ」

「クロノくん…」

「何も知らされずただ母親の願いを叶えるために一生懸命なだけだった子を罪に問うほど時空管理局は冷徹な集団じゃないから」

「クロノくんってもしかしてすごくやさしい？」

「な！？」

クロノの顔が真っ赤に染まる

それを見てなのはが笑う

「クロノ…照れすぎだ…」

シンがクロノを多少睨みながら呟く

「し、執務官として当然の発言だ！私情は別に入ってない！」

「別に照れなくていいのに…ねえシンくん？」

「ああ、それにしても照れすぎだな…顔が真っ赤だ」

「照れてない！」

なのはとユーノ、シンは笑う

「わ、笑うなよ〜！」

アースラの食堂

「次元震の余波はもうすぐおさまるわ。ここからなのはさんたちの世界なら明日には戻れると思う」

食事をしながらリンディが説明する

「よかった〜」

「これでやっと帰れるな」

「ただ…ミッドチルダ方面の航路は…まだ空間が安定しないの…しばらく時間がかかるみたい」

「そうなんですか…」

ユーノが少し落ち込みながら言う

「数ヶ月か…半年か、安全な航行ができるまでそれくらいはかかりそうね」

「そうですか…まあうちの部族は遺跡を探して流浪している人ばかりですから急いでかえる必要もないと言えませんが…でもその間ここにずっとお世話になるわけにもいかないし…」

「じゃあ一緒にくればいいじゃん？別に大丈夫だよ、なのは？」

「うん ユーノくん、その間家にいればいいよ！いままで通りに」

「なのは、シン、いいの？」

「うん」

「ああ、ユーノさえよければ…」

「じゃあ…えっと…その…お世話になります」

「うん」

「ふふふ」

リンディが微笑む

「つつたく…あんなに寝てるからだよ…」

「だって…ずっと徹夜だったんだよ…ふわあ…まだ眠い…」

クロノとエイミィが食堂に入ってくる

「あ！」

そこでクロノはリンディがなのはとシンとユーノと話しているのを見、驚く

「あの人が目指していたアルハザードって場所…ユーノくんは知ってるわよね？」

「はい…聞いたことがあります。旧暦以前前世紀に存在していた空間で、今はもう失われた秘術がいくつも眠る…」

「だけどとつくの昔に次元断層に落ちて滅んだって言われてる…」

クロノが会話に入ってきた

「どうも」

エイミイが食事を持ってくる

「あらゆる魔法がその究極の姿にたどり着き…その力を持つてすれば叶わぬ望みはないとさえ言われたアルハザードの秘術…時間をさかのぼり過去さえ書き換えることができる魔法…失われた命をもう一度蘇らせる魔法…彼女はそれを求めたのね？」

「はい…」

「でも魔法を学ぶものなら誰でも知ってる…過去をさかのぼることも、死者を蘇らせることも決してできないってだからその両方を望んだ彼女はおとぎ話に等しいような伝承にしか頼れなかった…頼ら

ざるをえなかった…」

「でも…あれだけの大魔道師が自分の命さえ賭けて探してたのだから彼女は本当に見つけたのかも知れないわ…アルハザードの道を…今となってはわからないけどね…」

「…」

「ごめんなさい食事中に長話になっちゃった」

リンディがスプーンをとりながら言う

「冷めないうちにいただきましょう」

「なのはとシンにはたぶんアースラでの最後の食事になるだろうし…」

「うん…」

「お別れが寂しいなら素直にそういえばいいのにな、クロノくんってば照屋さん！」

エイミイがクロノをからかう

「だっ…なにを…」

クロノが少し赤くなりながら言う

「なのはちゃん、シンくん」にはいつでも遊びに来ていいんだからね！」

「はい！ありがとうございます」

「わかりました」

「エイミー！アースラは遊び場じゃないんだぞ！」

「まあまあいいじゃない。どうせ巡航任務中は暇をもてあましてるんだし？」

「か、艦長まで？」

そして…わたしとシンちゃんとユーノくんが帰る朝…

「それじゃ…今回は本当にありがとう」

「協力に感謝する」

クロノが手を出したのはとシンとそれぞれ握手する

なのはの笑顔で少し顔を赤くするクロノ

「フェイトの処遇は決まり次第連絡する。大丈夫さ決して悪いようにはしない」

「うん、ありがとう」

「ユーノくんも帰りたくなったら連絡してね？ゲートを使わせてあげる」

リンディがフェレット状態のユーノに顔を近づけて言う

「はい、ありがとうございます」

「じゃあ…そろそろいいかな？」

それまで転送ポートの設定をしていたエイミーが声をかける

「はい」

なのは、シン、ユーノが同時に返事をする

「それじゃ…」

「うん、またね、クロノくん、エイミーさん、リンディさん！」

「さようなら」

転移魔法に包まれるのはたちを見ながらクロノ、リンディは手を振った

そしてなのは、シン、ユーノは海鳴へと転移した

「さあ、帰ろっか？なのは、ユーノ？」

「うん！」

なのはとシンは駆け出した

「「ただいま」」

なのはとシンは高町家に帰りつくと同時に声をだした…

そして…戻ってくるわたしの日常

いままで通りだけど…いろんなことがあっていままでと少し違う日常…

夢中だったときのことは過ぎ去ってしまえば…なんだか一瞬のことのようで

だけど心の中には確かに残ってる

出会ったこと…必死だったこと…いろんなこと…

夜…高町家

「はあくお家のベットも久しぶり〜！」

なのはが枕に顔をうずくめながら言う

「ユーノくんも今日はゆっくり休んでね？」

「うん」

「レイジングハートもほんとおつかれ」

それだけ言つとなのはは眠った

その頃シンは自分の部屋からなのはの部屋に向かっていた

(父さん…母さん…終わったよ…次元震が起きちゃったけど大丈夫だよ)

「なのは〜入るぞ!」

シンがなのはの部屋に入る

するとなのははもうすでに寝た後だった

「もうなのはは寝ちゃったか…」

(今回のジュエルシード集め…関わる事ができてほんによかった…)

シンはなのはにかけ布団をかぶせた

「お疲れさま!なのは…」

そしてシンはなのはを見つめる

(なのはに出会えてほんとうによかった…)

そしてシンは部屋の電気を消しなのはの部屋をあとにした

たった一つ…気がかりはあの子のこと…

綺麗な目をした…きっとやさしいあの子のこと…

数日後…

なのはの部屋に携帯のアラームが鳴り響く

なのはが携帯のアラームを止めるとすぐに着信音が鳴った

不思議に思い携帯を開くとそこには「時空管理局」と書かれてあった

あわてて通話ボタンを押し電話にでるのは

「はい！なのはです！」

「ん〜」

ユーノが籠の中でもぞもぞと動く

「え！本当？」

なのはが大きな声をだす

その声にユーノが起きる

「ああ。さつき正式に決まった。フェイトの身柄はこれから本局に移動…それから事情聴取と裁判が行われる」

クロノがフェイトの今後を伝える

「うん！」

「フェイトはたぶん…いや、ほぼ確実に無罪になるよ。大丈夫！」

「クロノくん、あれからずっと証拠集めとかしててくれたからね」

エイミイがからかう

「エイミイ！そういう余計なことはいわなくてもいい…」

「ありがとう！クロノくん！」

「聴取と裁判、その他もろもろは結構時間がかかるんだ…それで…その前に…」

「うん！うん、うん！すぐ行く！」

「どうしたの？なのは？」

ユーノがなのはが携帯を閉じた同時に聞いた

「フェイトちゃんが本局に移動になるんだって…しばらくの間…で、その前に少しだけ会えるんだって！」

なのはがうれしそうに言う

「そうなんだ」

「わたしとシンさんに会いたいって言うてくれてるんだって！」

「シンも？」

「うん！前にジュエルシードが暴走して爆発したとき護ってくれたことにお礼を言いたいんだって！」

「そっか」

なのははシンにこのことを伝え三人で待ち合わせ場所に向かった

待ち合わせ場所ではフェイトとアルフとクロノが待っていた

「フェイトちゃん〜」

「フェイト!!」

そこへなのはとシンが走ってきた

それを見たフェイトはうれしそうな顔をする

「あんまり時間はないんだが…しばらく話すといい…ぼくたちは向こうにいるから…」

クロノが気を使って退く

「ありがとう!」

「ありがとう」

なのはとフェイトはそれぞれお礼を言う

そしてクロノ、アルフ、ユーノはこの場から少し離れる

「じゃあぼくもあっちに行くよ」

シンも離れようとするがなのはに腕をがしつと掴まれる

「シンくんはここにいないとダメなの! フェイトちゃんはシンくんも呼んだんだよ?」

「でもな」

「ダメって言ったらダメ!」

「はい…」

そんなやりとりを見てフェイトは微笑む

それを見てなのはとシンも共に笑う

そのまま少しずつ時間が過ぎていく

「にやははは…なんかいっぱい話したいことあったのに…変だね…」

フェイトちゃんの顔見たら忘れちゃった」

「ぼくもフェイトのその顔を見たら安心して言うことが無くなっちゃったな…」

「わたしは…そうだね…わたしもうまく言葉にできない……だけどうれしかった…まっすぐ向き合ってくれて…」

「うん…友達になれたらいいなって思ったの」

なのはがとびつきりの笑顔で言う

「でも…今日はこれからもう出かけちゃうんだよね…?」

「そうだね…少し長い旅になる」

「また会えるよな?」

「また会えるよね?」

なのはとシンが同時に言う

それに静かに頷くフェイト

「少し寂しいけど…やっと…ほんとの自分を始められるから…来てもらったのは…返事とお礼をするため…」

「へ?」

「君が言ってくれた…友達になりたいって言葉」

「うん！うん！」

「わたしにできるなら…わたしでいいなら…って…だけわたし…
どうしていいかわからない…だから教えて欲しいんだ…どうしたら
友達になれるのか？」

「……」

なのはとシンは共にフェイトを見つめる

「なに言ってるんだ？フェイト…ぼくたちはもう友達だ！一緒に戦
つただろ？でも…もっとちゃんとした形で…自分が納得する形で友
達と言いたいんだったら…」

シンがなのはのほうを向きなのははそれに頷く

「簡単だよ…友達になるの…すごく簡単！なまえをよんで！」

「ああ、初めはそこから！」

「君とかあなたとかじゃなくて…ちゃんと相手の目を見てはっきり
相手の名前を呼ぶの」

「……」

「わたし…高町なのは！なのはだよ！」

「ぼくは田中シン」

「なのは…」

「うん！そっ！」

「シン…」

「ああ」

「なのは…シン…」

「うん！」

なのははフェイトの手を握る

「ありがとう…なのは、シン…」

「うん！」

なのはは堪らなくなって涙を流す

「君の手は暖かいね…なのは…」

なのははさらに涙を流す…

それをフェイトは手で拭う

「少しわかったことがある…友達が泣いてると同じように自分も悲しいんだ…」

「フェイトちゃん…」

なのはがフェイトに抱きつく

「フェイト……」

シンが泣きそうになるのをこらえながらつぶやく

「ありがとう……なのは……今は離れてしまっけど……きっとまた会える！そうしたらまた君の名前を呼んでもいい？」

「うん！うん！」

「会いたくなったらきつとまた名前を呼ぶ……だから……なのはもわたしを呼んで……なのはに困ったことがあったら今度はわたしが助けるから……」

そうなのはに言つと今度はシンに顔をむける

「シン……いろいろありがとう」

「いいさ！気にするな……まあでも早めに会いに来てやれよ？」

シンが目ではなのはを示しながらフェイトに言つ

その様子を少し遠くから眺めるアルフたち……

「あんとんとこの子はさ……なのはは……ほんとにいい子だね？……フェイトがあんなに笑ってるよ……」

アルフが泣きながら言う

クロノは座っていたベンチから立ち上がりフェイトたちのほうへ行く

「時間だ！そろそろいいか？」

「うん」

「フェイトちゃん！」

なのははフェイトの名を呼び髪を結んでいたリボンを外し差し出す

「思い出にできるもの…こんなしかないんだけど」

「じゃあわたしも…」

そしてフェイトもまた髪を結んでいた紐を外し差し出す

「ありがとう…なのは、シン！」

「うん…フェイトちゃん！」

「ああ」

「きつとまた」

「うん、きつとまた！」

「ああ、きつとまた」

そしてシンが見守る中なのはとフェイトはリボンと紐を交換した
それが終わったのを見たあとアルフがなのはの肩にユーノを置く

「ありがとう！アルフさんも元気だね？」

「アルフ…いつの間に…まあ元気だな」

「ああ、いろいろありがとね、なのは、シン、ユーノ」

「それじゃあ、ぼくも」

「クロノくんもまたね」

「クロノ、じゃあね」

「ああ」

フェイト、アルフ、クロノの足元に魔法陣が展開された

「バイバイ…またね…クロノくん…アルフさん…フェイトちゃん！」

なのはは呟く

魔法陣に包まれるフェイトはなのはとシンに向かって手を振った

それに気づいたなのはとシンはそれぞれ手を振りかえした

そしてフェイト、アルフ、クロノの三人は光に包まれ転移した

なのはは一人海を眺める

「なのは…帰ろう!」

シンがなのはを呼び手を差し出す

「うん!」

そしてなのははその手を笑顔でとり二人は帰路へとついで

「なまえをよんで」（後書き）

はい、更新遅くなつてすみませんでした…

ほんとに申し訳ないです…

とりあえずこのご一期は終了です

約2ヶ月間ありがとうございました

番外編「とあるアースラでの1日」(前書き)

一応前に言った番外編です

結構グダグダになった気がします…

それでは番外編どうぞ

番外編「とあるアースラでの1日」

「今日も空振りだったな…」

「そうだね…」

わたしたちがアースラに来てから7日…

見つけたジュエルシードは2つ

あとはほとんど空振りでした

「なのは！今日も修行するか？」

「うん」

「じゃあ訓練室に行こう」

なのはとシンはアースラの訓練室へと向かった

一時間後…

「ハア…ハア…」

なのはがレイジングハートを手に息を切らしていた

「なのは…最後に模擬戦をしようほくに一発でも入れたらなのはの勝ちだよ」

「うん！わかった」

「じゃあ…」

シンがクロイツを構える

「はじめ！！」

シンの声がアースラの訓練室に響き渡った

「ディバインシューター…」

なのはの周囲にピンク色の魔法弾がいくつかが展開される

「シュート！！」

ピンク色の魔法弾が宙に浮いているシンに向かって襲い掛かる

シンはそれを右に左にすべてかわす

がなのはのコントロールによってかわした魔法弾がUターンしシンの後ろから襲い掛かる

それをシンは障壁を展開して防ぐ

「強くなったな…なのは」

シンがなのはのほうを向いて言う

しかしなのははそのときすでに魔法陣を展開させていた

『Divinn…』

レイジングハートの杖先に魔力が集中される

『Buster.』

すさまじい収束砲撃が放たれシンに向かっていく

「こいつはまずいな…クロイツ！」

『Ice Buster.』

シンも魔法陣を展開し砲撃を放つ

ピンクと銀の砲撃がぶつかり合い爆発を起こす

煙の中なのははシンを探していた

ダイバインバスターをとっさに相殺されたのにショックをうけながら…

と煙の中に影が見えたのでそこに向かってレイジングハートを振り下ろすが空を切っただけだった

「はああ…！」

後ろから声がしたのでなのはが振り向くとソードフォームにしたクロイツを振り上げたシンがせまってきていた

「あー！」

『Flash Move』

高速移動でシンの攻撃を避けるのは

「いまのはよかったねなのは」

「にはは…ありがとう」

「でもまだまだぼくの攻撃は続くよー！」

『Holy Lance』

銀色の槍が形成されなのはに向かって一直線に飛ぶ

そして四方八方からなのはに襲い掛かる

『Protection』

なのはは周囲にバリアを張ってこれを防ぐ

「ん〜いままでの修行でわかったことだけどなのはは防御力が高いね」

シンが感想を言う

「シンくん！あんまり余裕にしていると怪我するよ？」

突如シンの後ろからひとつの魔法弾が襲い掛かった

「な!？」

シンはそれをなんとか障壁で防ぎきる

「なのは…いつの間に魔法弾をつくってたんだ？」

「さっきだよ？シンくんが突っ込んでくる少し前」

「そうか」

「まだまだいくよ」

『Divin Buster』

威力を抑えたディバインバスターが飛んでくる

それをかわすとまたもやディバインバスターが飛んできた

「威力を抑えてためる時間短くして連射できるようにしたのか…考えたな」

シンはかわしながら呟く

かわされたディバインバスターは訓練室の壁に当たる

アースラブリッジ

ドコン！

アースラ全体を大きく揺らすほどの衝撃が発生した

「な、なんだ？」

クロノが驚く

「なにがあつたの？」

リンディが聞く

「どつやら訓練室からの衝撃のようです」

エイミイが報告する

そしてエイミイが訓練室の様子をモニターに出す

そこにはなのはとシンが模擬戦をしておりディバインバスターとア
イスバスターがぶつかり爆発が起きた光景だった

「あの二人はまたやってるのか…」

クロノが呆れる

「ここのところ毎日よね？大丈夫かしら？」

リンデイが心配する

とそこでふたたび艦内が揺れる

「艦長！二人のことよりアースラの心配をしてください！！このまま二人の魔力が衝突しあったら訓練室どころかアースラが壊れちゃいますよ」

クロノが訴える

「そうねえ〜じゃあクロノ執務官？二人を止めてきてくれる？」

リンデイが笑顔で言う

「え!？」

「だってそうでしょ？あの中にあなた以外誰が行くの？」

「艦長の言うとおりだよクロノくん！クロノくんはアースラの切り札なんだから!!」

エイミイも説得する

「……………わかりましたよ……………」

クロノが了承しブリッジを出て行くこととする

「がんばってね」

リンディが笑顔で手を振って見送る

そしてクロノはブリッジから出て行った

「それにしても本当にすごい子達ね……」

リンディがモニターを見ながらそう呟いた

「そろそろ最後にしようか……」

「そうだね……」

なのははレイジングハートを構え目の前に巨大な魔法陣が展開される

そしてその魔法陣に巨大な魔力の塊ができていく

「……………」

シンはそれを見ながらクロイツを構え魔法陣を足元と目の前に展開

する

「全力全開！スターライト…」

「輝け！聖なる光シャイン…」

「ストップ！！」

そこへクロノが入ってきてきたのはとシンの間に入る

だが無情にも二人の最大の砲撃魔法は放たれた

「『ブレイカー！！』」

銀色とピンク色の砲撃はそのまま間に入ったクロノに直撃した

「え？」

「クロノ？」

撃ち終わった人は自分たちの砲撃の間に入り直撃を受けたクロノに
驚く

直撃を受けたクロノはそのまま気絶した

時は経ち…

医務室…

「ん…」

ベットで横になっていたクロノが目覚める

「あ！クロノくん起きた？」

「クロノ…すまなかった…」

「ぼくはどのくらい気絶していた？」

「え〜と五時間くらいかな？」

なのはがシンに聞く

「そつだなそのくらいだな」

「そつか…」

「その…クロノ…本当に悪かった…」

シンが謝る

「ああ…それより君たち！！アースラの訓練室であんなに思いつきで戦わないでくれ！！アースラが君たちの魔力の衝突で揺れて危なかったんだぞ！！」

「ああ…知ってるよ…さっきリンディさんにこってりしぼられたからな…な？なのは？」

「うん…」

五時間前…

アースラ訓練室

「シンくん…どうしよう…クロノくんに当たっちゃったよ…」

なのはがおろおろしながら言う

「落ち着け！なのは！まずは医務室に連れて行こう！」

シンはクロノを抱えなのはと共に医務室へと向かった

医務室につくとクロノをベットに寝かせリンディたちに報告をしに行った

リンディたちは当然モニターで見ていたので知っており早速リンディはシンたちを叱り始めた

「訓練をすることはいいことですがここでそんな大きい魔力をぶつけるとアースラに危険が及びます！なのでもう少し考えて模擬戦もやってください！！」

「はい…すみませんでした！」

「ところでクロノくんは医務室かな？」

エイミイが聞く

「あ！はい！気絶しています」

「ふ〜ん？じゃあ早速見に行ってからかわなきゃ」

エイミイはそう言うと医務室へと向かった

「それじゃあ二人にある罰を与えます！」

突然リンディが言い出す

「「「「」」」」

「リンディさん…罰って…」

なのはが聞く

「ちよつと危険なことをした罰よ」

「それでどんな罰ですか？」

「それは…」

数分後なのはたちは医務室にいた

「はあ〜罰がまさかこんなことだったとはな…もっといやなものか
と思つてたよ…」

「そうだね…まさか罰の内容が『医務室でクロノくんの面倒を見る
こと』だとは思わなかったね〜」

なのはとシンは笑いながらクロノが起きるまでの間面倒を見続けた

「とまあこんな感じかな？」

「あ！そうそうクロノくん…その…エイミーさんが心配してたよ？」

「あれは心配というか面白がってただけじゃないのか？」

「そんなことないよ！絶対心配してた」

「そういえばあのフェレットもどきはどうしたんだ？」

クロノが聞く

「フェレットもどき…？」

シンとなのはが誰のことなのかわからず一瞬考え込む

「…ああ！ユーノならいまはエイミーさんとジュエルシードをモニターで探してる…まあ要するにクロノが倒れててできなかった仕事をユーノがやってるわけだよ」

「うーん…クロノくん…ジュエルシード探しも最近はずっと空振りばかりか

りなんだけとどうしてかな？」

「もしかしたらいま搜索している範囲外にあるのかもしれない……だけれども少しこのままいくからがんばってくれ」

「うん！」

「ああ！任せてくれ」

この会話の数日後フェイト・テストロッサの行動によりすべてのジユエルシードが発見され物語が急激に進むのであった

番外編「とあるアースラでの1日」(後書き)

番外編って言ってもなのはとシンの戦いを書いて見たかっただけです

少し期待したすみません…

二期にはもう少しマシな番外編を考えようと思います

「間幕 久村 龍」（前書き）

リリカルなのはをいまままで投稿しないでいてすみませんでした

これからはこの投稿小説にA・S編やその続きを投稿していこうと思えます

なのでもしかしたらタイトルがいつか変わるかもしれない

それはご了承ください

それではどうぞ！

「間幕 久村 龍」

海鳴市のとある街道を一組の少年と少女が通る

少女は車椅子に座り、少年はその車椅子を押す

「そろそろはやての誕生日だよな？ 何か用意しないといけないな……」

少年は少女にそう呼びかける

はやてと呼ばれた少女は後ろを向き、車椅子を押している少年に笑顔を向ける

「ええよ。そんなに気にせんでも」

「でもな……」

「ほんまにええって龍くん」

龍と呼ばれた少年は困った顔をする

「せつかくの誕生日なんだから欲しいものくらい言ってくれよ」

「んゝそやな……ならこれからも一緒に居てや。それ以外なんも望まへんから」

「わかった。はやてがそれを望むのなら……つと家に着いたぞ！」

彼らの前に現れたのはそこそこの大きさの一軒家

表札には“八神”と書かれてある

「龍くん今日はどないするん？」

「そうだな……はやての家に泊らせてもらつよ。家に帰ってもどうせ誰もいないからさ！　いっそのことははやての家に住みたいくらいだよ！」

龍こと……久村龍は顔を怒りで歪めながら憤慨した

彼の両親は、俗に言うニートで、仕事をせず、生活費は、金持ちであつた祖父の遺産を使つていた

そんな両親に嫌気がさし、龍はほとんど家出同然で家を飛び出し、昔から知り合いであるはやてのところにいるのだった

「んゝほんなら、これから家に住むか？　わたしはそつちの方が嬉しいんやけど……」

「……いいのか？」

「ええよ！」

遠慮がちに尋ねてくる龍にはやては笑顔で肯定の意を示した

「わかった！ それじゃあこれからよろしくな！ はやて」

「よろしくな」

はやてと龍は笑顔で家の中へと入っていった

この数日後

物語は

少しずつ

進み始める

「間幕 久村 龍」(後書き)

新キャラです

一応シンと戦わせるつもりです

A・S編開始「はじまりは突然になの」(前書き)

A・S編開始します

A・S 編開始「はじまりは突然になの」

6月3日 PM9:05

海鳴市 中丘町

一人の少女が車椅子を動かして電話のあるところへ向かい留守電ボタンを押す

「留守電メッセージは一件です……ピッ」

「もしもし？海鳴大学病院の石田です。え〜と明日ははやてちゃんのお誕生日よね？明日の検査の後一緒に食事でもどうかな〜と思ってお電話しました。それとももしかして龍くんと一緒なのかな？とりあえず明日病院に来る前にもお返事くれたらうれしいな。よろしくね？」

「ピッメッセージは以上です」

「……」

少女：はやては留守電を聞き終わると車椅子を動かして一度、同居している少年の部屋へと向かう

そして部屋につくと中に入り、彼に問いかける

「龍くん。明日石田先生と一緒に食事でもどうかって誘ってきたんやけどどないしようか？」

はやての問に対し、黒髪の少年龍は笑顔で返事をする

「別にいいんじゃないのか？たまには石田先生と一緒にでも」

「そうやね。ほんならそうしようか。それじゃあおやすみな？」

「ああ。おやすみ」

はやては龍の言葉を聞くと自分の部屋へと向かった

はやてがいなくなった部屋で龍は一人呟いた

「毎日自分で料理作ってるんだからたまにははやても休んだ方がいい……だろ？アルバム」

『I think so.』

(そう思います)

龍の呟きに電子音が応えた

部屋に入ったはやてはベットに横になると買ってきた本を読み始める

「あ！もう12時……」

本を読むのに夢中になっていたはやてが時計を見ると12時一分前だった

そして時計の針が12時ぴったりを指したときははやての後ろから暗い…光が光り始めた

それに気づき後ろを向くはやて…発光源は一冊の本だった…

「うわっ!」

突如部屋が揺れはやてはベットにしがみつく

そして本が宙を浮きゆっくりと近づいてくる

『Releasing seal.』

(封印を解除します)

鎖で閉じられていた本がいきなり鎖を引きちぎり開いたかと思うと
そんな声が聞こえた

はやては恐怖し少しずつ後ろに下がっていく

『Activating.』

(起動)

「はやて!大丈夫か!!」

本が更なる光に包まれたのと龍が部屋に入り込んで来たのが同時だった

12月1日 AM6:35

海鳴市 桜台

「それじゃあ今朝の練習の仕上げ…シュートコントロールやってみるね?」

そう言ったのは栗色の髪をツインテールにした少女…高町なのは

「ああ」

それに答えたのは銀色の髪の少年…田中シン

『All right』

そしてなのはのデバイスであるレイジングハートがそれに答えた

「リリカルマジカル!」

なのはが目を瞑りそう言うと足元にピンク色の魔法陣が展開される

「福音たる輝きこの手に来たれ導きの元鳴り響け!」

なのはの手にピンク色の魔法弾が形成される

そしてなのはは手に持っていたジュースの空き缶を空中へと放り投げた

「デivainシューター…シュート!」

手に展開させた魔法弾を空き缶めがけて放つ

「コントロール…」

なのはは魔法弾をコントロールし次々と空き缶へぶつけていく

『XVIIII · XIX · XX · XXI』

「アクセル！」

魔法弾の速度を上げ難易度を上げる

『LV · LX · LXIV · LXVIIII · LXX · LX
IIII』

「んっ」

「・・・」

『XCVIIII · C』

「ふ」

一息つくなのは

「ラスト！」

最後に落ちてくる空き缶に魔法弾をぶつけゴミ箱に入れようとする
も惜しくも外してしまう

「はあ」

外したことに少し落ち込むのは

『Don't mind, my master』

(よい出来ですよ、マスター)

「ああ！レイジングハートの言うとおりだとほくも思っよ」

「ありがとうシンくん、レイジングハート」

なのは外した空き缶を拾いゴミ箱へと入れる

わたし高町なのは

わりと最近まではごくごく平凡な小学三年生だったんですが春先に起こったとある事件がきっかけで…

魔法使いになってしまいました

「今日の練習採点すると何点？」

「ん〜85点くらいかな？レイジングハートはどう思っ？」

わたしの質問に答えてくれたのは田中シンくん

シンくんとも春先の事件で知り合いました

ちなみにわたしと同じ魔法使いです

『About 80 points』

(約80点です)

「そっか」

わたしに魔法と…いくつもの出会いや勇気をくれたシンくん以外のみんなとは…今は少し離れ離れ…

でも…

きつとまたすぐ会えるから…

なのはの部屋にはフェイトが写っている写真とフェイトからのビデオレターがあつた

「なのは、シン、郵便がきてるぞ!」

なのはがテーブルにコップを並べていると恭也が茶色の袋を持って現れる

「ほんと?」

なのはがうれしそうな顔をして振り返る

「フェイトからか?」

「海外郵便…差出人…フェイト・テストロッサ」

恭也が読み上げる

「ありがとうお兄ちゃん!」

なのはが駆け寄り恭也から受け取る

「いつものあの子だね。またビデオメール？」

美由紀が聞く

「うん！きつとそう！」

それになのはは笑顔で答える

「その文通ももう半年以上になるよな？」

いままで新聞を読んでいた士郎が言う

「フエイトちゃん今度遊びに来てくれるのよね？家にきてくれたらお母さんもうんっと歓迎しちゃう」

「うん！」

「フエイトも喜ぶと思つよ」

「ユーノも本当の飼い主が見つかったちゃってめっきり寂しいしね…」

美由紀が少し落ち込む

「お前は特にかわいがってたからな」

「えっと…でもまた預かることになるかもだよ？」

「まあその飼い主次第だけだね」

「だといいな〜」

「ね〜」

美由紀と桃子が喜ぶ

フエイトちゃん、ユーノくん、クロノくん、リンディさん…エイミ
イさん…みんな元気かな…

同時刻

時空管理局艦船アースラ

ブリッジ

「管理局本局へのドッキング準備すべて完了です」

「うん。予定は順調…いいことね？」

「失礼します！艦長お茶のおかわりいかがですか？」

エイミイがお盆にお茶をのせやってきた

「ありがとう、エイミイ。いただきわ」

エイミーがお茶を淹れ始める

「本局にドッキングしてアースラもわたしたちもやっと一休みね」

「ですね」

エイミーがうれしそうにする

「子供たちは？」

リンデイが砂糖をお茶に入れながら聞く

「いまは三人で休憩中のはずですよ。クロノ執務官とフエイトちゃん…さつきまで戦闘訓練やりましたし…ユーノくんそれに付き合っていましたから…」

「裁判の最終日だったのにマイペースね」

リンデイが少し呆れお茶を飲み始める

「ん？」

そこで羊羹に目がいきひとつをエイミーに渡す

「はい」

エイミーがそれを受け取る

「まあ勝利確定の裁判ですから！フフ」

エイミーが笑顔でそう言った

アースラ食堂

そこで三人と一匹が話をしていた

「さてじゃあ最終確認だ！被告席のフェイトは裁判長の問いにその内容通りに答えること」

クロノが説明しだす

「うん」

それにフェイトが頷く

「今回はアルフも被告席に入ってもらおうから…」

「わかった」

「で、ぼくとそのフェレットもどきは証人席。質問の回答はそこにある通り」

「うん、わかった…」

ユーノは手元にあるデータをみた…しかし…

「ておい…！」

バン！と机をユーノが叩く

「なんだ？」

クロノがどうしたんだ？という顔で見る

「誰がフェレットもどきだ！誰が！」

ユーノが少し怒鳴る

「君だが…なにか？」

クロノがさも当然のことを言うように言う

「うわっ…」

それを聞いたユーノは一瞬でフェレット「自分という図式が頭に浮かびショックを受ける…だがしかし反論をする

「そりゃ動物形態でいることも多いけど…ぼくにはユーノ・スクライアっていう立派な名前が…」

「ユーノ…まあまあ」

「クロノ、あんまり意地悪言っちゃダメだよ…」

アルフとフェイトが苦笑いしながらもユーノをなだめクロノに少し注意する

「大丈夫。場を和ませる軽いジョークだ」

「んぬぬぬ」

ユーノが怒りの形相でクロノを睨むそしてそのユーノの肩をアルフが叩く

「事実上…判決無罪…数年間の保護観察という結果は確定とっていいだが…一応受け答えはしっかり頭に入れておくように！」

「はい」

「…はい…」

フェイトとアルフが同時に返事をし少し遅れてユーノがまだ怒りを含んだ声で返事をした

管理局本局を前にしたアースラのブリッジではリンディが誰かと通信していた

「おつかれさま、リンディ提督。予定は順調？」

「ええ、レティ。そっちは問題ない？」

「うん…ドッキング受け入れとアースラの整備の準備はね…」

「え？」

その言葉にリンディはどうしたのだろうかと思議に思う

リンディに近づこうとしていたクロノはレティとの通信が不穏な空気に包まれるのを感じ思わず足を止める

「こっちの方ではあんまりうれしくない事態が起こっているのよ…」

「うれしくない事態って？」

「ロストログアよ…一級搜索指定がかかっている超危険物…」

その言葉にクロノは反応する

「いくつかの世界で痕跡が発見されてるみたいで…搜索担当班はもう大騒ぎよ」

「そっ？」

「捜査員を派遣して今はその子達の報告待ちね…」

「そっか…」

リンディが考え込む

フェイトの部屋

フェイトは机にデータプログラムと待機状態のバルディッシュを置きなのは、シン、アリサ、すずかが写っている写真をつれしそうに眺める

そしてその近くにはなのはたちから送られたビデオレターがあった

12月2日 AM2:23

海鳴市 オフィス街

「ぐわああ!!」

爆音とともに悲鳴が響き渡った

悲鳴の発信源は管理局の魔道師…そして悲鳴を出させたのは紅い服をき本とハンマー型のデバイスを持った小さな女の子だった…

「雑魚いな…こんなんじゃないした足しにもならないだろうけど…」

その子はそう言うと一緒に近づき手に持った本を開く

すると本が光だし倒れた魔道師から小さな何かが浮かび上がってきた

「お前らの魔力闇の書の餌だ!!」

「ぐわああ!!」

さらなる悲鳴が海鳴市に木霊した

12月2日 PM4:24

風芽丘図書館

外の道路

そこに車が一台止まる

「じゃあまた明日ね」

車から降りたすずかが中にいるアリサ、なのは、シンに手を振る

「うん」

「ばいばい」

「じゃあな」

三者三様の返事をしそれぞれ手を振り返す

「ん〜」

図書館に入ったすずかは本を探しだす

「!!!!!!」

本棚の隙間から車椅子に座った女の子が必死に手を伸ばして本を取ろうとする光景が見えた

それを見たすずかは一瞬躊躇したがすぐに走ってその子のところへ行き目当てであるう本をとってあげる

「あっ……」

車椅子の少女は驚く

「これ…ですか？」

「はい…ありがとうございます」

取ってあげた本を少女に渡す

「そっか〜同い年なんだ？」

本を取ったあと席に移動して話を始めた

「うん。時々ここで見かけてたんよ、あ、同い年くらいの子やって」

「うっ、実はわたしも…」

二人は同時に微笑む

「えっと…わたし月村すずか」

「すずかちゃん…八神はやていいいます」

「はやてちゃん」

「ひらがなで“はやて”変な名前やる？」

「そんなことないよ…！きれいな名前だと思っ」

「ありがとう」

二人はまた微笑みあった

そしてすずかははやての車椅子を押し出口へと向かう

廊下を歩いているとその先に金髪？の髪の女性が立っただけではやてとすずかを見ると微笑みながら会釈をした

それを見てすずかも会釈を返す

「ありがとうすずかちゃん。ここでええよ」

「うん、それじゃ」

すずかは車椅子にかけていた鞆を持ち車椅子から少し離れる

「お話してくれておおきに。ありがとうな」

「うん、またねはやてちゃん」

そしてはやては金髪の？髪の女性に車椅子を押され外へと出て行った

「はやてちゃん、寒くないですか？」

「うん、平気。シャルも寒ない？」

「わたしは全然」

はやてとシャルが駐車場へと向かうとピンク色の髪をした女性が立っていた

「シグナム!!」

はやてがその女性の名前を呼ぶ

「はい」

シグナムと合流したはやてたちはまた歩き出す

「晩御飯…シグナムとシャマルは何食べたい？」

「ああ…そうですね…悩みます」

そうシグナムが答えると

「スーパーで材料を見ながら考えましょうか？」

とシャマルが言う

「そやね」

それにはやてが同意した

「そつえばヴィータは今日もどこかお出かけ？」

「あつ…えつと…そうですね…」

はやての問いに動揺し口ごもるシャマル

そんなシャマルにシグナムが助け舟をだす

「外で遊び歩いているようですがザフィーラが付いてますのであまり心配は要らないですよ」

「そか…」

「でも…少し距離が離れてもわたしたちはずっとあなたのそばにいますよ」

「はい。我らはいつでもあなたのそばに」

「ありがとう…」

12月2日 PM7:00

海鳴市 高町家

「それじゃあちょっと出かけてくるよ」

シンがなのはの部屋に来て言う

「どこに行くの？」

「ん？裏山」

「何をしに？」

「それは秘密」

笑顔で言うシン…

「もう教えてくれてもいいじゃん…」

と少し頬を膨らませるのは

「じゃ、そういうことで行ってくるよ」

「うん」

そしてシンは裏山へと向かって行った

12月2日 PM7:45

海鳴市 市街地

その上空では紅い服を着ハンマーと本を持っている少女と蒼い毛の狼？がいた

「どうだヴィータ？見つかりそうか？」

狼が口を開く

「いるような…いないような…こないだっから時々出てくる妙に巨大な二つの魔力反応…あいつらが捕まれば一気に40ページくらいいけそうな気がするんだよな」

それに対しヴィータが答える

「別れて探そう。闇の書は預ける」

「OK。ザフィーラあんたもしっかり探してよ?」

「心得ている」

そう言うと狼…ザフィーラはどこかへと行った

それを確認したヴィータは足元に紅色の魔法陣を展開する

その魔法陣はいままで見たことのない三角形に角のところが円になっている魔法陣だ

「封鎖領域…展開」

『Magical Prison』

ヴィータを中心に周囲に結界が張られていく

その頃高町家

『Caution・Emergency』

(警告、緊急事態です)

レイジングハートがなのはに危険を伝える

「へ?」

その瞬間高町家も結界に覆われた

「結界!?!」

なのはは驚く

高町家が結界で覆われた頃

ヴィータは目を閉じ魔力反応を探していた

そしてようやく見つけることができた

「魔力反応！大物見つけ！！」

ヴィータは魔法陣の展開をやめ結界を広げるのを止める

「行くよ！グラーファイゼン！」

『Roger』

(了解)

ヴィータは見つけた魔力反応…なのはの元へと向かった

その頃のなのははベットに座り外を見ていた

『It approaches at high speed』

(対象、高速で接近中)

「近づいてきてる！？こっちに？」

なのはは不安そうな顔をして空を見上げた

一方なのは方へ向かって飛んでいるヴィータ

『Approaching target.』

(対象、接近中)

グラーファイゼンが警戒を促す

それを聞いたヴィータはさらにスピードを上げた

なのは家を出てビルの屋上へと来ていた

そしてどこから来るのかとキョロキョロ辺りを見回していた

『It comes.』

(来ます)

レイジンググハートがそう言うのと同時に正面の空から何かが飛んできてるのがわかった

『Homing bullet.』

(誘導弾です)

それが近づいてくるにつれて魔力弾であることがわかったレイジンググハートとなのは

なのは手を前に出し障壁を展開し飛んでくる魔力弾を受け止める

そんななのは後ろからヴィータがグラーファイゼンを振りかぶり近づいてきていた

「!?!」

「デートリヒ・シュラーク!」

ヴィータの攻撃ももう片方の手で障壁を展開して防ぐのは

しかし相手の攻撃は思ったより強く

だんだんと押され

最後には吹き飛ばされビルから落ちていく…

「きゃああ!」

落下していくのはを確認したヴィータは追撃を仕掛ける

その頃シンはバリアジャケットすでに装備しこの結界を張った者を探していた

(くそ!どうなってるんだ?いきなり結界が張られて…それにこの感じは戦闘…か?だとしたらなのはが戦っているのか?急いでぼくも向かわないと!)

シンは戦闘が行われているであろう場所に向かった

…なのはは先ほどの攻撃で少し痛めた手首を触りながら叫んだ

「レイジングハートお願い!」

『Stand by・Ready・Set up.』

ピンク色の光に包まれたなのはバリアジャケットとデバイスを装備する

それを空中で見ていたヴィータはひとつの鉄球を手を持つ

『Swallow Flyer.』

そしてその鉄球にグラーファイゼンを打ちつけいまだ光に包まれているのはにぶつける

すると爆発をおこし周囲が煙に包まれる

そしてヴィータは煙の中へと突っ込んでいきグラーファイゼンを振る

しかし煙の中からは飛び出しそれを回避した

「いきなり襲い掛かられる覚えはないんだけど！どこの子？いったいなんでこんなことするの？」

なのはの問いかけを無視しヴィータは指の間に鉄球をだす

「教えてくれなきゃわかんないってば！！」

なのはは先ほど攻撃されたときに作り出しておいた魔力弾を操作しヴィータを後ろから攻撃する

「!?!」

それに気づいたヴィータは振り返りまずひとつを回避する

だがもうひとつは回避できずにグラーファイゼンで受け止めるも威力が強く押されるも魔法陣を展開させ魔力弾を破壊した

「このヤロー!」

ヴィータはなのはに向かって行きグラーファイゼンを振る

『Flash Move』

しかしなのはは高速移動でそれを避ける

『Shooting Mode』

そして変形したレイジングハートをヴィータへと向ける

「話を・・・」

レイジングハートの杖先に魔力が収束し始める

「!?!」

『Divine』

「聞いてっつてばー!」

『Buster』

収束された魔力砲撃がヴィータへと飛ぶ

それはヴィータの近くを通りヴィータはその勢いに吹き飛ばされる

そのときに帽子が傷つき下へと落ちて行く

「あー！」

それを目にしたヴィータは怒りで目の色が変わる

そしてなのはへと振り返り睨む

「あっ……」

なのははヴィータの先ほどとは違う目を見て少し怯える

ヴィータは魔法陣を展開させる

「グラーファイゼン、カートリッジロード……！」

『Explosion』

ガシャンという音と共に上下に動いた

『Missile Form』

グラーファイゼンが変形をしハンマーの片方には鋭く上がった三角
形がそして反対側にはブースターのようなものがついていた

「あ!?!……ええ!?!……」

「ラケーテン……」

グラーフアイゼンのブースターに火がつくそしてウィータは体を回転させ勢いをつけなのはへと向かって行く

「うおお!?!……」

なのはは初撃を回避するも二撃目は回避できず障壁を展開する

しかしあっさりとは障壁は破られレイジングハートで受け止めるも鋭利な三角形の部分でレイジングハートで受け止めている部分が削られていく

「!?!……」

「ハンマー!?!……」

なのははそのまま吹き飛ばされビルへと激突しビル内へと吹き飛ばされた

その頃のシンはなのはが戦闘しているところまで100メートルの地点を飛んでいた

もちろん誰かが飛ばされたのは見えたしそれがなのはであることも薄々気づいていた

「くそ！逃げ！逃げ！」

さらにスピードを上げようとするがそこに割り込んだものがいた

それは蒼い毛の狼…ザフィーラだった

「誰だ！？ぼくは急いでるんだ」

「我が名はザフィーラ主を護る守護獣だ！ここから先は行かせん！」

「守護獣？アルフみたいな使い魔ってことか…なんでこんなことするんだ！？」

「貴様に話すことは何もない」

「そうか…悪いがそこは通してもらおう！なのはが危ないんだ！！クロイツ！！」

『Sword Form』

クロイツが変形し魔力刃をだした剣となる

「はああ！紅蓮一閃！！」

ザフィーラに接近し炎を纏ったクロイツを横薙ぎに振るう

ザフィーラは驚いた顔をしながらも回避する

だがそこにシンが展開させたいくつものホーリーランスが襲い掛かる

それを回避または防御しているザフィーラを一瞥するとシンはなのはの元へと飛んで行った

それに気づいたザフィーラが追いかけてようとするもさらにホーリーランスが襲い掛かり追うことはできなかった

「げほ、げほ、げほ」

ビル内に吹き飛ばされたなのははビルに叩きつけられた痛みと煙により咳をしていた

「でえああ!」

そんななのはにヴィータが突っ込んでくるそしてグラーフアイゼンを横薙ぎに振るう

『Protection』

それをレイジングハートの自動防御で受け止めるのは

「ぶち抜け!」

『Roger』

(了解)

その言葉と同時にブースターにさらに火がつき威力が上がる

そしてプロテクションは破られバリアジャケットにかすりなのはは吹き飛ばされる

「ハアハアハア…」

ヴィータの目が元に戻り手に持つグラーフアイゼンから排熱の煙と空薬莖が二つ排出された

そしてヴィータはゆっくりとなのはへ近づいて行く

それに気づいたなのはは傷ついた体で傷ついたレイジングハートを向ける

かすむ目の中なのははヴィータがゆっくりとグラーフアイゼンを振り上げているのが見えた

(…こんなので終わり…？嫌だ…ユーノくん…クロノくん…シンくん…フェイトちゃん！)

なのはは目を瞑るが一向に振り下ろされないのを感じ目を開けてみる
するとそこには金髪で黒いマントを羽織った少女がグラーフアイゼンを受け止めていた

「ごめんなのは…遅くなった」

「ユーノくん…」

「仲間か？」

ヴィータはそう言うと後ろへと下がる

『Holy Lance』

後ろに下がったヴィータに銀色の槍形の魔力弾が襲う

「!!!!」

ヴィータはそれを横に回避する

その攻撃が誰のものかわかっているヴィータ以外の三人はホーリーランスが飛んできた方向：外を見る

そこにはシンが少し疲れた顔で宙に浮いていた

「なのは…すまない…全力で飛んできたんだけど間に合わなくて…途中に邪魔が入らなかつたらこんなことにはならなかったのに…」

シンは申し訳なさそうな顔をする

「シンくん…」

『Scythe Form』

フェイトはシンがいることを確認するとバルディッシュを変形させヴィータに向けると先ほどのヴィータの言葉に答える

「友達だ」つと…

A・S編開始「はじまりは突然になの」(後書き)

次回もよろしくお願いします

「戦いの嵐、再びなの」(前書き)

更新します

「戦いの嵐、再びなの」

水面に月が映る

そして大きな屋敷

「そっか〜そうだったんだ〜」

「うん、そうなの それでね…」

アリサとすずかが電話で話をしていた

「うん、うん」

すずかが話しアリサが相槌をうつ

アリサの前にある机の上にはフェイトの写真やなのは、すずか、アリサ、シンの写った写真があった

「でもフェイトに会えるのはちょっと楽しみよね」

「うん、そうだね…でも…わたしたちでもこんなに楽しみなんだから…フェイトちゃんと一緒に思い出がたくさんあるのはちゃんやシンくんはもっともっと楽しみなんだろうね〜」

「そうね〜フェイトがこっちに来るって聞いてなのはもシンもほんとうれしそっだったもんね」

「うん」

「フェイトのお迎えイベント…今のうちから考えておろすか」

「うわぁいいね」

「うん！パーッとやる？」

「誰のお家でやるのか」

「喫茶翠屋なんてどう？」

・・・

海鳴市

結界内部

互いに睨み合うフェイト、シンとヴィータ

ヴィータは静かにグラーフアイゼンを掲げた

「民間人への魔法攻撃…軽犯罪ではすまない罪だ…」

フェイトがヴィータに言う

「あんだ？てめーら管理局の魔道師か？」

ヴィータがフェイトとシンに聞く

「時空管理局囑託魔道師：フェイト・テストロッサ」

フェイトはそれに答える

「ぼくは別に管理局の魔道師じゃないけどさっき言った通りなのは友達だ！」

シンもまたそれに答える

「抵抗しなければ弁護の機会が君にはある。同意するなら武装を解除して」

「誰がするかよ!!」

ヴィータはフェイトの呼びかけを否定し外へと飛び出る

そこで外にいるシンと戦闘を開始した

「ユーノ！なのはをお願い！」

「うん」

フェイトはそれだけ告げると外へと飛び出した

それを静かに見ていたなのは

「ユーノくん…」

そして隣にいたユーノを見て名前を呟いた

「うん」

ユーノはそれに返事をする。回復魔法をかけ始めた

「フェイトの裁判が終わって…みんなでなのはとシンに連絡しようとしたんだ…したら通信はつながらないし…局の方で調べてみたら広域結界が張られてるし…だからあわててぼくたちが来たんだよ」

ユーノが自分とフェイトがいる経緯を話した

「そっか…ごめんね…ありがとう…」

「あれは誰？なんでなのはを？」

「わかんない…急に襲ってきたの…」

「でも大丈夫！フェイトもいるしシンもやっと来たしアルフもいるから」

「アルフさんも？」

一方

外では空中でウィータが魔法陣を展開しシンはフェイトが来るのを待っていた

そしてフェイトが来たのを確認するとフェイトと目を合わせ共に頷いた

「バルディツシュ！」

『Arc Saber』

金色の魔力刃がブーメランのように回転しながらヴィータのほうへ飛んで行く

それに対しヴィータは手に四つの鉄球を取り出し叫ぶ

「グラーファイゼン！」

『Swallow Flier』

グラーファイゼンで鉄球を叩きフェイトとシンの方へと飛ばす

「障壁」

『Tank Barrier』

そして障壁を展開しフェイトの攻撃を受け止める

フェイトは飛んでくる鉄球…誘導弾をかわしていく

しかし誘導弾なのでかわしても追いかけてくる

そこギリギリまで引き付けそれをかわし誘導弾同士をぶつけ破壊する

そしてシンは飛んでくる誘導弾を見てクロイツに魔力刃のところに炎を纏わせ構える

「紅蓮一閃！」

誘導弾を真つ二つにした

それを静かに見てるヴィータ

シンが使った技を見た時は一瞬驚愕の表情を浮かべたがそれもすぐに引込める

とそこへ下方から発せられる気配にヴィータがそちらを向くと女性
…アルフが拳を構えて突っ込んできていた

「バリア…ブレイク！」

ヴィータは咄嗟に障壁を展開してこれを防ぐ

だが障壁は徐々にヒビが入っていき破壊される

「コノオ!!!」

ヴィータがグラーフアイゼンでアルフを殴りつける

アルフは障壁を展開するもそのまま弾き飛ばされてしまう

「!!!!!!」

『Horse Speed』

アルフを弾き飛ばした後気配を感じヴィータは高速移動で回避する

「くそ！」

先ほどまでヴィータがいた場所を魔力刃が通過する

シンがヴィータに接近しクロイツで斬りかかったのだった

「はっ！」

アルフが魔法陣を展開しヴィータをバインドで捕らえようとする

しかしヴィータの速度がバインドの展開を上回り回避される

そこへフェイトとシンが斬りかかるもグラーフアイゼンで受け止められてしまう

（くっそ…ぶっ潰すだけなら簡単なんだけどそれじゃ意味ねえんだ！魔力を…持って帰らねえと！）

フェイトとシン…二人の攻撃を同時に防ぎながらもヴィータは考える

（カートリッジ残り二発…やれっか？）

「アルフさんも…来てくれたんだ…」

少し離れたビルの上でフェイト、シン、アルフとヴィータの戦いを見てなのはは呟く

「クロノたちもアースラの整備を一旦保留にして動いてくれるよ」

ユーノがなのはに教える

アースラブリッジ

ブリッジのモニターには何も映らずリンディは焦ったような不安そうな目でそれを見ていた

「アレックス、結界のキーまだできない？」

エイミーが結界を解除しようと結界の解析をしていた

「解析完了まであと少し……」

「術式が違う……ミッドチルダ式の結界じゃないな……」

クロノが解析途中の結界の情報をみて言う

「そうなんだよ……どこの魔法だろうこれ？」

エイミーが言う

海鳴市

空中では未だに3対1の戦闘が行われていた

フェイト、シンとヴィータが互いにぶつかり合う

「……」

(この感じは足止め用にクロイツに操作させていたホーリーランスが全て消されたな…しかしあまりもたなかったな…このままだとすぐに来てしまう…フェイトに伝えておくか…)

シンが思考の海に沈んでいる間にヴィータはアルフのバインドに捕まえられていた

「終わりだね！名前と出身世界、目的を教えてくださいよ！」

フェイトがバルディッシュを構えてヴィータにそう告げるとシンが思考の海から戻るのが同時だった

シンはさっき考えてたことを言おうとするが気配を感じて言おうとしていた言葉をしまいこみ別の言葉を叫ぶ

「フェイト！アルフ！気をつける！！！」

シンの言葉とピンク色の髪の女性がフェイトの前に現れたのがほぼ同時だった

その女性は手に持つ剣でフェイトの持つバルディッシュを斬りつけフェイトを弾き飛ばす

「うわぁ」

「シグナム…」

バインドで両手両足を縛られたヴィータは目の前に現れた女性の名前を呼ぶ

「うおおおー!!」

アルフの後ろからもザフィーラが襲い掛かり蹴りを食らわす

アルフはそのまま吹き飛ばされる

「フェイト！アルフ！くそおー!!」

シンが叫ぶ

「レヴァンティン、カートリッジロード」

シグナムが静かに剣を掲げ言う

『Explosion』

空薬莢が排出されたかと思うとレヴァンティンが炎に包まれ炎を纏う剣となった

「紫電一閃!!」

そのままシグナムはフェイトへと向かう

「させるか!!」

シンがフェイトとシグナムの間に入りクロイツで受け止めようとすも威力に押され吹き飛ばされビルに激突してしまう

その際にクロイツに多少のヒビが入る

「シン!?!」

フェイトは目の前で起こったことが理解できずに呆然としていた

あのシンが一撃であそこまで吹き飛ばされるのだった…

無情なことにそんなフェイトにもシグナムは襲い掛かった

フェイトは咄嗟にバルディッシュで受け止めるも一刀両断され二撃目も防御魔法を展開したがあっさりと下のビルに叩きつけられてしまった

「フェイト! シン!」

アルフが叫びフェイトとシンが激突したビルに近づこうとするもその間にザフィーラがわってはいる

「じんのぉ…」

一方この状況をビルの屋上から見ていたなのはとユーノ

「フェイトちゃん…アルフさん…シンくん…」

「まずい…助けなきゃ!」

ユーノは目を瞑り手で印をきる

「妙なる響き、光となれ」

「あっ！」

なのはの足元に翠色の魔法陣が展開される

「癒しの辺のその内に、鋼の守りを与えたまえ」

その言葉と共になのはの周囲を結界が覆った

「回復と防御の結界魔法…なのはは絶対ここから出ないでね？」

「うん」

ユーノはそう言うと三人の救援をするために飛び立った

戦闘空域

「どうしたヴィータ？油断でもしたか？」

シグナムがバインドに捕まっているヴィータをからかっていた

「うるせえよ！こっから逆転するところだったんだ！」

「そうか…それは邪魔したな。すまなかった」

そう告げるとシグナムは目を閉じ左手を掲げ紫色の球体を出す

するとヴィータにかけられていたバインドがひび割れ破壊された

「だがあんまり無茶はするな。お前が怪我でもしたら我らが主は心配する」

「わあーてるよ！もう」

ヴィータは頬を膨らませそっぽを向く

「それから落し物だ」

シグナムがヴィータの頭に先ほどなのはに飛ばされた帽子が被せられる

「あ…」

「破損は直しておいたぞ」

「ありがとうシグナム」

眼下ではアルフとザフィーラが高速で戦闘をしていた

「状況は4対3だが実際は3対3だ…1対1なら我らベルカの騎士に…」

「負けはねえ！！」

シグナムとヴィータが戦闘へと戻って行く

「あれ？」

その途中でヴィータはあることに気づく

「闇の書がない!!」

自分の腰にぶら下げていた闇の書が消えていた

一方ビルに激突したフェイトたちは

「だいじょうぶ?」

二人の下へ駆けつけたユーノが聞く

「うん、ありがとう…ユーノ」

「ぼくもだいじょうぶだけどデバイスがそうとうやられたな…だけ
ど…」

そうシンに言われてバルディッシュとクロイツを見るユーノ

バルディッシュとクロイツは共にヒビが入っていたがコアへの損傷
はなかった

「うん、でもだいじょうぶ本体は無事」

『『Recovery』』

バルディッシュとクロイツが修復された

「ユーノひとつ聞きたいことがある」

「なに？」

「この結界内からみんなを外に転送ということはできるか？」

シンが聞く

「うん…アルフと協力できればなんとか…」

「ぼくとフェイトが時間を稼ぐからその間に頼む」

「わかった」

「勝手に決めちゃったけどいけるな？フェイト、アルフ？」

「うん、わたしは大丈夫」

「（ちょっときついけど何とかするよ！）」

ザフィーラと戦いながらも了承するアルフ

「それじゃあ行くよ！」

「うん」

シンとフェイト、ユーノは同時に飛び上がりアルフが戦っている場
所を目指し飛んで行く

その途中で結界の中にいるのはがこちらを心配そうに見ているの

を見つけフェイトとシンは同時に微笑んだ

「フェイトちゃん…シンくん…」

八神家

キッチン

「　　　　　ん　よ　し　っ　と　　」

はやてが上手に料理をしていた

とそこへ携帯の着信音が鳴った

「もしもし?」

「あ、もしもし?はやてちゃん?シヤマルです」

「ん、どうしたん?」

「すみません…いつものオリブオイルが見つからなくて…ちょっと遠くのスーパーまで行って探してきますから…」

「別にええんよ?無理せんでも」

鍋の中の状態を確認し火を弱めながらはやてが言う

「出たついでにみんなを拾って帰りますから」

「そうか？」

「お料理…お手伝いできませんすみません」

「フフ 平気やて」

「なるべく急いで帰りますから」

「あ！急がんでええから。気いつけてな？」

「はい。それじゃ」

電話を切る

その後、はやては台所から居間にいる人物へと声をかける

「龍くん、なんやシャマル遅くなるらしいで」

「そうか……」

応えたのは黒髪の少年

(少し遠くから魔力を感じる……苦戦しているのか？加勢に行くべきか……)

「龍くん？」

はやてが考え込んでいる龍を心配そうに見つめる

「あっ…すまないはやて。考え事してた」

「そうか？」

「ああ。でもはやては気にすることはないよ。だからはやては料理を続けて。それからみんなが帰ってきた時にすぐに食べられるよう…な？」

龍の『好きだから』という言葉にはやては頬を赤く染める

「そつ、そやな。ほなもう少し待ってな？」

「ああ」

(そうだ…俺はここではやてを守らないといけないんだ…だから…
…頼んだぞ！シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ)

居間から空を見上げる彼の手には一本の剣をモチーフにした飾りが握られていた……

その頃、シャマルがいる場所はスーパーでもなくもつと別の場所

ビルの屋上

そして目の前には戦闘の光

服装は緑色の戦闘用の服

手には闇の書が抱えられていた

「そつ…なるべく急いで確実に済ませます。クラーレルヴィント導

いてね」

『Yes・Pendulum Form』

人差し指と薬指にはめられた二つの指輪が光を放ち二つの宝石が浮かび上がった

その宝石と指輪をつなげるシャマル

その頃

フェイトとシグナムはバルディッシュとレヴァンティンをぶつけ合っていた

「くう…」

『Photon Lancer』

フェイトは自分の周囲に四つのフォトンランサーを展開する

「レヴァンティン…わたしの甲冑を」

『Tank Spirit』

シグナムの体がシグナムの魔力光である紫色の魔力に包まれる

「撃ちぬけ!!!ファイヤ!」

フェイトの合図と共にフォトンランサーが発射されシグナムに襲い掛かる

しかしシグナムはそれを見ても顔色一つ変えずにただ目を瞑る

フェイトが放ったフォトンランサーはそんなシグナムに当たるが全てシグナムの甲冑によって弾かれる

「!?!」

それにフェイトは驚く

「魔道師にしては悪くないセンスだ…だが…ベルカの騎士に1対1を挑むにはまだ足りん!」

剣を構えながらそう告げたシグナムは高速で移動しフェイトの眼前へと迫り剣を叩きつける

フェイトはその剣をバリアを張って防ごうとするもあっけなく壊されなんとかバルディッシュのコアの部分で受け止める

フェイトを押し離し…

レヴァンティンから空薬莢が排出される

「レヴァンティン、叩つ斬る!」

『Roger』

炎を纏わした剣で斬りかかる

フェイトはそれをバルディッシュのコア部分で受け止るもそこにヒビが入っていく

そして力に負けフェイトは吹き飛ばされビルへと激突する

「フェイトちゃん!!」

それを見たのはが心配そうにフェイトの名を叫ぶ

「うう……」

ビルに激突したフェイトは痛みに顔を歪ませていた

シン対ヴィータ

「ハアア!!」

シンにヴィータがハンマーを振りかざして接近してくる

シンはそれを障壁を張って受け止める

攻撃を受け止められたヴィータは次に四つの鉄球を取り出し放つ

「くっ…撃ち落せ！ホーリーランス!!」

シンの周囲に銀色の槍が形成され放たれる

槍と鉄球は互いにぶつかり

消え去る

そんななかシンはヴィータに急速に接近する

「ハアア！」

シンはクロイツに炎を纏わせた状態で斬りかかった

ヴィータはそれを回避するもかすり服が破れてしまう

「ヤロー!!!」

服が破けたことによりヴィータは怒り出す

「アイゼン！カートリッジロード！」

『Explosion』

グラーフアイゼンから空葉莢が飛び出し…

先ほどののはの防御を破ったラケーテンフォームへと姿を変える

「ラケーテン…ハンマー！」

体を回転させシンに迫るヴィータ

シンはその攻撃をクロイツで受け止めようとするとするも威力が強く弾き飛ばされてしまう

一方

ユーノは左手に魔力でできた球体を持ちみんなを転送させる準備をしていた

「(転送の準備はできてるんだけど空間結界を破れない…アルフ！)
！」

ユーノはザフィーラと交戦中のアルフに頼む

「(こつちもやってんだけどこの結界…めちゃくちゃ硬いんだよ！)
」

アルフは念話でユーノに言う

フェイトを吹き飛ばしたシグナムはレヴァンティンの排熱をし弾丸のようなものをレヴァンティンに入れる

『Reload』

(あれだ…あの弾丸…あれで一時的に魔力を高めてるんだ)

フェイトは苦痛に顔を歪ませながらも分析をする

「終わりか？ ならばじっとしている！ 抵抗しなければ命までは
とらん」

「誰が！」

フェイトは立ち上がる

「フツ…いい気迫だ…わたしはベルカの騎士ヴォルケンリッターが
将…シグナムだ！ そしてこれは我が剣レヴァンティン。 お前の

名は？」

シグナムは自己紹介中に飛び上がったフェイトに聞く

「ミッドチルダの魔道師：時空管理局囑託：フェイト・テストロッサ！ この子はバルディッシュ」

「テストロッサ：それにバルディッシュか？」

そうシグナムが呟いた後

シグナムはシンとヴィータが戦っているほうを向く

「ではそっちで戦う魔道師：お前の名は？」

「シグナム？」

ヴィータがどうしたんだ？と言わんばかりの顔をする

「第97管理外世界【地球】出身：田中シン：こっちは相棒のクロイツだ」

シンは先ほどの攻撃の痛みに耐えながらも答える

「田中：それにクロイツか」

それだけ呟くとシグナムはフェイトの方に顔を戻す

そしてフェイトとシグナムはまたもやぶつかった

「うわっ！」

アルフはザフィーラにやられ地面へと叩きつけられる
そしてシンとヴィータは高速での戦闘を再開していた

その戦闘風景を防御結界の中から見ると

（助けなきゃ…わたしがみんなを助けなきゃ！）

痛む体鞭打って少しづつ前へと進むのは

『Master.』

「!!!!」

『Shooting Mode・Acceleration.』

レイジングハートから魔力で模られた翼が発生する

「!!!! レイジングハート……」

『Let's shoot it・Starlight Breaker.』

（撃ってください スターライトブレイカーを）

「そんな…無理だよそんな状態じゃ……」

『I can be shot.』

（撃てます）

「あんな負担のかかる魔法…レイジングハートが壊れちゃうよ!」

『I believe, Master.』

(わたしはあなたを信じています)

「・・・」

『Trust me, my master.』

(だから、わたしを信じてください)

「レイジングハートがわたしを信じてくれるなら…わたしも信じるよ」

なのははレイジングハートを空へと掲げると同時にユーノの防御結界が消える

そしてなのはの前にピンク色の巨大な魔法陣が展開される

「(フェイトちゃん、シンくん、ユーノくん、アルフさん…わたしが結界を壊すからタイミングを合わせて転送を!!!)」

「(なのは?)」

「(なのは…だいじょうぶなのか?)」

シンが聞く

フェイトは心配そうになのはの方を見る

「（だいじょうぶ！ スターライトブレイカーで撃ち抜くから！）」

「レイジングハート…カウントを…！」

『All right.』

魔法陣に魔力が集まって行く

『Count IX.』

レイジングハートのカウントが結界内に響き渡る

「…！！！」

シグナムは巨大な魔力に反応しそちらを向く

『VIII. VII. VI. V. IV.』

そこになのはのところへ行かせまいとフェイトが襲い掛かる

その攻撃をかわすシグナム

ヴィータもなのはの方を向くがその視線にシンとユーノが割り込む

そしてアルフはザフィーラに体当たりをする

『III. III. III. III.』

「レイジングハートだいじょうぶ？」

『No problem.』
(大丈夫です)

壊れかけた声から一転して返事をする

『Count IIII.』

なのはレイジングハートを振り上げる

『III.』

『I.』

「!!!」

その瞬間

全てが止まった

なのはもシグナムとフェイトもシンとヴィータもユーノ、アルフ、
ザフィーラも…

「なの…は？」

フェイトはシグナムの剣をバルディッシュで受け止めながらながら
なのはの方をみて呟く

「え?...うそ...だろ？」

シンもまたヴィータを牽制しながらなのはの方を見て驚きの声を

上げる

「あっ…あっ…あ…あ…あ…あ…あ…」

なのはもまた恐怖…そして驚きの声を上げていた…

なぜならなのは体を腕が一本貫いていたからだ

そしてその腕の持ち主シャルはなのはのいる場所からそう遠くない場所でクラーウルヴィントを使い自身のいる空間となのはいる空間を繋げて腕を貫かせたのである

「しまった…外しちゃった！」

シャルはそう言うと一旦手を抜きまたつつこむ

そして今度はお目当てのものが出たのだろっ…

手には光輝くものがあつた

「「なのはー！ー！」」

フェイトとシンが絶叫してなのはの下に駆けつけようとするもその目の前にシグナムとヴィータが乱入してそれを許さない

「リンカーコア…捕獲！」

そんな中着々と事態は進んでいく

シヤマルは闇の書へと手を置き言っ

「蒐集開始」

『Collecting』

(蒐集)

闇の書の何も書かれてないページに次々とページが書き足されていく

「あっ…あっ…」

するとなのはの体から出てきて光り輝くものが少しずつ小さくなっ
ていく

そんな中なのはは今にも倒れそうな足でレイジングハートを構える

『Count 0』

「ス…スターライト…」

心配そうにユーノとアルフはなのはを見る

「…ブレイカー！」

なのはは目の前にある魔力を収束させた球体にレイジングハートを
思いっきり振り下ろす

そしてそれは巨大な収束砲となり

結界を貫く

次元航行艦アースラ

「結界破れました！」

「映像…着ます」

いままで映らなかったモニターにどんどん今の状況が送られてくる

「なっ…何これ？ どういう状況？」

エイミイは思わず立ち上がって叫ぶ

「これは…こいつら…」

クロノはこれだけ呟いた

海鳴市

スターライトブレイカーを撃ち終ったなのははレイジングハートを
落とす

そしてなのはは疲労とかなりの魔力消費から倒れこむ

「なのは！」

シンはなのはが倒れこむ前になのはを支える

「ありがとう…シンくん…」

なのははそれだけシンに告げると意識を手放した

「（結界が抜かれた…離れるぞ!）」

「（心得た）」

「（シャマルごめん。助かった）」

「（うん、

一旦散っていつもの場所でまた集合!）」

シグナム、ザフィーラ、ヴィータ、シャマルそれだけ念話で会話を
する

そしてここから逃げるため転移を始める

次々に転移を始めるシグナム、ヴィータ、ザフィーラ、シャマル…

アースラではエイミイが必死にキーボードを操作し追跡していた

「あ…ああ…逃げる！ ロック急いで！ 転送の足跡を!！」

「や…やってます!！」

今まで映らなかつたモニターに一つの映像が映る

「あれは…!！」

それを見たクロノは顔色を変え思わず叫ぶ

アースラのブリッジではリンディが局員たちに指示を飛ばしていた
モニターにはなのはが倒れそれをシンが支えフェイトが心配そうに
見ている映像だった

「いけないわ！ 急いで向こうに医療班を飛ばして！」

「中継転送ポート…開きます！」

「それから本局内の医療施設の手配を！」

「了解です！」

そのころヴォルケンリッターの足跡をたどっていたエイミィたちは
・
・

「ダメです…ロック…外れました」

「ああ、もう…！」

エイミィは机を思いっきり叩く

「ごめん…クロノくん…しくじった…」

エイミィは悔しそうな顔をし下を向く

「クロノくん？」

だが一向に何も言っていないクロノに疑問を持ち顔を上げてクロノを見る

クロノはただずっとモニターを凝視していた

「第一級搜索指定遺失物：ロストログア…【闇の書】」

クロノは拳を握り締める

「クロノくん…知ってるの？」

「ああ…知ってる…少しばかり嫌な因縁があるんだ…」

「戦いの嵐、再びなの」(後書き)

次回もよろしくお願いします

「再会、そしてお引越しの」(前書き)

更新です

遅くなつてすみません

ではどうも

「再会、そしてお引越しの」

12月2日 PM 8:45

時空管理局本局

医務室

そこでなのは眠っていた

そしてそばにはシンが一人ついていた

「検査の結果怪我はたいしたことないそうです」

エイミイがエレベーター内でリンディに検査結果を伝える

「ただ：魔道師の魔力の源：【リンカーコア】が異様なほど小さくなっているんです」

「そう、じゃあやっぱり一連の事件と同じ流れね」

「はい、間違いないみたいです。休暇は延期ですかね？流れ的にうちの担当になっちゃいそうですし…」

「仕方ないわ：そういうお仕事だもの」

「あはっ」

「フフ」

その頃

医務室でなのはが目覚めた

「なのは…目覚めた？」

「シンくん…ここは？」

なのははベットから起き上がりキョロキョロする

「本局の医務室だよ」

「そっか…あの後…どうなったの？」

「なのはがスターライトブレイカーを撃ってくれたおかげで境界が壊れてあいつらは逃げて行ったよ」

「そっなんだ…」

「それで…えっと…ごめんなのは…！」

シンが俯きながら言う

「え？」

「ちゃんと護れなくて…なのはに怖い思いさせちゃった…」

シンは落ち込みながら言う

「シンくんのせいじゃないよ！わたしが…わたしに力がないから…」
なのはもまた俯く

「にはは…これじゃあどっちも謝ってばかりだね」

「ああ、そつだな…」

二人は共に笑い出す

「じゃあぼくは先生を呼んでくるよ」

「うん！」

シンは部屋を出て行った

その頃のフェイトとクロノ

「いや、きみの怪我也軽くてよかった」

「クロノ…ごめんね心配かけて…」

フェイトの左手には包帯が巻かれていた

「きみとなのはでもう慣れた。 気にするな」

少し呆れた顔で言う

「フフ」

その返答にフェイトは少し微笑んだ

医務室

医者がなのはのリンカーコアの状態を機械で調べシンはそれを隣で見っていた

「ん〜さすが若いね。もうリンカーコアの回復が始まっている。ただしばらくは魔法がほとんど使えないから気をつけるんだよ?」

医者が診断結果を伝える

「はい！ ありがとうございます!!」

なのはは元気よく返事をする

シンはそれを微笑みながら見ている

とそこにフェイトとクロノが入ってくる

「ああ、ハラオウン執務官：ちょっといいでしょうか?」

医者がクロノに聞く

「はい。 为什么呢?」

「こちらへ...」

「なにか？」

「実は…例の件で…」

クロノと医者とは部屋から出て行った

クロノと医者が出て行った部屋は静寂が訪れていた

なのはとフェイトどちらもきまらずそうにし言葉が出ない

シンはこの様子をじっと見つめていた

「フェイトちゃん…」

沈黙を破ったのはなのはがフェイトの名前を呼ぶ声だった

「なのは…」

「あの…ごめんね…せつかくの再会がこんなで…怪我大丈夫？」

「あ、ううん…こんなの全然…それよりなのはは…」

フェイトは思わず怪我をしている左手を隠す

「わたしも平気…フェイトちゃんたちのおかげだよ！ 元気元気！
フフフ…」

なのはは体をつかい自分が元気であるとアピールする

「・・・」

フェイトはそれになんの反応も見せずに暗い顔をして下を向いたままだった

「フェイトちゃん？ フェイトちゃん…あっ！！」

なのははフェイトのところに行こうとベットから降りるがふらついてしまう

「なのは！！！！」

フェイトとシンが同時に駆け寄り支える

「このバカ！ 全然大丈夫じゃないじゃないか」

シンが少し怒る

「にははは…ごめん…まだちょっとふらふらかも…」

なのはが苦笑いをしながら言う

「うん…」

「助けてくれてありがとうフェイトちゃん。それから…また会えてすごくうれしいよ」

「うん、わたしもなのはに会えてうれしい」

フェイトとなのはお互いに抱き合った

とある部屋

待機状態のレイジングハート、バルディツシュ、クロイツがケースに入れられていた

それをユーノがキーボードを操作し修復をかけていた

すると…

扉が開く音がした

ユーノとその場にいたアルフが扉のほうを向く

「なのは！！ フェイト！！ シン！！」

アルフがうれしそうに入ってきた者の名前を言う

部屋に入ってきたのはなのは、フェイト、シン、そしてクロノだ

「ユーノくん！ アルフさん！」

なのはが二人に近づく

「なのは久しぶり！」

「なのは」

ユーノとアルフはなのはが元気そうだったので安堵の表情をした
そんな中

シンは一人ケースのなかにあるデバイスを見つめていた

(クロイツ…すまない…こんなにボロボロにしてしまった…)

シンはそんなことを考えていた
すると

いままでなのはとアルフたちのやり取りを見ていたフェイトがケー
スのほうへと歩いて行く

「バルディツシュ…ごめんね…わたしの力不足で…」

フェイトは傷だらけのバルディツシュに呟く

「破損状況は？」

クロノがユーノに聞く

「正直…あんまりよくない…今は自動修復をかけてるけど基礎構造
の修復が済んだら…一度再起動して部品交換とかしないと…」

ユーノはあまりよい顔はせず答える

「そうか…」

なのはとシンはユーノの話を聞きケースへと近づく

「ねえ…そういえばさあ…あの連中の魔法ってなんか変じゃなかった？」

アルフが考え込みながら言う

「あれは多分ベルカ式だ」

アルフの疑問にたいしくロノが答える

「ベルカ式？」

聞きなれない単語にアルフは聞き返す

「その昔…ミッド式と魔法勢力を二分した魔法体系だよ」

「遠距離や広範囲攻撃をある程度度外しして対人戦闘に特化した魔法で優れた術者は“騎士”と呼ばれる」

「確かに…あの人ベルカの騎士って言うてた…」

「最大の特徴はデバイスに組み込まれた“カートリッジシステム”って呼ばれる武装…儀式で圧縮した魔力を込めた弾丸をデバイスに組み込んで瞬間的に…爆発的な魔力を得る…」

「危険で物騒な代物だな…」

「なるほどね…」

「いっぱい頑張ってくれてありがとね…レイジングハート。今は
ゆっくり休んでね」

なのはが辛そうな顔をして言う

「クロイツもよくやってくれた…」

シンがクロイツに言う

部屋に重い空気が漂う

「フェイト！ そろそろ面接の時間だ」

その空気を破ったのはクロノだった

「うん…」

「面接ってなんの面接だ？」

シンがクロノに聞く

「保護観察についての面接だ。それと囑託魔道師の面接でもある
な」

「ふん」

シンが納得したように頷く

「シンとなのは…きみたちもちょっといいか？」

「つまりぼくたちも面接について来いと？」

「そついつことだ」

「？」

クロノとシンのやり取りについていけず頭にクエスチョンマークを発生させているのは

シンは考え込んだあと言う

「いいよ」

そしてクロノとフェイトとなのはとシンは部屋から出て行った

休憩所

自動販売機で飲み物を買って飲むアルフとユーノ

「ユーノくん、アルフ」

「エイミィ」

そこにエイミィがやってきた

「レイジングハートとバルディッシュ、それとクロイツの部品…さつき発注してきたよ。今日明日中にはそろえてくれるって」

エイミーがウインクをしながら言う

「ありがとうございます！」

「でね…さつき正式に今回の件がうちの担当になったの…」

エイミーが少し声を沈ませながら言った

「え？ でもアースラは今は整備中じゃあ…」

「そうなんだよね…あ！ そういえばクロノくん知らない？」

「なのはとフェイトとシンと面接だった」

「なんか…管理局の偉い人らしいですけど…」

「へ〜」

とある一室

窓から外を眺める一人の人がいた

その人とは…

時空管理局顧問官

ギル・グレアム

そこに扉の開く音

「失礼します！」

クロノ、なのは、フェイト、シンの四人が入ってきた

「クロノ…久しぶりだな」

「ご無沙汰しています」

四人は机を囲みソファアに座る

「保護監察官といってもまあ形だけだよ。リンディ提督から先の事件やきみの人柄についても聞かされたしね。とてもやさしい子だと」

グレアムはやさしくフェイトに言う

「ありがとうございます」

フェイトは恥ずかしかったのか頬を少し赤く染め下を向いて言う

デバイスが置かれている部屋

エイミーがキーボードをたたきチェックをしていた

「グレアム提督はクロノくんの指導教官だった人なんだよ。歴戦の勇士…一番出世したときで艦隊指揮官…後に執務官長だったかな？」

エイミーがキーボードを叩きながらユーノとアルフに説明する

「めっちゃくちゃ偉い人じゃん?!」

アルフとユーノは驚きで口をあんどぐり開けた

「うん。でもいい人だよ。やさしいし」

グレアム提督の部屋

「ん？　なのはくとシンくんは日本人なのだな？」

「はい…けどぼくは見ての通りハーフですけど…」

「そういえばシンくんの親は管理局員だったと聞いたが？」

「そうです。少し前に亡くなりました」

シンが下を向きながら答える

「そうか…それは辛いことを聞いたね」

「いえ…もう半年も前のことですから…それに今はなのはの親がよくしてくれていますから」

「そうか…」

グレアムが呟く

「それにしても日本か…懐かしいな…日本の風景は」

グレアムが遠い目をしながら言う

「ふえ？」

なのはは日本を知っていることに驚き素っ頓狂な声をあげる

「わたしもきみたちと同じ世界の出身だ。イギリス人だ」

「えー?! そうなんですか?!」

「本当ですか？」

「あの世界の人間のほとんどは魔力を持たないが…稀にいるんだよ
きみたちやわたしのように高い魔力資質を持つものが…」

グレアムはなのはの資料を見る

「ハハハ、魔法との出会い方までわたしとそっくりだ」

グレアムは過去を思い起こす

「わたしの場合は、助けたのは管理局の局員だったんだがね。もう
五十年以上も前の話だよ」

グレアムはなのはたちの資料である携帯端末を机に置く

「フェイトくん、きみはなのはくん、シンくんの友達なんだね？」

「はい」

「約束して欲しいことはひとつだけだ。友達や自分を信頼してくれている人のことは決して裏切ってはいけない。それが出来るならわたしはきみの行動についてなにも制限しないことを約束するよ。できるかね？」

「・・・」

クロノが無言でフェイトを見る

「はい！ 必ず」

フェイトは頷き答えた

「うん、いい返事だ」

四人は立ち上がり部屋の出口へ向かう

なのはとフェイトとシンはお辞儀をして外に出る

クロノは部屋を出る前に立ち止まり振り返る

「提督。もうお聞き及びかもしれませんが：先ほど自分たちがロス
トロギア【闇の書】の搜索捜査担当に決定しました」

「そうか。きみがか？ 言えた義理ではないかもしれんが無理はするなよ」

「大丈夫です。急事にこそ冷静さが最大の友：提督の教え通りです」

「ん…そうだったな？」

「では…」

クロノも一礼をして部屋を出た

同日 同時刻

海鳴市内 八神家

テレビを見ているはやて、ヴィータ、ザフィーラそして龍

「はやてちゃん〜お風呂の支度できましたよ〜」

シャマルがはやてに声をかける

「うん ありがとう」

「ヴィータちゃんも一緒に入っちゃいなさいね？」

シャマルがエプロンを脱ぎながら言う

「はい」

ヴィータがやけに素直に返事をする

「明日は朝から病院です。あまり夜更かしされませんよう」

シグナムが読んでいた新聞を閉じながら言う

「はい！」

「では、よいつしよつと……」

シヤマルがはやてを抱える

「シグナムはお風呂どうします？」

「わたしは今夜はいい……明日の朝にするよ」

「そう？」

「お風呂好きが珍しいじゃん」

「たまにはそういつ日もあるぞ」

「それじゃあ龍くんは？」

「なああ！……」

龍ははやての言葉に耳まで真っ赤になる

そして必死に断ろうとする

「ふふっ……冗談やって。ほんまこついつこつとは面白いな」

「そうですね」

シヤマルが同意する

「ほなお先に」

「はい」

はやて、シヤマル、ヴィータがお風呂へと向かう

「今日の戦闘か？」

今までまったく喋らなかったザファイラが聞く

「聡いな…その通りだ」

シグナムは服を少しあげお腹にある傷を見せる

「シグナムの鎧を撃ち抜いたのか!？」

龍が驚きの声を上げる

「澄んだ太刀筋だった…良い師に学んだのだろうな」

シグナムは服を下ろす

「武器の差がなければ少々苦戦していたかも知れん…」

「そつか…」

「だが…それでもお前は負けないだろう」

「そうだな…」

「シグナム、今決めたんだが、次からの蒐集には俺も一緒に行く。戦力が多い方がいいだろう？」

「そうだが…大丈夫なのか？」

「ああ…シグナムたちに少し稽古してもらったからなそうそう負けないさ！」

「わかった…だが怪我だけはするなよ？ そうしたら主はやてが悲しむ」

「わかってるさ」

（俺だつてはやてを悲しませたくはないからな）

八神家 風呂場

「アハハ」

「ありがとうシヤマル…気持ちええよ」

はやての足をやさしくさするシヤマル

「なによりです」

「極楽や〜」

はやての幸せそつな声が風呂場に響いた

八神家 リビング

シグナムが闇の書を持ち…

夜空を見上げる

「我ら…ヴォルケンリッター…騎士の誇りにかけて…」

そしてシグナムはこう呟いた…

管理局本局

部屋から出てきたリンディと廊下を歩いていたフェイトがぼつたりと出会う

「あっ!」

「あっ…」

「あら〜フェイトさん」

「リンディ提督」

フェイトとリンディはその場で話し始めた

別の場所…

エレベーター内

「え？ 親子って…リンディさんとフェイトちゃんか？」

エレベーター内にはなのは、シン、エイミーがいた

「本当ですか？」

「うん。まだ本決まりじゃないんだけどね。養子縁組の話をしてるんだって…プレシア事件でフェイトちゃん…天涯孤独になっちゃったし…艦長の方からウチの子になるって。フェイトちゃんもプレシアのこととかいろいろあるし…今は気持ちの整理がつくのを待ってる状態だね」

「そうですね…」

なのはが下を向く

「…」

シンも少し暗い顔をしてうつむいていた

「なのはちゃんやシンくん的にはどう？」

「ふえ？ んと…なんだかすごくいいと思います」

「ぼくもいいと思います」

「そっか」

エレベーターが目的の階に着き三人は降りる

「でもそうなるとクロノはフェイトのお兄ちゃんということになりますね？」

「そうそう。でも結構気が合うみたいだし案外いい感じの兄妹かも」

「にははははは」

「ハハハ」

なのは、シンは確かにそうかもと思いきった

一方…

ある部屋でアースラの整備の様子を眺めるクロノ

そこにリンディとフェイトが入ってくる

「クロノ」

「艦長！…フェイトも一緒か」

「うん」

「今回の事件資料も見た？」

リンディが手に持っている携帯端末を掲げる

「はい。さっき全部」

「なのはとシンの世界が中心なんですよね？ “魔道師襲撃事件” っ
て…」

「そうね。なのはさんたちの世界から個人転送で行ける範囲でほぼ
限定されてる」

「あの辺りは本局からだとかかなり遠いですよね…中継ポートを使わ
ないと転送できない…」

「アースラが使えないの…痛いですね…」

「空いている艦船があればいいんですが…」

「長期稼働できる船は二ヶ月先まで空きがないって…」

「そうか…」

クロノが落ち込む

「というかフェイト！ きみはいいのか？」

「なにが？」

「囑託とはいえあくまできみは外部協力者だ…今回の件にまで無理
に付き合わなくても…」

「クロノやリンディ提督が大変なのに呑気に遊んでなんかいられないよ！アルフも付き合ってくれてるって言うてるし…手伝わせて！！」
フェイトが真剣な表情で訴える

「ありがたくはあるんだが…」

クロノが複雑な顔をして考え込む

「やっぱりアレでいきましょー！」

突然リンディが言い出す

「アレ？」

「フフ」

リンディの言葉にフェイトは首をかしげリンディはそれに微笑みを返していた

休憩室

そこにアースラのメンバーが集まっていた

彼らはリンディのこれからの指示を聞くために集まったのだ

「さて…わたしたちアースラスタッフは今回…ロストロギア…【闇の書】の搜索及び魔道師襲撃事件の搜索を担当することになりました。ただ…肝心のアースラがしばらく使えない都合上事件の発生地付近に臨時作戦本部を置くこととなります。分割は観測スタッフ

のアレックスとランディ」

「「はい」」

二人が返事をする

「ギャレットをリーダーとした捜査スタッフ一同!!」

「「「はい!!」」」

「司令部はわたしとクロノ執務官…エイミー執務官補佐、フェイトさん以上三組に別れて駐屯します。ちなみに司令部はなのはさんの保護を兼ねてなのはさんの家のすぐ近所になります」

リンデイが笑顔で言う

「「…えっ?…」」

予想外な司令部の位置になるのは、フェイト、シンは顔を見合わせる

「わぁー」

そしてなのははうれしそうな声をあげた

海鳴市

とあるマンション

「「うわぁ〜すごい近所だ〜」」

なのはがベランダから少し体を乗り出して言う

「本当？」

「そうだな…あそこがなのはの家だしな…」

シンが指を指して言う

「そういえばシンはなのはの家に住んでるんだよね？」

フェイトが聞く

「ああ…そうだよ。もう半年位になるかな？」

「もう家族も同然だよね」

なのはがそう言いシンに抱きつく

「そうだな…」

シンはそう言いなのはの頭を撫でる

「フフ 二人は仲が良いんだね？ 恋人みたいに」

「っ…／／／」

なのははフェイトの言葉に顔が赤くなる

「そうかな？ 一応家族みたいな感じだからこんなものじゃないかな？」

シンは首を傾げながら不思議そうに言った

「あらあら…フフ」

シンは首を傾げながら不思議そうに言った

「あらあら…フフ」

リンディは三人のやりとりを微笑みながら見ていた

エイミイは司令部のセッティングをしていた

「あれ？ ユーノくとアルフはこっちではその姿か…」

エイミイはオレンジの毛皮の子犬とフェレットに言う

「新形態子犬フォーム！」

「なのはやフェイト、シンの友達の前ではこっちの姿でない…」

ユーノは頭をかきながら言った

「きみらもいろいろと大変だね」

エイミイが少し笑いながら同情しているとなのはたちが部屋に入ってきた

「うわぁアルフちっちゃい…どうしたの？」

「ユーノくんもフェレットモード久しぶり!」

そう言いフェイトとなのははアルフとユーノに近づいていく

「かわいいだろ」

アルフはフェイトの顔を少し舐める

なのははフェレットモードのユーノに顔を押し付ける

「「あはは」」

シンはそんなユーノを嫉妬の込もった目で睨んでいた

「なのは、フェイト、シン友達だよ」

そこにクロノが入ってくる

「「はい」」

「・・・」

なのはとフェイトは元気よく返事をしたがシンは無言でユーノを睨みつけたまんまだった

「シン…どうしたんだ?」

クロノが怪訝な顔をして聞く

「…えっ？ あ！クロノ何か言った？」

「あ…ああ…友達が来たと言ったんだが？」

「そっかアリサとすずかが来たんだな…あれ？なのはとフエイトは？」

シンが辺りを見渡すが二人はいなかった

「二人ならもう友達に会いに行っただが？」

クロノが玄関の方を指差しながら言う

「そっか…」

シンは部屋を出て玄関へと向かった…

シンが部屋を出ていった後クロノはエイミィに近づき先程のシンの様子について聞く

すると…

「多分だけどアレじゃないかな？」

エイミィが一人頷きながら言う

一方

玄関

なのはとフェイトはアリサ、すずかと話をしていた

「こんにちは」

「来たよ」

「アリサちゃん！すずかちゃん！」

「初めましてってのもなんか変かな？」

「ビデオメールではもう会ってるもんね？」

「うん…でも会えてうれしいよアリサ、すずか」

「うん」

「わたしも」

フェイト、アリサ、すずかが笑顔になる

「ところでシンは？」

アリサがキョロキョロ辺りを見渡す

「そう言えばいないね…」

すずかも辺りを見渡す

「まだ部屋にいると思うよ」

「よう！アリサ、すずか」

とそこにシンが来た

「シン！」

「シンくん！」

アリサとすずかが笑顔でシンの名を呼ぶ

そしてシンも交えて少し談笑する

「フェイトさん、お友達？」

とそこにリンディがやって来る

「「こんにちは！」」

「こんにちは。すずかさんに…アリサさんよね？」

「はい…」

「わたしたちの名前…」

アリサとすずかはリンディが自分たちのことを知ってることに驚く

「ビデオメール見せてもらったの」

「そうですか」

アリサとすずかは納得の表情を見せる

「よかつたらみんなでお茶でもしてらっしゃい」

「あ！それじゃあうちのお店で」

なのはが場所を提案する

「あ、そうね…それじゃあせっかくだからわたしもなのはさんの」
両親にご挨拶を…ちょっと待っててね？」

リンディが用意をするために一度部屋へと戻る

「綺麗な人だね…」

「フェイトのお母さん？」

「あの…えっと…その…今は…まだ違う…」

フェイトが頬を少し紅く染めながらそして恥ずかしそうに言う

喫茶翠屋

「ユーノくん久しぶりだね〜」

「なんかあんたのことどっかで見た気がするんだけど…気のせいかな?」

さすがにユーノの頭を撫でアリスは子犬のアルフを抱え首を傾げていた

それを笑顔で眺めるのはたち

「あっ!」

アースラのスタッフの金髪の青年が少し大きな箱を手にとって来た

翠屋の中

「そんな訳でこれからしばらくご近所になります。よろしくお願ひします」

リンディが士郎と桃子にご挨拶をしていた

いったいどんな誤魔化し方をしたのか気になるかぎりだ…

「いえいえこちらこそ」

「どうぞどうぞ鼻屑に…」

「フェイトちゃん…三年生…ですよね？学校はどちらに？」

「はい、実は…」

そこで扉が開く音がしリンディたちがそちらを見る

するとそこには先程の青年が持っていた箱を手にしたフェイトとなのはたちがいた

「リンディ提と…リンディさん！」

「はい。なあに？」

リンディがフェイトに向き直る

「あの…これ…これって…」

フェイトが箱の中身を見せる…

その中身とは聖祥大附属小学校の制服であった

「転校手続きは取つといたから週明けからなのはさんとシンくんのクラスメートね？」

リンディが笑顔で告げる

「あら？素敵！」

「聖祥小学校ですか？あそこは良い学校ですよ。な？なのは、シン？」

「うん」

「そうですね」

「よかったわね〜フェイトちゃん!」

桃子が顔を近づけながら言う

「はい…ありがとうございます」

フェイトが制服の入った箱を抱きしめながら言った

ハラオウン家

「ロストロギア…闇の書の最大の特徴はそのエネルギー源にある…闇の書は魔道師の魔力と魔法資質を奪うためにリンカーコアを食べるんだ…」

クロノが闇の書についてエイミィに説明する

「なのはちゃんのリンカーコアもその被害に?」

「ああ…間違いない…闇の書はリンカーコアを食うと蒐集した魔力や資質に応じてページが増えていく。そして最終ページまで全てを埋めることで闇の書は完成する…」

「完成すると…どうなるの?」

「少なくとも…ろくなことにはならない…」

二人の間に重い空気が漂った

夜…

八神家

ぐっすりと眠るはやて

隣ではヴィータが寝ていたが突然目を開ける

とあるビルの屋上…

そこには闇の書を携えた四人…シグナム、シャマル、ザフィーラ、龍がいた

とそこに扉が開く音

「来たか」

「うん」

入ってきたのはヴィータだった

「管理局の動きも本格化してくるだろうから…今までの様にはいか

ないわね…」

「少し遠出をすることになるな…なるべく離れた世界での蒐集を…」

「今何ページまできてるっけ？」

ヴィータの問いに闇の書を持っていたシャマルが闇の書を開き調べる

「えっと…340ページ…こないだの白い服の子でかなり稼いだわ」

「おっし！半分は越えたんだな？ズバツと集めてさっさと完成させよう…！」

ヴィータがガッツポーズをしながら言う

「早く完成させてずっと静かに暮らすんだ…はやてと一緒に…」

少し暗い沈黙が訪れそれを破ったのはザフィーラの言葉だった

「行くか？もう余り時間もない」

「ああ。行くぞレヴァンティン！」

『Destination』

「導いて…クリアールヴィント！」

『Activation』

「やるよ…グラフアイゼン！」

『Let's go!』

シグナム、シャマル、ヴィータはそれぞれ騎士服とデバイスを展開した

「ふっ。それじゃあ俺たちも行くっか…アルビム？」

『Yes, ser.』

龍の体が蒼色の光に包まれる

光が収まると二本の剣を持ち、白い服のような騎士甲冑に身を包んだ龍が現れた

「それじゃあ夜明け時までにはまたここで」

「ヴィータ…あまり熱くなるなよ？」

「わぁーてるよ!」

「龍…気をつけるよ？」

「大丈夫だって」

その会話を最後に彼女たちは次元転移をした…

ハラオウン家

臨時作戦本部

モニターに通信が届く

「ん？」

それに気づいたエイミイはすぐにでる

「はいはい、エイミイですけど？」

「あ！エイミイ先輩！本局メンテナンススタッフのマリーです」

通信画面に緑色の髪をした女性が現れる

「先輩から預かってるインテリジェントデバイス三機なんですけど…
…なんだか変なんです…」

「え？」

「部品交換と修理は終わったんですけどエラーコードが消えなくなっ
て…」

「エラー？何系の？」

「ええ…必要な部品が足りないって…今データの一覧を…」

「あ！来た来た」

エイミイの前のモニターにデータが入ってくる

「え？足りない部品ってこれ？」

エイミィはデータを見て驚く

「ええ…これ…何かの間違いですよね？」

『エラーコードE203必要な部品が不足しています』

『エラー解決のための部品 ” CVK - 792 ” を含むシステムを組み込んで下さい』

「三機ともこのメッセージのままコマンドを全然受け付けないんです…それで困っちゃって…」

(レイジングハート…バルディッシュ…クロイツ…本気なの…？…
… CVK - 792 ……ベルカ式…カートリッジシステム…)

『 Please 』

(お願いします)

「再会、そしてお引越しの」(後書き)

次回もよろしくお願いします

「新たな力、起動なの！」（前書き）

更新です

出来は微妙かな？

「新たな力、起動なの！」

A M 6 : 3 0

八神家 はやて部屋

目覚ましを止めはやては起き上がる

「ふわあ〜」

欠伸をし隣で寝ているヴィータを笑顔で見る

そしてはやてはヴィータに布団を被せ車椅子に乗り部屋の外に出たリビングに入るとソファアに座って眠っているシグナムとシグナムの足元で丸くなって眠っているザフィーラを見つけはやては微笑んだ…

A M 6 : 3 5

海鳴市桜台林道

そこでなのは手に魔力を集中させ、魔力球を作ろうとしたがすぐに消えてしまった

それに落ち込むのは…

ユーノはそれを静かに見つめていた

AM6:41

海鳴市市街地

ビル屋上

「はっ！ふっ！はっ！」

フェイトが鉄パイプで素振りをしていた

そしてそれをアルフは眺めていた

AM6:46

海鳴市市街地

高町家

道場

「はっ！はっ！はああ！！」

シンが木刀を使い素振りをしていた…

八神家

はやてが料理をしていた

鍋で何かを煮る音や包丁で何かを切る音で目が覚めたシグナム…

「起こした？」

「あ！ いえ……」

自分に向けられた毛布を見やった後、立ち上がる

「ちゃんと自分のベッドで寝なあかんよ？ 風邪引いてまう」

「す、すみません……」

シグナムが毛布をたたみながら応える

シグナムとはやての会話で目の覚めたザフィーラも口を使って器用にたたむ

「シグナム…昨夜もまた夜更かしさんか？」

「ああ…その…少しばかり……」

「ふふっ」

シグナムが部屋の電気をつける

「シグナム、はい。ホットミルク…温まるよ」

はやてがシグナムにコップを渡す

「ありがとうございます」

「ザフィーラにもあるよ？ ほら、おいで」

そこに部屋のドアが開く

「すみません！ 寝坊しました！」

シヤマルがエプロンを片手に入ってきた

「おはよう、シヤマル」

「おはよう…ああもう！ ごめんなさいはやてちゃん」

「ええよ」

とそこに目を擦りながらヴィータが入ってきた

「おはよう」

「めっちゃ寝むそつやな？」

「ねむい」

ヴィータが眠気でフラフラになりながら台所へ行く

「もっつ！ 早く顔洗ってらっしやい！」

「ん…ミルク飲んでから……」

ヴィータはシャマルからミルクを受け取り飲み始めた

「あとは龍くんだけやな」

「おはよう……」

そこへタイミング良く龍が入ってくる

ヴィータほどではないがそれでも寝むそうにしている

「おはよう、龍くん。龍くんも寝むそうやな？」

「まあね……ふあ〜」

シグナムはそれらの光景を見、はやてから渡されたホットミルクに目を落とす

(温かい……な……)

聖祥小学校

キン〜コン〜カン〜コン〜

「さて皆さん、先週急に決まったんですが……新しいお友達がこの

クラスにやってきます！ 海外からの留学生さんです！ フェイト
さんどうぞー！！」

「失礼します」

フェイトが教室の扉を開けて入ってくる

「あの…フェイト・テストロッサと言います。よろしく願いしま
す」

フェイトが自己紹介をし、礼をすると拍手に包まれる

フェイトはそれに嬉しそうに微笑んでいた

休み時間

フェイトの回りにはクラスのほとんどが群がっていた

「ねえ、むこうの学校ってどんな感じ？」

「わたし……学校には……」

「すげー急な転入だよね、なんで？」

「その……色々あって……」

「日本語上手だね！ どこで覚えたの？」

「前に住んでたところってどんなところ？」

「えっと……いや……その……」

フェイトは次々と聞かれる質問に四苦八苦していた

「はあ……あれはちょっとまずくないか？ 止めるか」

その光景を見ていたシンは呟く

シンが動き出したのとアリサが動き出したのは一緒だった

「そろそろやめたらどうだ？ フェイトが困ってるだろう？」

「シンの言うとおりよ。転入の初日の留学生をそんなにみんなでもみくちやにしないの！」

「シン……アリサ……」

「それに質問は順番に！ フェイト困ってるでしょう？」

アリサが腕を組ながらそう言うつとすぐ近くにいた手を上げる

「はいはい！ じゃあ俺の質問から！」

「はい、いいわよ」

「むむこの学校ってどんな感じ？」

「えっ……と、わたし……普通の学校には行ってなかったんだ。家

庭教師というか……そんな感じの人に教わって……」

「そうなんだ〜」

男の子の質問が終わると次々にみんなが手を上げはじめ、あたりはまた騒がしくなった

その光景をなのは、さすが、シンは微笑ましそうに眺めていた

ハラオウン家ではクロノがレティ提督と通信をしていた

「クロノくん、駐屯所の様子はどう?」

「機材の運び込みは済みました。いまは周辺探索ネットワークを……」

「そう。ご依頼の武装局員一個中隊は……グレーム提督の口利きのおかげで指揮権が貰えたわよ」

「ありがとうございますレティ提督」

クロノが頭を下げる

「それから、グレーム提督さんのところの使い魔さんたちが会いたがってたわよ? 可愛い弟子に会いたいって」

「リーゼたちですか……あの…適当にあしらっておいていただけますか?」

クロノが少し苦笑いをしながら頼んだ

リビングではエイミーが

冷蔵庫から飲み物を取り出ししていた

そこに通信は終わったのかクロノが居間に入ってくる

「おお、クロノくん。どう？ そっちは？」

「武装局員の中隊を借りられた。捜査を手伝ってもらおうよ。そっちは？」

「よくないね…昨夜もまたやられてる…」

エイミーはソファーに座り機材を起動する

「今までより少し遠くの世界で魔道師が十数人…野生動物が約四体！」

「野生動物？」

クロノが疑問の声を上げる

それに対しエイミーはモニターに情報を出しながら説明する

「魔力の高い大型生物…リンカーコアさえあれば人間でなくてもいいみたい…」

「まさになりふり構わずだな」

「でも…闇の書のデータを見たんだけど…なんなんだろうね…これ？」

エイミイはモニターに闇の書のデータを映し出す

クロノはエイミイが持ってきた飲み物が飲みたいのかちらちらと飲み物を見ている

「魔力蓄積型のロストログア。魔道師の力の源となるリンカーコアを喰ってそのページを増やしていく」

「全ページである666ページが埋まるとその魔力を媒介に真の力を発揮する。次元干渉レベルの巨大な力をね」

ついに我慢できなくなったのか話をしながらもクロノの手は飲み物へと伸びていくがその手はエイミイに防がれる

「ん〜で、本体が破壊されるか所有者が死ぬかすると…白紙に戻って別の世界で再生する…っ」と

クロノは仕方なくソファから立ち上がり冷蔵庫へと向かう

「さまざまな世界を渡り歩き、自らが生み出した守護者たちに護られ、魔力を喰って永遠を生きる…破壊しても何度でも再生する停止させることのできない危険な魔道書…」

「それが…闇の書…！ わたしたちができるのは闇の書の完成前の捕獲？」

「そう、あの守護騎士たちを捕獲してさらに主を引きずり出さない

「といけない」

「うん」

聖祥小学校

キンコーンカーンコーン

昼休みのチャイムが鳴り、教室からなのは、フェイト、シン、さすが、アリサが手にお弁当を持って出てくる

「フェイトちゃん、初めての学校の感想はどう？」

廊下を歩きながらすすすが聞く

「歳の近い子がこんなにたくさんいるのは初めてだから…なんだかもつ…ぐるぐるで…」

「あははは」

「まあ、すぐに慣れるわよ。きつと！」

「そうだな…でも困ったときはぼくたちに言ってよ？ きつとフェイトの助けになるからさ」

「うん、ありがとう！ シン、アリサ」

フェイトが微笑みながら、そして軽く頬を染めながら言った

八神家

その一室ではシャルマルがベットに座り、シグナムがその対面に立っていた

「それじゃあはやてちゃんの病院の付き添いよろしくね、シグナム？」

「ああ。ヴィータと龍とザフィーラはもう……」

「出かけたわ」

シャルマルが隣に置いていた箱を開けながらシグナムの問いに答える箱の中にはカートリッジが入っていた

「カートリッジか……？」

「うん。昼間のうちに作り置きしておかなきゃ」

「すまん、おまえ一人にまかせっきりで」

「バックアップがわたしの役目よ気にしないで」

その言葉の後にシャルマルはカートリッジに魔力を込ませ始めた

その光景をシグナムは黙って眺めていた

聖祥小学校

「起立！ 礼！」

「」「」「さようなら」「」

子どもたちの元気な声が響き渡る

「はい、さようなら」

終礼が終わると、子どもたちは各々、帰る支度を始める

その子どもの中にはもちろんなのはたちもいた……

なのはが鞆に教科書などをしまっていると唐突に携帯から電子音が鳴った

それはクロノからのメールだった

「捜査は順調に進んでいる。きみとシンとフェイトはこちらから要請するまでは普通に過ごしてくれ。なのははまだ魔力がもどってないし、レイジングハートもクロイツもバルディッシュも修理中だ。非常時はすぐに避難するように……！ 追伸1 三機の修理は来週には終了するそうだ
追伸2 フェイトに寄り道は自由だが夕食の時間には戻ってくるように伝えてほしい」

病院

「うーん、やっぱりあんまり成果がでてないかな？」

石田先生は診断結果を記した紙を眺めながらそう言った

それを車椅子に座ったはやて、傍に立っているシグナムが聞く

「でも、今のところ副作用も出てないし……もう少しこの治療を続けましょうか？」

「はい！ あっ、えーと……お任せします」

「お任せって……自分のことなんだからもうちよつと真面目に取り組もうよ」

石田先生は一度、呆れた顔を言い聞かせるように言う

「あっ……いや……その……」

はやては一度顔を歪め、それから笑顔にして言いはなつ

「わたし先生を信じてますから……」

そうはやてに言われ、何も言えなくなる石田先生

はやてを部屋からだし、シグナムと話を始める

「はやてちゃん……日常生活の方はどうですか？」

「足の麻痺以外は健康そのものです」

「そう……なんですよね……お辛いと思いますが私たちも全力を尽くしています」

「……はい」

「今はなるべく、麻痺の進行を緩和させる方向で進めています。これから段々、入院とかを含めた辛い治療になるかもしれません」

「はい…本人と相談してみます」

高町家

「お邪魔しました」

「じゃあ、また明日ね」

「うん、また明日」

「じゃあね、二人とも」

「ばいばい」

なのはとフェイト、シンは車に乗って帰っていくはずかとアリサを手を振りながら見送る

その後、三人はなのはの部屋へと行った

「ねえ、なのはとシンは……あの人たちのことどう思っ？」

「あの人たちって……闇の書の？」

「……」

「うん、闇の書の……守護騎士たちのこと……」

「うーん、わたしは急に襲いかかられてすぐに倒されちゃったから……よくわかんなかったんだけど……シンくんはどう？」

「ぼくは……そうだね、あの人たちはそんなに悪い人じゃないと思うよ。フェイトはどうだった？ シグナムと戦ってみて」

「少し……不思議な感じだった……上手く言えないけど悪意みたいなものは全然感じなかったんだ」

「そっか……闇の書の完成を目指している目的とか教えてもらえればいいんだけど……話ができそうな雰囲気じゃなかったもんね……」

「強い意思で自分を固めちゃうと周りの言葉ってなかなか入ってこないから……わたしもそうだったしね……」

「……」

少し俯いたフェイトにシンは無言で近づき、フェイトの額にデコピンをした

「痛っ！」

フェイトはデコピンされて少し赤くなった額を手で押さえながら、近づいてきたシンを見上げる

「フェイト……今、絶対昔のこと考えてたでしょ？ ダメだよフェイト！ 過去……たしかにきみは自分を固めて話を聞かなかったかもしれない……だからってそれを後悔してもいけない……それに最後にはちゃんとなのはの言葉が届いたじゃないか！」

「うん……そうだね。だからなのは、言葉を伝えようとするのは決して無駄なことじゃないよ……わたしもなのはの言葉に揺れたから……。言葉を伝えるのに戦って勝つことが必要なら……それなら迷わずに戦える気がするんだ」

「フェイトちゃん……」

「フェイト……」

「なのはとシンが教えてくれたんだよ。そんな強い心……」

「そんなことないと思うけど……」

なのはは頬に手をあて照れる

「ぼくは何もしてないよ。なのはとフェイトががんばった結果だよ」

「ふふっ」

フェイトはなのはが照れたのを見て笑いだす

「だから……強くなるよ。想いを貫くために！」

「そうだね、わたしももっと強くなる！」

「ほくももっと強くなるよ。みんなを守れるくらいに！」

「これからがんばろう!! フェイトちゃん、シンくん」

「うん、がんばろう。なのは」

「そうだね……」

図書館

すずか図書館で一冊の本を手に取り、読んでいた

そんなすずかがふと目をあげると車椅子に乗ったはやてとその車椅子を押しているシグナムがいた

「はやてちゃん！」

「すずかちゃん！」

「すずかちゃん、今日は何借りたん？」

「うん、童話の本なんだけど……なんだかちょっとジーンとくる感じの本なの」

「わあー 童話ならわたしも好き！ おもしろそうやね」

「読んでみる？ 一巻がまだ棚にあったよ」

「うん、後でしてみる」

「はやてちゃんも童話好きなんだ」

「めっちゃ好き！ それどついうお話なん？」

「ふふつ、それは読んでからのお楽しみ」

シグナムは二人の会話を聞きながらわずかに微笑んだ

とある次元世界

雷鳴が轟き、荒野には、甲羅を持った亀のような生物が倒れていた。その甲羅の上では、ヴィータと龍がそれぞれデバイスを杖にして肩で息をしていた

そして、生物の体から光輝くリンカーコアが浮かび上がり、上空にいるザフィーラのもとへとむかう

「闇の書、蒐集」

『Collecting』

(蒐集)

蒐集が終わると、ヴィータと龍はそれぞれ、デバイスに消費した分のカートリッジを補充する

どちらも手作業だ

「今ので3ページか……」

「くっそ……でっけー図体してリンカーコアの質は低いだよな。ま、魔導師相手よりは気楽だし、効率もいいし……」

「そうだな……魔導師相手に下手に殺さないように手加減して戦うよりは楽でいいよな。ま、とりあえず次行こうぜ!」

「……ヴィータ、龍休まなくて平気か?」

ザフィーラの問いかけにヴィータは背中を向け、グラーフアイゼンを肩にかけて答える

「平気だよ。あたしだって騎士だ! あの程度の戦闘で疲れるほどやわじゃないよ!」

そうヴィータが答えるのを聞きながら龍は二本の剣を両腰に下げたある鞆に納める

「そうだぞ、ザフィーラ。このくらいで疲れてたんじゃ、はやては助けられないからな」

そう言つて龍は先に歩き始めたヴィータに続くように歩き始めた

ザフィーラも大丈夫であると判断し、それに付いていった

数日後

時空管理局本局

「ありがとうございます」

なのはは医師にお礼を言い、部屋を出ると、シン、フェイト、ユノ、アルフが走って来ていた

「なのは！」

「検査結果どうだった？」

「無事完治！」

なのはが笑顔で答える

「よかった……」

「こつちも完治だつて！」

フエイトがそう言い、レイジングハート、バルディッシュ、クロイツを見せた

地球 海鳴市

「そう、よかつた〜今どこ？」

数多のモニターが存在する部屋で、コンソールを操作しながらエイミーがなのはたちの現状を聞き安堵する

《今、二番目の中継ポートです。あと十分くらいでそっちに戻れますから……》

「そう、じゃあ戻ったらレイジングハートとバルディッシュとクロイツの説明を………あつ！」

その時突如警報が鳴り響いた

「こりゃマズイ！ 至近距離にて緊急事態！！」

エイミーは慌てて機材を動かし始めた

ハラオウン家の居間では、突如鳴り響いた警報により、リンディが

険しい顔をしていた

そこに、武装局員から通信が入る

《都市部上空にて、搜索指定対象二名を補足しました。現在、強装結界内部で対峙中です!!》

「相手は強敵よ！ 交戦は避けて外部から結界の強化と維持を！！
現地には執務官を向かわせませす！」

都市部上空ではヴィータとザフィーラが十数人の武装局員に囲まれていた

「くっ……!!」

「管理局か……?」

「でもチャライよこいつら。返り討ちだ！」

ヴィータがグラーフアイゼンを構えながら言っが局員たちは離れていく

「え？」

「上だ！」

ザフィーラに言われ、上を見上げるヴィータ。

そこにはクロノが魔方陣を展開し、多数の剣の形をした魔力弾を形成していた

「ステインガーブレイド、エキュスキューションシフト！ 行けえ
！！」

クロノがデバイスを振り下ろすと、多数の魔力弾がザフィーラとヴィータに殺到した

「ちいっ！」

ザフィーラはヴィータの前に立つと障壁を展開した

そして迫り来る魔力弾は次々と障壁にあたり、爆発した

「はぁ…はぁ…少しは…通ったか」

爆発した影響で発生した煙が晴れると障壁を抜いてザフィーラの腕に二本の魔力弾が刺さっていた

「ザフィーラ！」

「大丈夫だ…この程度でどうにかなるほど…ヤワじゃない！！」

ザフィーラはそう言うのと腕に力をいれ、魔力弾を破壊する

「上等！！」

それを確認したヴィータはクロノを見上げ、軽く睨む

「武装局員配置完了！ OKクロノくん！」

《了解!》

「それから現場に今、助っ人を転送したよ」

「えっ?」

クロノがエイミィに言われた事に驚き、探すとビルの上に助っ人がいた

「なのは、フェイト、シン!」

「アイツら!?!」

いきなり現れたなのはたちにヴィータたちもまた驚いていた

「レイジングハート!」

「バルディッシュ!」

「クロイツ!」

「セーフ!」

「Order of "set up" was accepted.

「Operating check with the new system has started」.

「Exchanged parts are in green

Condition.」

「なんだ？」

「こ、これって……」

「今までと……違う！」

《三人とも落ち着いて聞いてね。レイジングハートとバルディッシュとクロイツは新しいシステムを積んでるの！》

「新しい……システム？」

《その子たちが望んだの……自分の意思で……自分の思いで……！》

「」「」「」

《呼んであげて！ その子たちの新しい名前を……！》

Condition All Green. Get set.

Stand by. Ready.

「レイジングハート・エクセリオン！」

「バルディッシュ・アサルト！」

「クロイツ・ヴァルキリー！」

Drive Ignition.

デバイスとバリアジャケットを展開した

「アイツらのデバイス……あれってまさか!」

ウィータがなのはたちのデバイスを見て驚愕する

『Assault Form・Cartridge set』

『Axel Mode・Standby・Ready』

『Cross Form・Are you ready?』

三人はウィータとザフィーラに向けて各々のデバイスを構えた……

「新たな力、起動なの！」（後書き）

な「わたしたちのデバイス少し変わったね」

フェ「ふふ、そうだね」

シ「デバイスだけじゃないよ！ バリアジャケットも微妙にだけど変わってる」

な「そうだったね。そういえばシンくんのデバイスのカートリッジってどうなってるのかな？」

フェ「わたしたちのはアニメを見れば分かるけど…気になるよね」

シ「ぼくのデバイスのカートリッジはマガジンを使つてのオートリロードだよ。なのはみたいにマガジンをつけたまんまだと剣にして戦いづらいし、フェイトみたいなリボルバーだと砲撃の準備しながらリロードができないから以後の話で困るって作者が言ってたよ。だからオートリロードなんだって」

な&mp;フェ「へ〜」

シ「そういえば、次は彼女たちと戦闘だね」

フェ「そうだね」

な「お話…聞けたらいいんだけど……」

フェ「大丈夫だよ、なのは。一緒にがんばろう」

な「うん、フェイトちゃん」

シ「それじゃあそろそろ……じ」

り「次回！それは小さな願いなの（仮）」

は「ぜひ読んでな」

な& a m p ;フェ& a m p ;シ「誰〜!?!?」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6908/>

魔法少女リリカルなのは～銀色の魔道師～

2011年7月29日11時03分発行